

博士論文 2019 年度

自由行為の哲学

——初期ベルクソン哲学における時間と空間——

慶應義塾大学大学院文学研究科

哲学・倫理学専攻 哲学分野

岡嶋隆佑

自由行為の哲学

——初期ベルクソン哲学における時間と空間——

岡嶋隆佑

目次

序.....	5
第1章：自由行為の事実——『試論』から1894年の講義まで.....	10
1-1：『試論』の諸概念.....	10
1-1-1：意識の諸状態.....	10
1-1-2：二つの多様体、持続と空間.....	14
1-1-3：自我の二つの相.....	15
1-2：自由行為とは何か.....	16
1-2-1：決定論.....	17
1-2-2：自由意志説.....	18
1-2-3：自由行為.....	20
1-3：カント哲学の観点から.....	22
1-3-1：『試論』と『純粹理性批判』講義.....	22
1-3-2：心理学講義——「自由」.....	26
1-3-3：『物質と記憶』解釈に向けて.....	28
第2章：常識と形而上学——『物質と記憶』の方法と出発点.....	33
2-1：二著作の一貫性.....	34
2-1-1：自由行為.....	34
2-1-2：常識.....	34
2-2：『物質と記憶』の方法論.....	35
2-2-1：常識から形而上学へ.....	36
2-2-2：なぜ常識が出発点となるのか.....	38
2-3：MMの出発点.....	39

2-3-1：実在論と観念論——「脳と思考」	39
2-3-2：常識の必然性	41
2-3-3：事実の線と懐疑	44
第3章：自由行為の可能性の条件——常識の認識論	49
3-1：諸概念の導出	49
3-1-1：知覚	49
3-1-2：情感	53
3-1-3：記憶	55
3-1-4：逆円錐	55
3-2：記憶と記憶力の二つの形式	57
3-2-1：習慣と出来事	57
3-2-2：習慣的記憶力と純粹記憶力	58
3-3：習慣的記憶力の諸相	59
3-3-1：自動的再認	59
3-3-2：運動図式	61
第4章：時空概念の改変と記憶の形而上学	64
4-1：行動の時空間	64
4-1-1：知覚における反射と時間的距離	64
4-1-2：行動空間	66
4-1-3：行動時間——「私の現在」①	68
4-2：純粹記憶の存在論	70
4-2-1：連合主義批判 ①	70
4-2-2：現在と過去の本性の差異	70
4-2-3：純粹記憶の残存	72
4-3：意識の諸平面の理論	73
4-3-1：連合主義批判 ②	73
4-3-2：意識の諸平面	74
4-3-3：注意的再認	78
4-4：『物質と記憶』の時間意識論	80
4-4-1：ジェイムズ『心理学原理』における「見かけの現在」	81
4-4-2：「私の現在」②	82

第5章：物質の形而上学.....	87
5-1：純粹知覚理論.....	87
5-1-1：知覚と情感——二つの距離.....	87
5-1-2：意識的全体としての物質.....	89
5-1-3：脳の役割——選別.....	92
5-2：収縮理論.....	93
5-2-1：『物質と記憶』における多様体の問題——質と量.....	93
5-2-2：三つの記憶力——心身の結合.....	98
結語——行為の形而上学に向けて.....	103

序

アンリ・ベルクソン（1859-1941）の第二の主著『物質と記憶』（以下 MM と略記）の末尾から引用する。

こうして、自由は、時間においても、空間においても、常に必然性の中に深い根を下ろし、必然性と密接に組織されているように思われる。精神は物質から知覚を借り受けて、それを自分の糧とする。そして知覚を改めて運動の形で物質に与え返すのだが、そこにはもう精神の自由が刻まれているのである（L'esprit emprunte à la matière les perceptions d'où il tire sa nourriture, et les lui rend sous forme de mouvement, où il a imprimé sa liberté）（MM, 280）。

強調したいのは、同書が「自由」の一語でもって締めくくられているという事実である。このことは、一見したところ奇妙に思われるだろう。周知のとおり、自由ないし「自由行為（acte libre）」は、前著『意識の直接与件についての試論』（DI）の主題であって、MM の主要な問題は、副題にも示されているとおり、「身体と精神の関係」、つまり伝統的な心身問題である。それなのに、なぜ自由なのか。偶然であって、意図はない、そう思われるかもしれない。だが少なくとも、一般に主著と見做されているその他の三つの著作について、ベルクソンは明らかに最後の単語を選んでいる。DI における「質と量」、『創造的進化』（EC）における「アリストテレス」、『道徳と宗教の二源泉』（DS）における「神々」は、いずれも、各著作にとって一定の重要性をもつタームである。しかし少なくとも形式上、MM は自由について、そう多くの紙幅を割いているわけではない。自由についてのいくらかの論述が見られるのは、第四章前半で前著を振り返る場面と上の引用部に対応する同章後半部だけである。しかし逆に、表立っては論じられていない自由が、DI だけでなく同書においても鍵概念であるとしたらどうか。それどころか、自由の問題は、DI と MM という初期ベルクソンの二つの著作の一貫した主題なのではないか——本稿は、こうした作業仮説の下、DI と MM というベルクソンの最初の二つの著作²に、自由行為という観点からひとつの読み筋を与えつつ、その過程で提示される時間と空間に関わる諸論点——知覚、記憶、再認、意識の諸平面、物質等々——について一貫した理解を与えることを目的とするものである。

¹ 主要著作の略記号および記載方法については本論末尾を参照（本文での日本語での著作名の表記は、初出の場合にのみ行う）。

² 本稿の副題にある「初期」とは基本的にこれら二つの著作の書かれた時期を指している。ベルクソン哲学についてこのような区分を設けること（とりわけ MM を初期と呼ぶこと）はあまり一般的ではないと思われるが、自由行為という問題を二つの著作の主題と捉えるのであれば、この区分けには一定程度正当性が認められるだろう。

全体を通じて示したいのは次の三点である。

(1) 第一に、DIが自由行為を「最も明白な」「事実」として「確認」(DI, 166)しているのに対し、MMはそれが可能であるために必要な諸条件の探求として読むことができるという点。このうち前半はDIに目を通せば容易にわかることだが、後半はMMに明示されていることではないため、本稿が全体を通じて正当化を試みる解釈上の仮説となる。

(2) 第二に、二著作間には、空間および時間に関して、ベルクソンの理解の深化が見られるという点。DIは我々人間の内的意識を主な考察対象としていたため、その観点から語られる自由行為は、外界と結びつきをもたず、いわば宙に浮いている状態であった。MMは実践的な観点から外的知覚の条件としての空間概念そのものを改変しつつ、そのことによって同時に、等質的時間および持続に新たな規定を与えるに至っているのである。

(3) 最後に、以上二つの論点についての考察にとっての最も大きな枠組みとなっているのは、カント哲学であるという点。DIが時間、MMが空間という論点において、それぞれ自説を超越論的感性論と対比させていることはテキストに明示されていることだが、それ以外の様々な論点——物自体や自我、自由、図式、構想力等々——についても初期ベルクソン哲学は第一批判のフレームを継承していると言って良い。とりわけ、MMにおいて、知覚や記憶力が「有用な行為」に向けられたものであることが繰り返し強調される時、それと対比される「純粋な認識」(cf. MM, 7, 24, 27, 208, 223, 256, 260)が、第一批判的な意味での「判断」のことを指していることを考えれば、(1)の論点は、一旦アプリアリな総合判断の成立を想定した上で、それがいかにして可能か、その権利を問題にしたカントの歩みと並行的なものと考えることができる。

本稿全体の目的と、以上の各論点について、関連する主要な解釈と対比することで、先行研究に対する本稿の位置付けを述べておこう。

まず、全体の目的について。自由という主題が、DIだけでなくMMにも関わるものであるということ自体は、後の書簡や対話の中で回顧的に述べられていることではある。例えば、アドルフォ・レヴィ宛ての書簡においてベルクソンは、DIで提起された「自我と自由についての考え」は「自由な人格は、行為するために、いかにして物質的な身体を利用し、空間において展開されるかという問い」を残しており、「そのことから『物質と記憶』に通じる一連の新しい研究が始まったのです」(C, 114)と述べている³。それゆえに、こうした発言を念頭に置き

³ シュヴァリエとの対話の中にも次のような発言がある。「私は『試論』出版の以前から、『物質と記憶』に取り掛かっていたと言いましたが、それは、私が『試論』を出版する前に寝かせておいて、そこで生じたいくつかの問題について考えていたからです。さて、私は『直接与件』のいくつかの結論が、身体と精神の関係についての特別な研究を要請することに気づきました。というのも、私は精神的事実としての自由[...]に到達していたからです」(Chevalier[1959], p. 278)。

つつ、自由を契機として二つの著作の連続性を指摘するような研究は一定数存在する⁴。しかし、具体的に言ってMMはどのようにしてDIの結論を引き継いだのか、とりわけ二つの著作の間に存在するように思われる矛盾をどう解消するのか、といった点を詳細に検討する試みは未だ為されておらず、この点で、MMを自由行為の可能性の条件を探求する著作として位置付ける本稿の解釈は、先行研究と差別化できる。

また(1)の方針は、ジル・ドゥルーズの『ベルクソニズム』と明確に対立するものである。同書においてドゥルーズが、逆円錐図によって示される純粹記憶理論を存在論的に読み込み、ECや『持続と同時性』も含めて一元論的なベルクソン像を提示したことは良く知られている。しかしこれから示すとおり、ベルクソン自身にとって記憶力とはまずもって行為に向けられたものであって、あの有名な図も、ひとまずは実践的な観点から読まれるべきものである。行為か観照か、あるいは多元論か一元論かといった、両者の哲学全体についてのいくつかの対立点については、すでに一定の考察がされている⁵。だがMMに限って具体的にどのような対立があるのかということを示すような研究は——潜在性概念といった個別のトピックを除けば⁶——いまだ行われていない。自由行為という観点から初期ベルクソン哲学に一貫した読みを与える本稿は、全体としてドゥルーズ的な解釈へのアンチテーゼを成すものであり、とりわけMMについては、現在でも未だに支配的な彼の解釈とは全く違った側面がそこに潜在していることを示すことになるだろう。

(2)について言えば、本稿は、フレデリック・ヴォルムスの『ベルクソン、あるいは生の二つの意味=方向』の方針と親和的である。それによれば、ベルクソンにとって生命の働きはそれ自体が実在である一方で、その実践的な性格のために実在の認識を歪曲する要因でもある⁷。とはいえ、同書は、四つの主著の全てに対しこうした観点からひとつの読み筋を与えるという性質上、DIからMMへとどのような仕方でベルクソンの思索が発展したのかまでは示せていない。この観点からすれば本稿は、自由行為の事実確認とその可能性の条件の探求という仕方で両著作を接続することで、ヴォルムスが引いた解釈路線を継承・発展させる試みとして位置付けることができるだろう。

⁴ 例えば、Hyppolite [1971] (p. 472) は、MMの主題を「我々の自由の物質的存在への挿入の問題」と特徴づけている。なお石井 [2001] (pp. 11-12) は、こうした理解を「研究者たちのあいだ」の「共通見解」としてまとめた上で、そうした観点からは軽視されがちであった、同書の知覚論や記憶論の重要性を強調する仕方で議論を展開している。これから見るとおり、本稿も知覚論や記憶論の重要性それ自体は、全く否定しない。しかし、一冊の著作として見た場合、MMの根底にあるのは自由行為の問題であり、知覚や記憶についての議論も、その一部に含まれるというのが本稿の立場である。

⁵ この点については、藤田[2009]、Riquier[2008]を参照。

⁶ 村山[2016]は、ドゥルーズがベルクソンから引き出したと一般に理解されている意味での「潜在性」概念は、実はMMには見出すことができないということを示している。

⁷ cf. Worms[2004], pp. 11-12.

最後に (3) の論点については、バルテルミ・マドールの『カントの対抗者ベルクソン』や杉山直樹の『ベルクソン——聴診する経験論』を筆頭に、すでに一定の研究の蓄積があると言って良い。とりわけ後者の諸解釈は、本稿も負うところが大きいですが、必ずしもベルクソンのテキストを網羅的に扱っているものではない。以下で提示する空間および時間、そして多様体についての議論はその補完となるべく書かれている。

具体的な議論の構成は次のとおりである。

第1章「自由行為の事実」では、DI から MM 公刊直前期の講義録までを考察対象として、本稿にとって最も重要な自由行為の概念を中心に、続く議論にとっての予備的考察を行う。まず、意識の諸状態の区分、多様体、持続と空間、自我等の DI 第二章までの基礎概念を導入した上で (1-1)、DI 第三章で自由意志説および決定論批判の後で提示される「自由行為」の概念について詳細に注釈を与える (1-2)。さらに、MM への移行期に行われた『純粹理性批判』講義と心理学講義を参照することで、カント哲学の観点から DI の主張を整理し直す。具体的には、持続ないし深層自我と、感性の形式としての時間の関係を明確にし、外的対象としての物自体を扱うことになる以降の議論に見通しを与えておく (1-3)。

第2章「常識と形而上学」では、MM の議論の前提となっているいくつかの事柄を明確にし、DI と MM を一貫して読もうとする本稿の解釈に予想される懸念を解消した上で (2-1)、MM が採用している方法論を明確にし、常識と形而上学という二つの観点の区別を導入する (2-2)。その上で、同書第一章が常識という一見哲学的に洗練されていない観点から議論を始めていることについて一定の正当化を行いたい (2-3)。

第3章「自由行為の可能性の諸条件」では、常識の観点を問題にする MM 第一・第二章の諸議論を、自由行為がいかにして可能かという問いへの応答として読み解いていく。MM 第一章は自由行為が可能であるための第一の条件として、行為の選択肢の提示という論点を扱うものとして読めるが、その過程で導出されるのが、知覚や情感、記憶といった MM およびその後のベルクソン哲学にとっての基礎的な概念であることを確認する (3-1)。さらに、行為の選択という第二の条件に相当するのが MM 第二章で提示される記憶理論であることをその内実と共に示した上で (3-2)、二種類の記憶力のうち、常識の観点だけからさしあたり考察が可能な習慣的記憶力について、形而上学の観点への移行を見据えつついくつかの必要な理解を提示しておく (3-3)。

第4章「時空概念の改変と記憶の形而上学」では、まず、ベルクソン自身はあまり明示的でない身体的行為と相関的な空間および時間の理解を明確にすることで、常識から形而上学への観点の移行のための土台を確保する (4-1)。その上で、MM 第三章で提示される純粹記憶の存在論 (4-2)、そしてそれを基礎として提示される「意識の諸平面」の理論を考察する (4-

3)。また最後に、ジェイムズ『心理学原理』における「意識の流れ」をめぐる議論との対比を通じて、MMで明示的には示されていない、ベルクソンの時間意識論の骨子を示したい。

第5章「物質の形而上学」は、MM第一章で提示されながらも、常識の観点からは考察ができなかった純粹知覚理論(5-1)および収縮理論(5-2)を検討する。両者は、行為の選択肢の提示という自由行為の可能性の第一の条件の一部であるため、これらの考察をもって、本稿全体の目的は達成されたことになる。

議論に進む前に、三点、本稿の性格について断っておきたい。

まず、主に本稿第3章以降で扱う記憶に関する議論について。MMは周知のとおり、生理学、神経学、心理学等の様々な科学的言説についての膨大な量の文献に言及しているが、本稿はそれらについて説明上必要な限りでしか言及しない。ベルクソン自身はそうした諸科学の事実への参照が自説の実証につながると考えていたのだが、関連する多くの研究ならびにベルクソンによる解釈は、当時は記憶についての実証的な研究がまだ黎明期にあったということもあり、現在ではそのまま支持できるようなものではないからである⁸。

第二に、本稿は基本的に、テキストの解釈を目的とするものであって、ベルクソン自身が言及していない論者との比較や過度な再構成は行わない。このことは、もちろん、(例えば)現代的な観点から言って⁹これから提示する議論に全く見込みがないということではないが、そうした外在的な視点の導入に先立って、ベルクソンのテキスト内部で明確化の必要な論点・議論が山ほどあるというのが、本稿の認識である。それゆえ、以下で提示するいくつかの見解は、哲学上の議論としては脆弱であるように思われる点も存在するが、それらについては適宜注で補足することにし、まずはベルクソン自身が何を主張しているのかということの問題とした

い。

最後に、扱うテキストの範囲等について。本稿は以上に述べた論旨の都合上、基本的にはDIとMMおよび両著作の執筆時期になされた講義の記録に、考察の対象を限定する。基本的にはというのは、二つの著作の理解にとって有用でありかつこれらの著作の執筆時からベルクソンの見解に変化が見られないと思われるものについては、この時期以外のテキストも一部参照しているためである¹⁰。

⁸ Francotte[2004]はこの点について、MM出版後から現在に至るまでの間に(とりわけ)神経科学者たちによってなされた批判を包括的に取り上げている。

⁹ 岡嶋[2016a, b]では、むしろ積極的に現代的な観点からの再構成を試みている。

¹⁰ こうした観点からすると、DIの副論文である『アリストテレスの場所論』は、本来扱うべきだろうが、紙幅の都合から割愛せざるを得なかった。同論文と本稿の主張の関係についての考察は別稿に譲りたい。

第1章 自由行為の事実 —— 『試論』から1894年の講義録まで

本章は、ベルクソンがDIにおいて提示した「自由」ないし「自由行為」¹¹という概念の内実の解明を目的とする。その具体的な作業は本章第2節で行われるが、当然ながらこれらの概念は同書のその他の概念と密接な連関の下で提起されたものであるから、先立つ第1節でそれらの確認作業を行なっておく。自由行為についての考察を終えた後、第3節では、DIの出版後、1894年に行われた二つの講義を参照しつつ、MMに移行する以前のベルクソン哲学の諸概念を、カント『純粹理性批判』の諸論点と対比することで、次章以降の考察への枠組みを与えたい。

1-1：『試論』の諸概念

ではまず、続く議論に必要な範囲で、意識の諸状態の区分(1-1-1)、多様体、持続と空間(1-1-2)、自我(1-1-3)等のDI第二章までの基礎概念を導入しておこう。

1-1-1：意識の諸状態

DIの最初の章の目的は、我々の意識の状態が本来有している「質(qualité)」ないし「強度(intensité)」が、いかにして「量(quantité)」ないし「大きさ(grandeur)」と混同されてしまうのか、そのプロセスを詳述することである。その際ベルクソンは、我々の意識状態に、五つの区分——(i) 表象的感覚、(ii) 情感的感觉、(iii) 表層的努力、(iv) 中間状態、(v) 深い感情——を設けている¹²。これらの区分は、DIの理解にとってはもちろん、(そのうちのいくつかは)MMの解釈にとっても必要なものであるため、各々の段階におけるベルクソンの考察を、本稿にとって必要な限りで手短かに確認しておきたい。

(i) 表象的感覚(sensation représentative)

まずは表象的感覚から。これは、その名のとおり、外的事物を表象する感覚を意味する。ベルクソンは、その典型として、「光の感覚」を取り上げ、「ひとつの白い面が継起的に様々な度合いの光度を経由していく」(DI, 38)という場合を検討している。この極めて「単純な場合」について、「精神物理学者たち」は、「物理学が、光の強度の度合いを、真の量として語る」のと同様に、「我々の眼それ自体が、光の強度を評価しているのだと主張する」(DI, 39)。しかし、ベルクソンによれば、そのような評価が可能なのは、光の様々な強度の変化に

¹¹ これから見るとおり、DIは行為の質のうちに自由を見るという主張を提示するため、実質的にはこれらの語彙は同義語である。ベルクソンは、取り立てて行為という側面を強調する必要がない場合や、必然性などの他の語彙とセットで用いる場合に、「行為」の部分省略しているように思われるため、本稿でも同様の仕方これらの語を用いることにしたい。

¹² この区分は、平井[2002] (訳注, p. 264) によるものである。

光源の数の変化が伴っていることを「過去の経験」(DI, 40)によって我々が「知っている」(DI, 39)からであって、そうした「記憶」や「習慣」を「捨象」するのであれば、「あるひとつの面を照らす白色光が次第に弱まっていく際に辿る諸々の強度」は、「その各々が別のニュアンスであり、それらはスペクトルの多様な色に酷似している」(DI, 40)という。要するに、表象的感覚という水準において、我々は、感覚の原因の数としての量と、結果である感覚が呈する一定のニュアンスとしての質を混同してしまっている、というわけである。

(ii) 情感的感覚 (sensation affective)

外的事物に関わる表象的感覚と対照的に、我々の身体内部の運動を対象とする感覚は、情感的感覚と呼ばれる。「快」や「苦痛」を典型とするこの意味での感覚は、通常、「神経の震動」に「対応」するもの、あるいはそれを「翻訳・表現」するものと見做される (cf. DI, 24)。DI も、そのこと自体は、否定しない。しかし、ベルクソンは、そうした震動は「分子運動としては無意識的である」と付け加える。というのも、身体内部で現に生じている、あるいはすでに完了した——つまり「現在」や「過去」の——分子運動は、「もはや我々に依存したものではない」以上、我々にとって何ら「有用な (utilitaire)」ものではなく、したがって、意識に昇る必要がないからである。では情感的感覚において意識されるのは、正確に言って何であるのか。ベルクソンによれば、それは「経験される感覚が内包する未来の自動的な諸運動の素描」である (DI, 25)。情感的感覚の「役割」は、そうした諸々の「可能的運動」の間で「我々にひとつの選択を促す」(DI, 26) ことなのである。そしてこのように考えることで、この区分における質と量、強度と大きさの混同のプロセスが理解可能となる。「あるひとつの神経が、どんな自動的反応からも独立したひとつの苦痛を伝達すること」、あるいはまた「その神経に、大小様々な刺激が異なる仕方で影響を与えること」が考えられる以上、個々の情感的感覚は、それ自体では、表象的感覚と同様に、「ひとつの質」であって、いかなる大きさももたない。しかし大抵の場合、情感的感覚には、「筋肉収縮」を典型とする「あらゆる種類の身体的運動」が「随伴」する。それゆえに我々は、例えば「苦痛の強度を、それに関わる有機体の部分の大小によって評価する」のである (DI, 27)。

(iii) 表層的努力 (effort superficiel) ないし筋肉の努力 (effort musculaire)

表層的な努力とは、何かを持ち上げたり、拳を握る場合などに与えられる筋肉の努力感覚のことである。(例えば)「拳を『次第に強く』握りしめる」とき、我々は通常、「努力の感覚」が「手の内に丸ごと局所化されて、その大きさが継起的に増大して行く」と思っている。「しかし現実には、手はつねに同じものを感得している」のであって、努力感が増大していくように思われるのは、「最初手に局所化されていた感覚が腕を襲い、肩まで昇り」「遂には、反対の腕もこわばり、二本の足もそれを模倣し、呼吸は止まってしまう」(以上、DI, 18) などといった関与する身体の「面積の増大」が、そこに伴っているからなのである。それゆえ

「筋肉の努力の増大についての我々の意識は、末梢神経の数の増加ならびに、それらのあいだで生じる質的な変化についての二重の知覚に還元される」、とベルクソンは主張する。要するに、筋肉の努力の強度の変化そのものは質的なものなのだが、そのプロセスには関与する身体の面積の増大という「量の変化」が必ず伴っているために、後者が前者と取り違えられてしまうのである（以上、DI, 19）。

したがって、身体の面積が成す量が、意識それ自体の質と混同されるという点を、情感的感覚と筋肉努力という二つの水準は共有している。だが、情感的感覚が受動的なものであるのに対し、筋肉の努力は能動的であるという点において、両者は明確に区別することができる。言い換えれば、前者で問題となる身体の運動が「不随意」なものであるのに対し、後者の場合、プロセスの全体で見れば、「意志」（DI, 15, 17）¹³が介入するような運動が問題になっているのである。

(iv) 中間状態 (état intermédiaire)

以上にみた表層的努力が、(a) 「純粋に思弁的な観念」、あるいは (b) 「実践的次元の表象」（DI, 20）によって秩序づけられた状態が、（次に見る深い感情と表層的努力の間に位置付けられるという意味で）中間状態と呼ばれる。

まず (a) の場合に問題となるのは、一般に「注意」ないし「緊張」と呼ばれる現象である。何かを「想起」しようとしたり、何かに「意志的注意」を向けようとするとき、確かに我々は、ひとつの「観念」に関わり、それに関係のない「それ以外の全ての観念」を排除しようとしている。しかし、同時に、それには「さまざまな運動が伴っている」。リボーは次のように書いている。「注意は前頭部を収縮させる。この筋肉は [...] 眉を自分の方に引き寄せ、それを持ち上げ、額を横切る皺を刻む [...]。それが極まると口が大きく開くのである」（DI, 21）。

他方、(b) における中間状態は、「強烈な欲望」や「抑えきれない怒り」（DI, 21）など、「激しい情動 (émotion violente)」（DI, 23）とまとめられるような意識状態である。そうした情動は、さしあたり、それに対応する筋肉努力を秩序づけているのが「行為に関わる無反省的な観念」（DI, 21）であることによって注意や緊張から区別できるだろう。というのも、後者の場合に問題となっているのは（記憶がその典型であるような）「認識に関わる」「反省された観念」だからである。

とはいえ、両者の間に、「本質的な相違はない」（DI, 23）とベルクソンは言う。というのも、いずれにせよ問題となっているのは、「ひとつの観念によって秩序づけられた様々な筋肉収縮のシステム」（DI, 21）だからである。例えば、何かに「激怒」する場合であっても、

¹³ さしあたりここで問題にしたいのは、不随意運動と随意運動というごく一般的な区別であって、意志というタームには自由意志のようななんらかの形而上学的な含意はないことには注意されたい。

「心臓の鼓動が速く」なったり、「身体全体が震え」(DI, 21) たりすることはごくありふれた事実であって、そうした様々な「身体的振動」を、我々は「関わる面積の数と延長によって容易く測定する」(DI, 22)。それゆえ、(a) (b) いずれにおいても、意識状態の進展には、身体的な面積の増大(ないし減少)が伴っており、これが量の役割を果たしている。たしかに、この水準においては、(iii) の場合と異なり、筋肉収縮を秩序づける観念という「純粋に心理的な要因」(DI, 21) が介入している。にもかかわらず、そうした心理的な要素および身体運動が本来は有している質ないし強度は、上述の身体に由来する数や延長が成す量と混同されてしまう、というわけである。

(v) 深い感情 (sentiment profond)

最後に深い感情について。これは「深い情念」に捕らわれることによって、あらゆる感覚や観念が「一新されたように見える」(DI, 6) といった場合や、「芸術作品」によって示唆された観念によって「魂の全体」(DI, 13) が満たされるような場合(「美的情動」)の意識状態を指す概念である(その他、「喜び」や「悲しみ」、「希望」、「道徳的感情」もこれに区分される)。ベルクソンによれば、深い感情は、「その外的な原因とは密接には結びついていないように思われるし、また筋肉収縮の知覚も内包していないように思われる」(DI, 15)。だがそうだとすれば、我々は、どうして悲しみや喜びについて、それらが「魂に大きな場所を占めている」だとか、「その全面を覆っている」(DI, 7) などと言う場合のように、その大きさを語るができるのだろうか。それは、深い感情そのものが、「多数の単純状態 (grand nombre d'états simples)」から成る「複合状態」であるためである。ここで単純状態とは、(表象的および情感的) 感覚を典型とする、個別に見れば自分自身以外の何かをその内に含んでいないような意識状態のことを指す。議論の明確化のため本稿では、単純状態が呈する質を単質な質、複合状態が呈する質を複合的な質と呼ぶことにしよう。

さて、深い感情において、そうした単純状態は本来、「相互浸透」(DI, 13) しているのだが、我々の意識は「はっきりとした区別を好む」(DI, 7) ために、それらを切り分け、そこから量を構成することができる。そしてその結果、(例えば) 悲しみについて大きさを語るようになってしまうのである。だが、この最後の論点、すなわち、深い感情における量ないし大きさが正確に言ってどのようにして可能となるのかと言う点について、DI 第一章の記述は不明瞭なままに留まっている。意識の複合状態、すなわち「内的多様体のイメージの本質は何に存するのか、それは数のイメージと合致するものなのか、それとは根本的に異なるものなのか」(DI, 54) という問いは、多様体を主題的に扱う同書の第二章に引き継がれるのである。

1-1-2：二つの多様体、持続と空間

そこで以下、「質的多様体 (multiplicité qualitative)」と「数的多様体 (multiplicité numérique)」の区別について、「鐘の音」(DI, 64)の聴取の例に集約する形で、DI 第二章の議論の本質的な部分を確認しておこう。

ベルクソンによれば、我々は鐘の音の継起をただ聴くだけで、「それらの継起的感覚の各々」を「記憶 (souvenir)」(DI, 78)という形で「保持 (retenir)」(DI, 64)し、それらの感覚と記憶とを、ひとつの「メロディ」のように「有機的に組織する (organiser)」(DI, 64)ことができる。そのようにして構成されるのが質的多様体ないし持続——DIにおいてこの二つの語はほとんど同義的に用いられている——であり、この多様体は、その構成要素の「異質性 (hétérogénéité)」と「相互浸透 (pénétration mutuelle)」によって特徴付けられる (cf. DI, 75, 82 等)。三つの音の継起が与えられ、三番目の音がまさに今鳴り始めた段階にあるとしよう。このとき、三番目の音が現在の知覚であるのに対し、二番目の音はすでに過去の記憶であり、一番の音はそれよりも以前の記憶であるといったように (cf. DI, 78)、諸要素は、互いに異なる質を有している (異質性)。さらにこれらの要素は、互いに混ざり合い (相互浸透) ——メロディが総体として、その構成音のどれにも還元できない質を生み出すのと同じように——ひとつの新たな質を与える (cf. DI, 92)。こうして形成された質こそ、先に複合的な質と呼んだものに他ならない。

だが、我々は同じ鐘の音の継起を「数える」こともできる。その場合、我々は、保持された諸要素に対し、暗黙の内に、次の二つの操作を加えていることになる。第一に、諸要素から「個別的差異」を「捨象」(DI, 57)し、それらを「あらゆる質を欠いた」(DI, 73)「等質的単位」へと変換しなければならない。というのも、要素毎の「個々の特徴」に注意を向けてしまっていては、それらを「枚挙」することはできても、その「総和」を得ることはできなくなってしまうからである。ただし、この操作だけで、数の表象を得られるわけではない。というのも、諸単位が互いに何の区別も持たないとすれば、それらは「混ざり合ってひとつのもの」になってしまうだろうから。そこで第二に、諸単位を「観念的空間」に「併置」することによって、それらを「場所」によって区別しつつ「同時に」意識する必要がある。こうした二重の操作によって得られる数の表象が、数的多様体と呼ばれるものである。したがってこの多様体は、質的多様体と全く対照的に、その構成要素の「等質性 (homogénéité)」と「相互外在性 (extériorité réciproque)」によって特徴づけることができる (以上、DI, 57-58, 66-67, 73)。

すると、複合的な質と量の対立は、これら二つの多様体の対立に対応することがわかるだろう。DI 一章はすでに、質そのものの複合性が、量との混同の要因であることを示唆していたが、同書二章は、その複合的な質——質的多様体——が、量——数的多様体——へと変換されるプロセスを提示しているのである。加えて、上の考察を踏まえれば、単純な質と対立する量

もまた、数的多様体に相当することがわかるだろう。というのも、表象的感覚の質を測定する役割を果たす外的な原因は、現実の「空間」に位置付けられるがゆえに、「直接的に数を構成する」（DI, 65）ものだからである¹⁴。

1-1-3：自我の二つの相

さて、こうして二つの多様体を区別した後で、ベルクソンは、それぞれにほぼ対応する「自我の二つの相（aspect）」——これは当該のセクションのタイトルである——を区別しているように思われる。

したがって結論として、二つの形態の多様体、持続を測定する全く異なる二つの仕方、意識的生の二つの相を区別することにしよう。真の持続の外延的象徴たる等質的持続の下に探りを入れて、注意深い心理学は、異質的諸瞬間がそこで相互に浸透するような持続を見分ける。諸々の意識状態の数的多様体の下に質的多様体を見分け、はっきり定義された諸状態を伴う自我の下に、そこでは継起が融合と有機的組織化を含意するような自我を見分けるのである（DI, 95）。

すでに触れたとおり、DIにおいて質的多様体と持続は、ほとんど同義語のように扱われている。このセクションでは、それに加え、新たに「深層の自我」（DI, 93等）というタームが、持続の同義語として導入されているのである。だが、なぜ同じ事柄を異なる語彙によって指示するのか。ベルクソンは明確に述べていないため、本稿ではこう考えたい。すなわち、DIは、「一」と「多」という問題の観点からは「質的多様体」の語を、時間に関する問題の観点からは「持続」の語を、そして、これから見る同書第三書の自由行為との関連では「（深層）自我」の語を、それぞれ用いているのである、と。

とはいえ、解釈上より問題なのは、これら質的多様体・持続・深層自我の系統に対置されている、等質的時間・数的多様体・表層自我といった語群である。これらのうち、等質的時間と数的多様体は先と同様に、同じ事柄を異なる観点から指示するものとして捉えることができる。しかし表層的自我という語彙を、単純に、等質的時間や数的多様体の同義語と見做すのは難しい。というのも、ベルクソンは、以下のように、時折、自我の表層と深層とを連続的なものとして理解しているようにも思われるからである。

¹⁴ 問題となるのが実際の空間か理念的な空間かはここでは重要な相違ではない。というのも、DIのベルクソンは、（時間については批判しつつも）空間については、超越論的感性論の理解を評価しているため、実際に物を見て数えるケースでも、すでに等質的空間が前提とされているからである（cf. DI, 69, 177）。

しかしこのより深層の自我も、表層的自我と唯一の同じ人格を成しているのだから、両者は必然的に同じ仕方で持続するように思われる。反復される同一的な客観的現象を恒常的に表象しているため、我々の表層的な心理的生は相互外在的な諸部分へと裁断されるのだが、そうすると今度は、このように規定された諸瞬間のほうも我々のより人格的な意識状態の動的で未分化な進展のうちに、数々の切片を明確に分離することになる (DI, 94)

後半で問題になっているのは、先に多様体の区別の説明で用いた、鐘の音やハンマーの打音の継起である。「表象」と言われていることから明らかなように、そうした音の意識はそれぞれ別個に見れば、単純状態としての表象的感觉に相当するものだが、それらが複数回継起することで、メロディに似た相互浸透状態が生み出され、そうした意識の複合状態が質的多様体ないし持続と呼ばれたのであった。だから、表象的感觉は、持続を構成することができるのではあるが、意識状態の中で最も強く、外的対象——「同一の客観的現象」——と結びついているものであるがゆえに、質的多様体が数的多様体に、持続が等質的時間に変換されてしまう要因でもあるのである。とはいえ、DIにおいて、我々の意識状態である表象的感觉は、(その原因ではあるが不可知の) 外的対象と同一のものではない。それゆえ、ここでは、表層的自我と深層の自我の関係が、(二つの多様体の区別としてではなく) 意識の単純状態と複合状態の関係として捉えられているのである。

まとめれば、DIにおいて「自我の二つの相 (aspect)」が問題となるとき、この「相」という語はそれ自体両義的なものなのである。だが、本稿にとってもつばら重要なのは、後者——単純状態と複合状態の関係——であるため、以下で「表層的自我」は「深層の自我」と連続的なものとして扱うことにしたい¹⁵。

1-2：自由行為とは何か

以上を念頭に、「自由行為」の概念が提示される DI 第三章の議論を確認しておこう。決定論 (1-2-1) および自由意志説に対する批判 (1-2-2)、それしてこれら両者の対立を超えたところで提示される自由行為の概念 (1-2-3) について順次見ていきたい。

¹⁵ 小関 [1999]も、自我の二つの aspect のこうした両義性を指摘し、(本稿の理解における) 二つの多様体の区別に相当する意味での aspect を「様相」、単純状態と複合状態の区別に相当する aspect を「局面」と訳し分けている。ただし、同論文は、行為に対する自我の表現が程度をもつという論点を強調してはいないため、(本稿と異なって) 表層的自我という水準において一切の自由を認めていない (cf. p. 194)。

1-2-1：決定論

ベルクソンは、決定論を、物理的決定論と心理的決定論に区別することから議論を始めている。このうち前者は、次のような発想のことを指す。

〔…〕エネルギー保存則を揺るがすわけにはいかないから、神経系にも広大な宇宙にも、他の諸原子によって及ぼされる機械的作用の総和によって位置が決定されないような原子はひとつもない。だから、所定の瞬間における人間的有機体の分子や原子の位置ならびにこれに影響しうる宇宙のすべての原子の位置と運動を知る数学者がいたならば、彼は無謬の精確さをもって、ちょうど天文現象を予言するように、この有機体を有する人物の過去、現在、未来の行為を算出するだろう（DI, 108）。

エネルギー保存則という物理法則と、ある瞬間における全宇宙の状態さえわかっていたら、各々の人間の行為は、遠い過去から未来永劫に至るまですでに決まっているものと見做すことができる、というわけである。

この古典的な主張に対して、ベルクソンは、二段階の反論を提起している。

(a) まず、「この仮説からは、我々の意識状態が互いに絶対的に決定し合うという帰結は出てこない」という点。上のようなタイプの決定論は、暗黙のうちに、エネルギーの保存則が物理事象だけでなく心理的事象にも適用可能であることを仮定している。たしかに「鼓膜の一定の震えや聴覚神経の一定の振動」（DI, 110）とそれらによって引き起こされる感覚のような「極めて単純な心理的事象」（DI, 112——表象的感觉——であれば、物理的なものと心理的なもの間に対応ないし平行関係を見出すことは可能であるだろう。だがそうした関係をさしあたり認めたとしても、より複雑＝複合的な意識状態についてまで、保存則を適用することはできない。というのも、それが適用可能なのは、時間が影響を持たない可逆系だけであるが、複合状態ないし持続においては、「同じものが同じものにとどまることがなく、その全過去によって強化され肥大化する」（DI, 115-116）からである。

(b) だが逆に、決定論者がそのように保存則の適用範囲を拡張してしまう理由は、これまでの議論を踏まえれば、非常によく説明できることだとベルクソンは主張する。

我々は自己を直接に観察することにまったく不慣れで、外界から借りてこられた諸形式を介して自己を覚知するのだが、そうである以上、ついには、実在的持続、意識によって生きられる持続を、不活性な原子になんの変化ももたらすことなくその上を滑り去るような持続と同じものと信じ込むに至る。その結果として、ひとたび時間が流れ去った後に、事物を元に戻したり、同じ動機が同じ人格に改めて作用するのだと想定したり、これらの原因は再び同

じ結果を産出するであろうと結論づけたりすることに、我々は何ら不条理を看取しないようになる (DI, 116)。

我々にはごく自然に持続を空間と混同する傾向があり、空間化された時間においては、あらゆる心理状態が、離散的な状態で与えられる。それらの間に想定される因果関係は可逆的なものなのだから、保存則を心理的事象に対して適用しても何ら問題はないのである。

さしあたり以上の二点の批判に一定の正当性を認めるとすれば、物理的決定論が正しいのは、予め心理的領域についての決定論の妥当性が確保されている場合のみとなるだろう。そこでDIは、心理的決定論の「最も精密で最も新しい形態」とされる「連合主義的決定論」を取り上げる。これは「自我を心理的諸状態の集合として表象し、それらの状態の中で最も強いものが支配的な影響を及ぼし、他の諸状態を従えている」(DI, 119)と主張するような立場を指す。その上で、ベルクソンは「仮に連合主義の立場に身を置いたとしても、行為はその動機によって絶対的に決定されており、また、我々の意識状態も互いに絶対的に決定されていると主張するのは困難である」(DI, 119)と指摘する。その理由は、先に物理的決定論を批判する際に用いられたものと、基本的には同じ向きのものである。連合主義は、あるひとつの後続の心理状態あるいは行為が、先行するあるひとつの「支配的な」心理状態によって決定されると主張する。しかし、このことは、表層的自我についてはともかく、深層の自我ないし持続については当てはまらない。というのも、後者においては、意識の構成要素が相互浸透状態にあるために、そもそもある行為の原因ないし「動機」となっているような先行状態をそれだけで別個に取り出すことが不可能だからである。

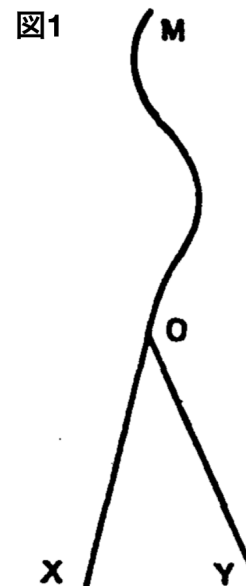
1-2-2：自由意志説

こうして決定論に批判を加えた後、DIの議論は、ベルクソン自身にとっての自由である「自由行為」ないし「表現としての自由」¹⁶という主張の提示へと進むのだが、ここでは議論をより明瞭なものにするため、ベルクソンの批判する自由概念——自由意志 (*libre arbitraire*)——の方を先に見ておきたい。DIが参照するのは、スチュアート・ミルによる以下のような定義である。

¹⁶ 「表現としての自由」というタームそのものは、ベルクソン自身の言葉ではなく、平井[2002] (訳者解説、p. 274) によるものであるが、ベルクソンの自由論を明確に特徴づけるタームであるように思われるため、本稿では、以下で示す自我の表現という論点を強調する場合には、このタームを「自由行為」の同義語として用いることとしたい。

自由意志を意識するとは、選択する前に、別様にも選択できたという意識をもつことを意味する (DI, 130-131)。

こうした発想を明示的に表現したのが、図1である。ここでMOは「意識的事象の諸系列」を表し、図は全体として、「Oに達すると、自我は採るべき二つの決意を前にして躊躇し、熟慮し、ついにはどちらか一方を選択する」(DI, 133)という主張を表現している。しかしベルクソンは、「この図形が示すのは遂行されつつある行為¹⁷ (action s'accomplissant) でなく、遂行された行為 (action accomplie)」に過ぎないと指摘する。というのも、遂行されつつある行為を考慮するなら——つまり、(空間化された) 時間でなく持続を考慮するのであれば——「線分MOも、点Oも、道OXも、方向OXも存在しない」(DI, 134)からである。上の自由意志の定義は、結局のところ、行為が「遂行された後に身を置いて」(DI, 135)、「想像力によって過去へと遡る」(DI, 136) ことによって、実際にい



ずれかの行為が実行されたという事実については「知らない振りをし」、「線分OXとOYを引いた後で、自我を点Oまで引き戻して、新たな〔意志の〕司令がやってくるまでそこで揺動させている」(DI, 135)に過ぎないのである。注意すべきは、ここで問題となっている「遂行された行為」と「遂行されつつある行為」の差異は、過去と現在という時制の間というよりもむしろ、完了と未完了という相の間にあるという点である¹⁸。というのも、何らかの決断に際して「この図を前もって」描こうとする場合——つまり未来の行為を問題とする場合——であっても、結局のところ我々は、「想像力によって最終的な行為に立会う (assister)」(DI, 135) ことによって、その行為を一旦完了したものと見做し、それと「同程度に可能な」、これもまた完了相にある「反対の行為」(DI, 133)を想定した上で、それらの間で揺れ動く自我を思い描いているに過ぎないからである。

後出の議論との関連で、この局面でベルクソンは想像力の働きに否定的な評価を与えているという点を強調しておきたい。たしかに、想像力は、単なる自発性の水準に留まる下等動物に

¹⁷ ここでの原語は action だが、本稿では人間の行為が問題になっている場合には、基本的に acte と action を訳し分けない。ベルクソンは (とりわけ MM で) 人間の行為が問題になる場合には acte を、それ以外の動物などの生物の行為、あるいは物質的な作用が問題となる場合は action というように使い分けている場合もあるのだが、この箇所のように明らかに人間の行為だけが問題となっているような場合にも action の語を用いることがあるからである。

¹⁸ 持続と空間の区別において本質的なのは、時制ではなく相の差異だという点については、杉山[2006] (第一章第四節) を参照。

はみられない、とりわけ人間に固有の能力であり、これによって、複数の行為可能性が——事後的ないし事前に——開かれることこそ、自由意志という発想が可能になるための条件ではある。しかしベルクソンからすれば、そのように理念的・等質的な空間で描かれた行為はいずれにせよ「すでに遂行された行為」である以上、想像力は、「遂行されつつある行為」、すなわち持続を取り逃がしてしまう、ということになる¹⁹。

1-2-3：自由行為

以上のように、DIは、自由意志説が主張するような意味での自由を明確に拒否するのだが、だからといって、自由概念そのものまで捨て去ってしまっているのではない。同書は、決定論と自由意志説の対立を超えたところで、「自由行為」という新たな²⁰自由概念を提起するのである。この概念は、およそ三つの仕方で特徴付けることができる。

(1) まず、ベルクソンは、(上で確認したような意味での) 行為の「選択 (choix)」(DI, 133) にではなく、「行為それ自体」の意識的な「質」(DI, 137) の内に、自由を認めているという点。したがって、ある行為が自由と呼ばれるためには、それはまずもって、意識的な行為でなければならない。

(2) さらに、行為が呈する質は、自我を表現している、という点。行為それ自体の質が自由と呼ばれる理由はここにある。ここで問題となる自我とは、基本的には、先にみた区分でいう「深層の自我」に相当するものである。そしてこの自我において与えられる、「共感」や「敵意」、「憎しみ」といった「様々な感情」は「十分な深さに達していれば、魂²¹の全内実がその各々に反映されているという意味で、その各々が魂の全体を表して」おり、「それゆえ、魂はこれらの感情のどれかひとつの影響下で決定されると述べることは、それは、魂は自ら自己決定すると認めることである」(DI, 124) とされる。DIは、我々の行為が先行する心理状態によって決定されることそれ自体は否定しない。むしろすぐ後で見るとおり、ベルクソンは、先行する何の原因ももたない行為を開始するという意味での自由を明確に否定している。だが、自由行為をもたらす心理状態は、その他全ての心理状態と相互浸透しているがゆえに、自我以外の何かによって決定されるものではない——ベルクソンが、行為の質における自我の表現を自由と呼ぶのは、こうした意味においてなのである。

¹⁹ ここで指摘したいのは、あくまで自由意志説との関連で語られる想像力の働きについて、ベルクソンが否定的な評価を下しているということだけである。

²⁰ この語彙自体は自由意志の擁護者も用いるものであるが、DIはそのうちにここに示したような新たな規定を与えることで——ちょうど持続というタームの場合と同じように——概念の刷新を図っているのである。

²¹ この文脈でベルクソンは、自我、魂 (âme)、人格 (personne) をほぼ同義語として用いている。

(3) ただし、最後に、ベルクソンの自由論において最も重要なのが、その自我の表現には「様々な程度 (degrés)」(DI, 125) がある、という点である。DI は、自由行為の具体例として、モリエール『人間嫌い』における「アルセストの憤慨」(DI, 125) など、自我の全体が表現されるようなケースを挙げているため、ベルクソンは、一見したところ、そうしたごく「稀な」(DI, 126) 行為だけに自由を認めているように思われるかもしれないが、そうではない。というのも、例えば、激しい情動のような中間状態から帰結する行為において、原因ないし動機となる心理状態とその他の心理状態は「相互浸透してはいるものの」「完全に溶け込むには至っていない」(DI, 125) のだが、ベルクソンは、そうしたケースも含めて、自由行為と呼んでいるからである(このいわば中程度に自由な行為の事例としては、「催眠術の暗示」や「何らかの偶発的な出来事によって引き起こされた激しい怒り」(DI, 125) などが挙げられている)。では、自由の程度の下限にはどのような場合が想定されるのだろうか。DI はこの点をあまり明確にしていないのだが、中程度の自由行為についての記述に続く箇所ではベルクソンはこう述べている。

〔朝の鐘の音が「いつのもの仕事に励む」という観念を喚起する場合のように〕行為は、私の人格がそれに関与せずとも、印象に後続して生じる。ここでは私は意識ある自動機械である。それも、自動機械であることがまったくの得策であるがゆえにそうなのである。お分かりになるだろうが、我々の日常的活動の大半はこのように遂行されており、また、記憶のなかでいくつかの感覚、感情、観念が固化されたお陰で、外部からの印象は、意識的でかつ知性的でさえあるにもかかわらず、多くの面で反射行為に類似した運動を我々の側に喚起することになるのだ (DI, 126-127)。

ここで問題となる運動・行為は反射反応に「類似した」ものであるだけで、反射反応であるわけではない(後者は無意識的な行為なのだから)。すると、そうした行為は、意識的な質を伴う限りにおいて、たしかに、自由行為の必要条件は満たしていることになるが、自我の表現という条件の方はどうだろうか。この点を考えるにあたって重要なのが、先に見た、表層と深層という自我の二つの相についての解釈である。上の引用における「印象」とは表象的感覚であり、この単純状態は、一方でその原因と強く結び付けられてはいるものの、他方で自我の構成要素でもある。だからその限りにおいて、自動的な行為であっても、それを引き起こした印象ないし感覚は自我を、いわばミニマムに表現していると言うことが許されることになる。DI はこの意味で、「意識的な自動機械」を自由行為の下限、「我々の自由な活動の基盤」(DI,

127) と見做しつつ、自我の全体が表現されるような行為に至るまでに連続的な程度を設けているのである²²。

1-3：カント哲学の観点から

以上が、DIで最も明白な事実であると結論付けられる「自由行為」についての主張の内実である。冒頭で述べたとおり、MMにおいてはこうして確認された自由行為がいかにして可能であるのか、その可能性の条件の探求が行われるというのが本稿の仮説であるが、その検討に入る前に、カント哲学との対比によってDIの主張を整理すると共に、以降の議論に見通しを与えておきたい。ここでカントを持ち出すことは、もちろん、恣意的なことではない。というのも、ベルクソン自身、個別の論点のみならず、自説の全体的な枠組みを、カント哲学との対比によって整理し直しているからである。具体的に言えば、DIの結論部と1893-4年度にアンリ四世校で行われた『純粹理性批判』講義および心理学講義²³の一部には、単なる学説の整理に留まらず、カント哲学を自らの哲学の観点から読み替えようとするより踏み込んだ記述を見出すことができる。そこで以下、DIの関連する議論を適宜参照しつつ、二つの講義の内容を見ていきたい。

1-3-1：『試論』と『純粹理性批判』講義

確認したいのは、カントにおける自由を、またそれとの関連で語られる自我の身分をベルクソンがどう捉えていたかである。まずはDIの結論部から引用しよう。

カントは一方では物自体 (choses en soi) を、他方では、それを介して物自体が屈折するところの等質的な〈時間〉と〈空間〉を想像する。こうして、一方では意識によって覚知される現象としての自我が、他方では外的事物が生まれることになる [...] (DI, 175)。

²² ただし、平井[2002]が指摘しているとおおり、この程度は、「単調なグラデーション」ではない。というのも、「自我を織りなす意識的諸状態の相互浸透の多様な度合いは、深さという一次元の尺度にしたがって、整然と順序づけられているというよりも、そこかしこにいわば局所的な群生地帯を形成しつつ、自我の全体に複雑な構造性をもたらしている」(訳者解説、p. 278)からである。とはいえ、この論点および関連する「寄生的自我」についての議論は、以下の議論に直接関係するものではなく、杉山[2006] (第三第一節)でも十分に取り上げられているため、本稿では扱わない。

²³ 以下で参照する心理学講義のテキストは、アンリ・ユード編の講義録第二巻に取められたものである。ユードはテキストの元になったノートの年代を1892-1893年度と推定したのだが、後にシルヴァン・マットンによって、この推定は誤りで実際の当該講義が行われたのは、1893-4年度であったということが指摘されている。本稿はこのマトンの指摘を支持するが、これは要するに、以下で参照する二つの講義は同一年度に行われたものである、ということである。

カントにおいて、物自体という「概念」は、まずもって、「認識主体から独立なそれ固有の実在のあり方」を意味する。物自体には、「認識主観との関係を離れているという意味で、「自体 (an sich)」という表現が付され、「我々にとって (für uns)」の「対象 (Gegenstand)」としての現象と対比的に使用される」²⁴。他方、物自体の「指示対象」は、本稿の議論に関わる範囲で言えば、大きく「自我」と「外的対象」に分けることができる。上の引用で設けられているのは、そのそれぞれにおける物自体と現象の区分であり、ベルクソンは両者の分離の要因を感性の形式としての時間と空間に見て取っていることがわかるだろう。とはいえ、DIの観点から重要となるのは外的対象としての物自体ではなく、自我としての物自体である。

[...] カントは、内的統覚の射程を制限しようと努めつつも、無意識的かつ無制限な信頼を内的統覚に寄せていたがために、自由を揺るぎなく信じていた。そこでカントは、自由をヌーメノンの高みにまで引き上げた。しかも、彼は持続と空間 [=等質的時間] を混同していたから、この実在的で自由な自我、現に空間と疎遠であるような自我を、空間と同じく持続に対しても外在的で、ひいては我々の認識能力では捉えられない自我たらしめてしまった (DI, 175)。

問題となっているのは、「自発性の作用」(B132²⁵)である「統覚」としての「自我」である²⁶。ベルクソンによれば、カントはこの意味での自我の自発性に自由を認め、そうした自我が位置付けられる叡智界を、因果法則に支配された現象界から区別することによって、自由と必然性のアンチノミーの解消を図ったのであった。その結果、カント的な枠組みにおいて自由な自我は不可知なものと化したのであるが、ベルクソンにとってそうした二つの世界の分離は、持続と空間=等質的時間(以下同)の混同によるものなのである。しかしそうだとすれば、両者を区別することによって、現象界へと自由な自我が引き下ろされ、我々はその認識を得ることができよう。実際、続くテキストではそうした主張が提示されている。

しかし、現象界と物自体の世界とのこの区別はおそらくあまりにも截然としているし、この障壁も思ったより簡単に乗り越えることができる。というのも、実在的持続の諸瞬間がたま

²⁴ ベルクソン自身はカントにおける物自体について断片的な記述しか残していない。また周知のように、物自体をめぐるカント解釈においても意見の一致をみるのが難しい。そのため、本稿ではおおよそ中立的であると思われる見解として牧野 [2012] (pp. 102-104) の理解に従っている。

²⁵ 以下『純粋理性批判』への指示は、Kant [1988]のAないしB版の頁数の記載するという仕方で行う。

²⁶ 第一批判には、経験的自我でも、「単なる論理的機能」(B407)としての純粋統覚でもない、「作用」(B137)や「能力」(B153)としての、いわば「第三の自我」が認められるという点については、Heimsoeth [1956]を、またDIや以下で取り上げる講義でベルクソンが肯定的な仕方で行っている自我とはこの作用としての自我であるという点については、杉山 [2006] (第一章第三節)を参照。

たま注意深い意識によって覚知されて、併置されることなく互いに浸透し合うとすれば、そしてまた、これらの瞬間が互いに係り合うことで異質性を形成し、そこで、必然的決定の觀念があらゆる種類の意味を失ってしまうなら、意識によって把握される自我は自由原因となろうし、我々は自分自身を絶対的な仕方では認識するだろうからだ (DI, 176-177)。

自我ないし自由そのものについて、ベルクソンは、カントの見解を否定していない。それどころか、持続ないし深層の自我という自身の概念と、カント的な自由を重ねた上で、しかしそれは結局のところ持続と等質的時間の混同によって認識不可能になってしまったと嘆いているのである。だがそれは正確に言ってどういうことなのだろうか。『純粹理性批判』講義から引用する。

それ〔純粹統覚が単なる形式であること〕に反して、カントが思い描くような実在的存在の統一とは、内的統一であり、空虚で生気を失った形式がもつ統一には全く類似していない統一であり、そこから生じる諸現象の多様体 (multiplicité) における溢れんばかりの色彩と生気をみずからの内に含む統一である。それゆえ、物自体である限りでの私の自我はおそらく、多様 (diversité) へと開花していく、そのような統一である。しかし私の意識に最初に与えられるのはこの多様である以上、後になってこの多様に生じる統一に私がその多様を従属させるとしても、この統一は実在的統一、根源的統一ではない。この根源的統一を捉えるためには何が必要だろうか。この統一は、そこから流出する感性的多様体に先だって与えられたものでなければならないだろう。それゆえ私の悟性は空虚な形式であるに代わって、自己自身による直観を有したものでなければならないだろう。ところで知的直観は存在しない。私の悟性は、感性によって己に与えられるものしか素材として見出さない。というのも、感性だけが直観を有するのだから。したがって、私は物自体に到達せず、また私の悟性の要求は、それ自体として存在するような私の存在の真の本性については何も私に教えない (CIII, 166-7)。

念頭に置かれているのは、超越論的演繹の最終局面、「感性において経験的直観が与えられるその仕方から、その直観の一性がまさに [...] ある任意の直観一般の多様へとカテゴリーが課すところの一性であることが示される」 (B144-145) 箇所である²⁷。「私は考える」という純粹統覚は、それだけでは、自らが時間を通じて同じ私であること——通時的な同一性——を何ら保証しない。だからカントは、演繹の最後のステップにおいて、感性における形式的直観の

²⁷ この段落では杉山[2006] (第一章第三節) の解釈を要約している。

一性に訴える。カントにおける時空概念には、直観の形式と、形式的直観（純粹直観）という二側面があるが、このうち後者は、感性の多様に先立って予め、無際限な広がりをもつ空虚なひとつの時間、ひとつの空間を与えてくれる。カテゴリーがそれ自体では感性からきっぱりと区別されつつも多様を統一することができるのは、「経験的直観が与えられるその仕方」、つまり純粹直観としての時空間に従って、それが適用されるからなのである。先に見たように、ベルクソンはカント的統覚の自発性の作用それ自体は、自らの持続概念に近いものとして評価していた。しかし以上のような仕方で演繹が一旦完了してしまえば、純粹直観が統覚の一性を確保してくれている以上、自我の自発性は不要なものになってしまう。とはいえDIの観点からしてみれば、そもそも質的多様体ないし深層の自我は、それ自体で一定の統一を有するものなのだから、形式的直観としての時間の統一性をあらためて持ち込む必要などない。むしろ、先に確認したとおり、形式的直観＝等質的時間の方が、持続と空間の混合物として事後的に構成されてくるものだ、というわけである。

直観という語彙が出てきたところで少し補足しておこう。上の引用部にもあるとおり、カントは人間における物自体一般の直観可能性を否定した（B68-73）。自我としての物自体は、時間という感性の形式にしたがって内的感官を触発し、このことによって直観の対象としての経験的自我が与えられる（B155）。しかし我々人間の直観は、感性的直観に限定されるため、与えられるのはつねに後者であって、触発以前に想定される物自体は直観の対象とは成り得ない。だがもし知的直観が可能であるとすれば、人間的直観には、感性の形式的直観に限定されない場合があることになる。そしてベルクソンは、先の引用部に続く箇所において、まさにそれが持続の直観であると主張しているのである。

だがこうしたヌーメノンについての積極的な考えが『純粹理性批判』の全行程の中に潜在し、内含されているとすれば、我々は次のように問う権利を持つことになるだろう。すなわち、思考はさらにもっと先へ進むことができないのかどうか、つまり、少なくとも特権的な事例において、我々が多様体に内的であって、もはや外的でないこの生ける統一の直観、すなわち知的直観をもたないのかどうかを探求する権利を有しているのではないかと。ところで、我々は次のように考える。すなわち、我々の人格性は、表面的で後天的なものとして見出されることがあるとしても、まさにこうした類いの直観において我々に与えられる、と。〔...〕この深層の直観において、我々は一挙に我々の諸現象の統一と多様体を捉えるのであり、このとき、我々の持続は、ひとつの不可分な全体として我々に現れるのである（CIII, 173-4）。

強調しておきたいのは、ベルクソンは最初の著作である DI においてはこのように肯定的な仕方——つまり持続の直接的な把握という意味で——「直観」という語彙をほとんど²⁸用いていない、ということである。同書において「直観」というタームは、むしろ、空間や数といった、持続と対立するものを対象として用いられている。しかしこのカント講義では明確に、深層自我ないし持続の直接的把握という意味で直観という語が使用されている。要するに、ベルクソンは、カントが一瞬垣間見た、自発的作用としての自我の直接的把握の可能性を、感性の形式的直観＝等質的空間と持続＝深層の自我を区別することによって確保し、後者についての認識に、カントの場合と同様、「直観」の名を与えたということである。

1-3-2：心理学講義——「自由」

以上に見た DI および『純粹理性批判』講義は、カントにおける自由の概念そのものについての立ち入った考察を含んではいない。だが、同年に行われた心理学講義第九講「自由」は、（上で確認した）決定論と自由意志の批判をたどり直した上で、カントの自由概念を主題的に取り上げている。

ベルクソンは、『第一批判』のひとつの目的が「自然」と「自由」という二つの水準を「共存させること」であったということの確認から議論を始めている。ここで「自然とはすなわち、どれもみな因果性の法則に支配された現象の必然的な連鎖」であり、そこで「我々が認識しうる事柄はすべて時間および空間のなかで発展するのだが、それでいて他方では統一されて」もおり、「この統一を確立するのが、原因と結果の関係である」（CII, 256）。他方で「自由」とは、そうした現象の連鎖、「ひとつの系列」を「絶対的に開始させる能力、つまり、いわば無から最初の項を創造する能力」（CII, 258）である。こうした「カントの学説」には、「自由は存在しないか、それとも自由は絶対的であるかのどちらかであり、そしてまた因果的な「必然性は存在しないか、それとも必然性は絶対的であるかのどちらかである」という「公準」（CII, 263）があると指摘した上で、ベルクソンはこれらの公準を順次批判する。

(a) 「まず、自由のいくつかの程度がある」。この主張は一見、すでに触れた「表現としての自由」という発想を想起させるが、ここでの議論は、DI の議論と必ずしも重なるものではない。ベルクソンはカント的な意味での「絶対的自由」に、「相対的ないし部分的自由」という概念を対置させた上でこう述べている。

相対的自由ないし部分的自由という魂の状態は、いくつかの条件の中で決定され、それらの条件の圧迫を被りながらも、それでいて、おもいがけなく予測不可能な仕方でも反応し、かく

²⁸ 持続についてのこの語の使用は、DI においては次の一文にしかみられない。「直接的直観は我々に、持続における運動を、そしてまた空間の外にある持続を示してくれている」（DI, 85）。

して原因を超出しうるような状態のことである。この種の自由は一個の系列を絶対的に開始するものではない。けれども、この自由は系列に対して、自らの作り出した新たな方向性を刻印する (imprimer)。この新たな方向性は前もって与えられた方向性の延長ではないのだ (CII, 263)。

後の議論との関連も考慮しつつ、注釈しておこう。行為の系列 S (A1, A2, A3, A4...) を考えれば、ここで理解されているカント的自由とは、この S それ自体を生み出す働きのことを指す。それに対し、ベルクソンが主張する相対的自由とは、系列を構成する各々の行為のそれぞれを選択する自由のことだろう。カント的な観点においては、(例えば) A1 から A2 への移行に選択の余地はない (というのも、自然ないし現象は、因果法則に支配されているのだから)。ベルクソンの場合、S の開始点となる A1 という行為は、「無から創造」される——これがカントに帰される立場である——のではなく、それに先立ついくつかの条件、すなわち選択肢があって初めて実現される。しかしそのうちどれが実現されるかは「予測不可能」であって、必ずしも A1 が実現されねばならないわけではない (A1' や A1'' といった別の行為が実現してもよい)。同様のことは、A2、A3、A4 といった一連の行為にも当てはまり、我々はたしかにその都度一定の選択肢という制約を課されてはいるのだが、この系列が全体として成す「方向性」——A1→A2→A3 となるか A1→A2→A3''' となるか等——は我々が「自ら作り出した」、その意味で「新しい方向性」と呼ぶことができる。こうした意味での新しさを与えるのがここで「相対的な自由」と呼ばれているものだろう。

また他方で (b) 「本来の意味での自然、つまり時間のなかで展開される現象の総体の中で我々が出会う必然性についていうなら、それはカントが望むほど厳密なものであるにはほど遠い」。というのも、日常世界における因果関係の理解は次のことを含意するに過ぎないからである。「すなわち、結果がそれに先立つものによって引かれた何らかの限界を超えないこと、結果と原因の間に際立った不均衡が存在しないこと、予測が可能であること」。こうした、絶対的ではない、いわば相対的な必然性という発想の下では、「下位の次元にある現象や存在の最も低い階層に対しては予測は確実なものとなり、より高度な次元にある事象に対しては予測は単に蓋然的なものにとどまる」のである。ここで高次といわれるのは (典型的には) 我々人間の行為であるのに対し、「最も低い階層」は物質のことだと見て良い。カントが、自由と必然性をいずれも絶対的なものと見做し、それぞれに叡智界と現象界という異なる世界を与えることでアンチノミーを解消したのに対し、ベルクソンの方はというと、自由と必然性を共に相対化することで、自由を現実の世界へと引き下ろし、その同じ世界の内に階層構造を認めることによって、最下層に必然性を認めるという両立論的な戦略を提示していると見ることができるだろう (以上、CII, 264)。

1-3-3：『物質と記憶』の解釈に向けて

DIの主張とカント哲学の対比という観点から1894年の講義の内容に即して引き出せることはおよそ以上である。以下では、DIおよび講義においては示唆に留まっているもののMMの解釈にとっては重要となるいくつかの論点をピックアップしておきたい。

(a) 直観の形式

すでに見たとおり、DIのベルクソンは形式的直観としての時間に替えて、純粹持続の概念を提起することによって、超越論的演繹によって最終的に失われてしまうことになる自発性の作用それ自体の直観可能性を確保しようとしていた。だが、カントにとって時間とは、形式的な直観であると同時に、(感性の質料としての)感覚がそれによって——継起や持続という仕方——秩序づけられるところの直観の形式でもあった。この点について、ベルクソンはどう考えていたのだろうか。講義には、非常に手短であるが、その後の著作の内容を予告するような発言がある。

カントによれば、経験は空間と時間を必要条件として想定する。それゆえ、空間と時間は経験に先行し、また経験から独立したものである。ここでもまた、経験論者は、歴史を考慮すべきだと応じるだろう。無際限な数の過ぎ去った経験の上に築かれた現在の経験に対してならば、事情はそうである。しかし、時間と空間の形式と称されるものは、習慣でしかないかもしれない。その場合、時間と空間の形式とは、精神が継起と併置とを記録するにつれて外部から内部へと刻まれたものであるだろう(CIII, 153)。

ベルクソンは、カント的な意味での時間の形式に相当するものの存在を否定してはいない。ただしそれは、『第一批判』が想定するようなアプリアリなものでなくアポストリアリな習慣に過ぎないだろう、というわけである。DIは等質的時間という論点において習慣について言及してはいるものの、そこで問題とされているのは「言語」ないし「思考」の水準での習慣であった(cf. DI, 59, 81, 91)。しかし、ここで問題となっているのは、編纂者註でも指摘されているとおり(cf. CIII, 293)進化論的な観点である。そのような意味での非常に原始的な習慣が感性の形式であるという発想は——すぐあとで問題にする空間という論点を除けば——DIにはない発想であり、ここにはMMが主題的に取り上げることになる習慣の問題の萌芽を見て取ることができよう。

(b) 構想力

この直観ないし感性の形式という論点と並行して確認しておきたいのが、感性の質料の身分、そしてそれと関わる「構想力」の働きについてのベルクソンの理解である。カントは感性

の質料としての感覚は「単なる多様」に過ぎないと想定し、そうした多様を総合し、さらにそのようにして得られた対象と概念を媒介する図式を創出する働きを、いくつかのテキストにおいて、「産出的構想力」に求めていた。この点について、講義録の「原則の分析論」について論じる箇所からいくつかの発言を引用する。

〔…〕概念にその形象を与えるために定められた手続き一般のこの表象はその概念の図式と称されるのだが、我々としては、概念と形象とのこの媒介を創出する能力を産出的構想力 (imagination productive) と呼ぶことにしたい (CIII, 160)。

カントはすでに「概念の分析論」において、感性的直観にある連続性、連関を保証するためには構想力の媒介作用が必要であることを指摘していた。実際、例えば空間は単なる多様であり、もし構想力が線の諸部分を保持し (retenir 把持し) それらを併置しないなら、我々が辿る線について何ひとつ残るものはないだろう。一般に、いかなる直観も、時間を経ず意識に到来することはできない。構想力は、時間のなかへの悟性の投射 (projection) のごときものであり、この投射に際して構想力は時間において純粹悟性概念を図式化し、それによって概念を対象に近づけ、概念が対象を把握することを可能にするのである (CIII, 161)。

したがって、我々はカントの考えの解釈に向けて、純粹構想力は記憶力 (mémoire) という形をとる悟性である、と言えるだろう。純粹悟性は、アプリアリな諸概念を提示する。これらの概念は、純粹悟性の統一を表現するが、しかし、まさにそれゆえに、感性の所与とは類似しておらず、感性の所与には適用不可能である。適用されるためには、悟性はいわば感性化される必要があり、感性の圏域に下降していかなければならない。純粹悟性概念は時間のなかに入っていく、そこで、これらの概念が対象の外縁に沿うことを可能にするような順応性を獲得しなければならない。純粹構想力は、まさにこうした働きをなすのである (以上、CIII, 162)。

まず注目したいのは、「保持 (把持) する」という語彙の使用である。このタームは実は、先に見た多様体の構成の最初の段階において導入されていたものであるが、それがここでは産出的構想力に関係づけられているのである。このことは一見すると奇妙に思われるかもしれない。というのも、演繹論の A 版においてカントは、この保持 (把持) の働きを「一本の線を頭の中で引く」ことなどを例にあげながら、「先行する表象を再生する」、「再生的構想力」に帰しているからである (cf. A102)。しかしベルクソンの参照先が B 版であるとすれば、困難

は生じない²⁹。というのも、そこでもカントは線を引く事例に言及しつつ、次のように述べているからである。

〔…〕我々は、思考のうちでそれを引いてみることなしには、いかなる線を思考することもできず〔…〕また時間をすら、我々が一本の線（これが時間の外的に図示的な表象であるべきである）を引きながら、我々が内的感官をそれによって継起的に規定するところの多様の綜合の働きにのみ注意し、このことによって内的感官におけるこうした規定の継起にも注意するということがなければ表象することはできない。主観の働きとしての運動（客観の規定としての運動ではなく）は、したがって、空間における多様の綜合は、我々がこの空間を捨象して、我々がそれによって内的感官をその形式にかなって規定する働きにのみ注意するとき、継起という概念をはじめて生み出すのである。それゆえ悟性は、内的感官においてすでに多様のそのような結合を見出しているのでは決してなく、悟性が内的感官を触発することによって、そのような結合を生み出すのである（B154-155）

このとき問題となっている構想力は、産出的なものであり（cf. B152）、カントはこの働きを物自体としての「自我」に帰していたのであった（cf. B155³⁰）。したがって上に引用した一連のテキストにおいて、ベルクソンは、そうした自我の働きを「産出的構想力」³¹と重ね合わせた上で、それを新たに記憶力というタームで語り直そうとしていることになる。そしてその際取り上げられている、いくつかの論点——「投射」、「図式」、「感性化」——は、これから見るとおり、まさに MM の記憶理論が取り上げ直すことになるものである。

(c) 空間

最後に、MM への移行を考えるにあたって最も重要な論点として、空間の身分について。時間と異なり、空間については、DI は一見したところ、カントの見解を批判していないように思われる（cf. DI, 70）。だが、目立たないものの、いくつかの箇所ではベルクソンは第一批判とは異なる見解を提示している³²。

²⁹ 周知のとおり、カントにおける産出的構想力の位置付けは、『第一批判』の二つの版の異同や、『第三批判』との関連といったいくつかの論点を考慮すれば容易ではないため、本稿はベルクソンの解釈の妥当性までは問題にしない。

³⁰ ここでいう物自体としての自我と実践的行為の主体としての自我の関係については、改めて議論が必要になるだろう。この点については本稿の結語の議論も参照されたい。

³¹ こうした論点において、ベルクソンが物自体としての自我の働きに産出的構想力を見出しているという点については、杉山[2006]（第一章第三節）を参照されたい。

³² 引用部以外では DI, 71。なお、これらの箇所ではベルクソンは空間を主題的に取り上げつつも、それが直観の形式なのか形式的直観なのかは必ずしも明示的でないように思われるため、ここでは本稿の責任で適宜補っている。

そこで、我々は等質的「空間」を想定し、カントとともに、この空間をそれを満たす質料から区別した。彼とともに、我々は等質的空間が我々の感性の一形式であることを認めた。ただ、そのことによって我々が言いたいのは、たとえば動物たちの知性のような他の知性は、対象を認めるには認めるが、我々ほど鮮明に対象同士を区別はしないし、対象と自分たちを区別することもない、ということではかない。等質的媒体についてのあの直観は人間に固有の直観で、これによって我々は自分の抱く諸概念を互いに外在的なものたらしめたり、事物の客観性を自分に開示させたりできるのである〔…〕（DI, 177）。

形式的直観としての空間は、「人間」に固有のものであって、動物にはない。渡り鳥の帰巢本能に見られるような「方向の感情」が示すとおり、「動物にとって、空間は我々にとってほど等質的なものではなく、空間の諸規定や方向も、動物にとっては純粋に幾何学的な形＝形式を纏っていない」からである。だが、ベルクソンは動物は空間をもたないとまで主張しているのではない。むしろ、「左」と「右」の感覚の差異を引き合いに出すことで、そうした非等質的な空間を、人間が動物と共有しているということを示唆しつつも、DIはその正確な身分について何も述べずに議論を終えているのである（cf. DI, 72）。

空間の身分規定が曖昧であることで、DIは延長概念にも不明瞭さを残している。超越論的感性論において（現象の質料としての）感覚は、それ自体では非延長的なものとして見做されていた³³。DIは、第一章を中心に基本的にはこれ同種の見解を示しているのだが³⁴、その一方で、上の質的空間についての記述が置かれた箇所では、「延長の知覚」と「空間の概念形成」を区別すべきだと述べ、「二つの感覚を差異化する諸々の質そのもののうちに、それらが空間においてあれこれの特定の場所を占める理由があるはず」（DI, 71）だと主張してはいる。だがその「理由」が具体的にどのようなものであるかという点については全く何も述べられておらず、その結果、延長の知覚それ自体が延長的なのか、それとも延長は（質的なものであれ）結局のところ空間によって齎されるものなのかが、明確にされていないのである。

したがって、カント哲学との対照という観点からすると、この空間および延長という論点に、MM執筆以前のベルクソン哲学は曖昧さを残していると言えるだろう。

本章では、DIから1894年の講義までをコーパスとして、ベルクソンが最初の著作で最も明白な事実として認めた自由ないし自由行為の概念の内実の明確化を行なった。DIは、まずもつ

³³ Kemp Smith[1918] (p. 86) はまさにこの点で、DIの解釈を正当なものとして取り上げている。

³⁴ 「表象的感覚はそれ自体では純粋な質であるが、延長を通して見られるなら、その質はある意味において量と化す」（DI, 67）。

て遂行されつつある行為が呈する意識的な質のうちに自由を求めたのだが、それは、行為が意識される際のその質のうちには、行為主体の自我が多かれ少なかれ表現されており、その表現の程度によって当該の行為がどれだけ自我自身によって決定されているかが規定されているからであった。そうした意味での自由をベルクソンは、その後、『第一批判』で垣間見られた作用や能力としての自我と重ねつつ、それを（カントで言えば）現象界の側に引きおろすために必要なポイントをいくつか示唆していた。感性の形式を習慣と、産出的構想力を記憶力と読み換えることができるならば、非感性的な直観の余地が開かれるのではないか、そしてそうすれば、DIでは宙づりになっていた自由が物質世界に至るまで段階的な仕方で位置付けることができるのではないか、といったいくつかの着想は——空間と延長という論点を除けば——その後のベルクソンの思考の展開をある程度は素描してくれるものだと言えるだろう。その実際の発展を辿る前に、次章では、本稿の解釈方針を採る際に想定されるいくつかの懸念を処理した上で、MMの方法と議論の出発点の明確化を図っておきたい。

第2章 常識と形而上学——『物質と記憶』の方法と出発点——

MMの検討に移ろう。冒頭述べたとおり本論は、初期ベルクソン哲学を、一貫して自由行為という観点から理解しようとするものである。このような解釈を試みようとする場合、直ちに解消しておかなければならない問題が二つある。

第一に、ベルクソンの最初の二つの著作における「常識」の身分について。MMが「イメージ」という特異な概念の導入と共に、常識の観点から議論を始めていることはよく知られているだろう。だが、そのことを念頭に置いた上でDIに立ち返ってみると、ベルクソンは議論の始めから終わりまで、質と量、持続と空間を混同してしまう観点として、常識を否定的に捉えていることが気づかれるだろう。それゆえ、二つの著作を一貫して読み解こうするのであれば、まずもって、両者における常識という観点の身分を明確にしておかなければならない。

第二に、両著作は、一見したところ、自由行為それ自体についても全く異なる理解が取られているように思われる点。先に見たとおり、DIは、「選択する前に、別様にも選択できたとの意識をもつことができる」という意味での「自由意志」の存在を明確に否定しつつ、行為に自我³⁵が表現されることに自由を見出すという新たな立場を提起していた。にもかかわらず、MMは以下のように、冒頭から行為の選択可能性を問題しているために、ベルクソンは一見したところ、前著で否定したはずの自由の理解から議論を開始しているように思われるのである。

イメージの中でひとつだけ、私が知覚によって外から認識するだけでなく、情感によって内からも認識する点で他のイメージからはっきり際立つものがある。私の身体である〔...〕。情感は、最終的な行動に対して決定されきっていない何らかの影響を及ぼさずには済まないかのようなものである。多種多様な情感を通覧してみよう。それらはいずれもそれなりに、行為せよ、という一定の誘いを含みつつ、だが同時に、一旦待っても良いし、さらには何もしなくてもよい、といった許可をも含んでいるようである（MM, 11）。

これら二つの論点は互いに無関係なものではない。というのも、MMで一見復活しているように見える自由意志説を、DIはまさに常識の発想と見做して批判していたからである（cf. DI, 112, 132）。そこで以下まずは、MMの詳細な読解を前提にせずとも可能な範囲で、それぞれの点について予め一定の見解を提示しておきたい（2-1）。その上で、二著作の議論が共通して

³⁵ 自我と人格が同義語だという点については本稿注21を参照。

採用している「方法」を確認し（2-2）、その方法の下で展開されるMM第一章の出発点がどのようなものであるかを明確にする（2-3）。

2-1：二著作の一貫性

2-1-1：自由行為

上に挙げた二つの論点のうち第二のものから見ていこう。（a）DIにおいて批判された自由意志のMMにおける復活が見かけ上のことにすぎないことを示した上で、（b）DIにおいて提示された自由行為という発想こそ、MMが冒頭から取り上げているものに他ならないことを確認する。

（a）先に見たとおり、DIにおける自由意志の批判のポイントは、自由意志の擁護者は行為がすでに完了した観点に身を置いている、という点であった。問題となる行為が過去のものである場合、我々は、当該の行為の記憶を再生しつつ、（事後的に仮構された）それとは別の行為を想像上の空間に併置することによって、特定の時点で自我は自らの意志によっていずれか行為を選択できたと考えることができる。未来の行為が問題となる場合も同様に、今後ある一定の行為が完了したという観点に身を置いて、それとは別の行為を思い浮かべることによって初めて、そのいずれかを選ぶことができると想定することが可能となる、というわけである。したがって、先に引いたようなテキストで問題となっている行為の選択肢が、想像された空間上で併置されたもの——完了相にある行為——であるとすれば、MMはたしかにDIと矛盾したことを言っていることになるだろう。

しかし、もちろんそうではない。というのも、そこで問題となっているのは、「開始されつつある運動ではあるが、それらはまだ実際には行われてはいない」（MM, 12）、その意味で未完な行為だからである。したがって、少なくとも、MMはDIで批判した考えを復活させているわけではない。

（b）だが、この点を認めたとしも、複数の選択肢からの選択に自由を見出すという発想は、DIにおいてベルクソンが自らの見解として提示した自由の表現モデルと——矛盾するとは言わないまでも——異なるものではないかという疑問が残るだろう。というのも、先に見たとおり、前著でベルクソンはたしかに自由を、行為の選択でなく、行為それ自体の質の内に求めるよう促し、その典型として、「自我の全体を表現する」（DI, 125）ような行為を優れて自由な行為と見做していたからである。

とはいえこの点については、自由行為に程度があることを考慮すれば十分だろう。すでに見たようにDIは、自我の表現に程度を設けており、その下限を「意識ある自動機械」と呼んでいた。この点を念頭に置いた上で、MM第一章冒頭のテキストに立ち返ってみれば、ベルクソンがそこで問題にしているのは、DIが主題的に取り上げていたような極めて程度の高い自由行

為ではなく、我々人間と「生物」（MM, 12）が共有しているような最も程度の低い自由行為であることがわかるだろう。要するに MM が出発点としているのは、DI が「我々の自由な活動の基盤」と呼んでいたような水準における行為なのであって、1896 年のベルクソンが行為の選択のうちに自由を見出すようになったわけではないのである。

2-1-2：常識

したがって、自由行為という論点について、二つの著作の間には、根本的な矛盾は存在しない。では、第一の論点——常識の身分——についてはどうだろうか。結論から述べれば、常識の観点は、二つの著作の間で、明らかに扱いが異なっていると言わざるを得ない。ただし、予め注意しておけば、それは、DI において否定されていた常識の観点が、MM になると終始肯定的に扱われるようになる、といった単純な話ではない。どういうことか、まずはテキストのごく形式的な側面の確認をしておこう。

DI において、常識が一貫して否定的な扱いを受けているという点は検討するまでもないだろう。意識の諸状態に関する質と量の混同（第一章）、二つの多様体の混同、あるいは持続の空間化（第二章）、自由行為でなく自由意志の肯定（第三章）等、DI が批判するこれらの主要な誤謬がいずれも、常識そのものに帰せられるものであることを把握するためには、常識というタームが登場する箇所を眺めるだけで十分である（cf. DI, 2, 91, 112 等）。

MM が（知覚を扱う）第一章冒頭から、（記憶を扱う）第二、第三章（の一部）までの議論において、常識を肯定的に扱っているという点にも疑いの余地はない（cf. MM, 41, 76, 154 等）。しかし決定的に重要なのは、物質の形而上学が展開される同書の第四章に至ると、ベルクソンは、再び常識の観点を批判的に検討している、という点である。運動ないし物質は、その「内的本性」においては「不可分」なものであるのに、「空間」に置き入れることで、それらを「非連続」な「軌跡」あるいは、「互いに独立した対象」にしてしまう、そうした否定的な働きを行う観点に、同章では「常識」という名が与えられている（cf. MM, 213, 219-220）。したがって、MM は、DI で批判された常識の観点を全面肯定するようになった、というわけではないのである。

2-2：『物質と記憶』の方法論

では、この態度変更にはどのような意図があるのだろうか。鍵になるのは、MM 第四章冒頭で提示される方法論である。ベルクソンは、DI においては自らの哲学の方法について反省的に語っておらず、MM においても冒頭から（ごく一般的な論文がそうするように）方法を提示してはいない。しかし同箇所では、「以前の著作においてすでに用いていただけでなく、この著

作においても暗黙のうちに用いてきた」(MM, 203) ものとして、以下のような方法が初めて定式化されるようになる。

我々のこうした方法ならではの工夫とは、端的に要約すれば、日常の有用な認識の観点と真の認識の観点とをはっきり区別することに尽きる。そこにおいて我々が自分が行為しているのを眺める持続、そこでは我々が自分を眺める方が有用であるような持続とは、その諸要素が互いに分離され、併置される持続である。しかしそこにおいて我々が現に行為している持続とは、我々の諸状態が互いに溶け合っている持続であって、行為の内的本性をありのままに考えようとする例外的かつ唯一の場合、つまり自由の理論においては、思考を傾けつつ、まさにそのような持続に自分の身を置きなおすよう努力しなければならないのだ (MM, 208)。

述べられているのは、先に確認した DI における自由についての議論である。区別されている二つの観点のうち、一方の日常的認識は DI における等質的時間についての議論に、他方の真の認識は持続ないし自由行為に関する議論にそれぞれ対応すると言って良いだろう。MM で言えば、これら二つのうち、日常的認識こそが、目下問題の常識の観点であり、常識を反省し、「思考によって例外的な状況に身を置く」ことによって得られる観点が、(今度は「行為」ではなく)「物質」の「内的本性について思弁する」、「形而上学」の観点ということになる。MM のベルクソンは、これらの観点の相違を十分に把握した上で、あえて、その第三章までは、「常識」の観点に「すすんで閉じこもって」(MM, 202) いたのである。

だがそうだとすると、(1) MM はどうして常識から形而上学へと観点を変更することができるのか、そしてまた、(2) そもそも MM は(最終的には否定的に扱われることになる)常識をなぜ議論の出発点として採用したのだろうか。

2-2-1: 常識から形而上学へ

最初の点から見ていこう。自由を問題にした DI において、日常的認識から真の認識への移行が可能となったのは、先に見たように、二つの多様体の概念を明確区別することで、「我々の内的な生」——「純粹持続」——を、「空虚な時間から切り離す」(MM, 208) ことができたからである。MM 第四章は、これとパラレルな仕方で、我々の「外的知覚」が有する「延長」が(知覚の条件である)「空間」から分離可能であると主張することで、常識の観点から形而上学の観点への移行が可能であると主張している。

このような方法は、物質の問題にも適用可能だろうか。問題はカントが語った「現象の多様」において、拡がりをもとうとする傾向を有しつつ漠と溶け合ったままの集合体を——我々の内的生が無規定で空虚な時間から引き離され、再び純粹持続になれるのと同じように——、等質的時間に押し付けられ、空間を媒介にして、我々によって次々と分解されていく、その手前で把握できるか、である。確かに、外的知覚の根本的な諸条件から自分を解放とうという試みは、馬鹿げた空想にしかなるまい。だが、まさに問題なのは、我々が通常根本的だとみなしている一定の諸条件とは、事物について我々が手にしうる純粹認識に関わるよりも、事物をどう利用し、そこからどんな実践的利益を引き出せるかということに関わるものではないのか、という点だ。より話を限って、具体的な延長、すなわち連続的で多様でありながらも有機的に組織された延長について言えば、次のような見解には異議を唱えることができる。すなわち、この具体的延長の下には、能動性も形式ももたない空間がまず張り巡らされており、当の延長はこの空間と固く結ばれている、といった見解である。ここで言われる空間というのは、際限なく分割できて、好きなように図形を切り出せるような空間であり、さらには別の場所〔DI〕で論じたように、そこには過去と現在の総合を保証するのが何もなく、そのため運動そのものも、単に多数の瞬間的位置としてしか現れないような空間のことだ。だから、延長からでてしまうことなく、空間から身を引き離すことがある程度まで可能なはずであり、そこにはまさに直接的なものへの立ち戻りがあることになるだろう（MM, 208）。

MM において、こうした観点の移行が可能となったのは、空間という知覚の条件が、「事物の使用に関わるもの」、より端的に言えば、「物質に対する我々の行為の図式」（MM, 237）と見做されるようになったためである。この点において、二つの著作間でのベルクソンの思想の発展を見出すことができる。先にみたとおり 1894 年までのベルクソンは、内的な持続については、カント的な感性の形式としての時間概念に明確に批判を与えていたものの、延長の知覚およびそれと関わる空間概念の理解については、曖昧さを残していた。しかしここでは、外的知覚の実践的な性格が強調されることによって、空間によって齎されるのではない具体的な延長が、知覚そのものに認められる、という方針が明確に打ち出されているのである。ただ厄介なことに、二つの著作の間で、空間概念についてそうした理解の変更ないし深化があったことは、（他のいくつかの論点と同様）明示的にはどこにも述べられていない。むしろ、実践的な知覚や空間理解は、MM においては、議論の始めから、自明な前提として導入されている。したがって、この論点についての詳細な検討は、いくつかの必要な論点の考察を終えた後、本稿第 4 章で行うことにしたい。さしあたりここでは、DI とは異なる空間および延長についての理

解が採られているために、MMにおいては、常識から形而上学への移行が可能となっている、という点が押さええられれば良いでしょう。

2-2-2：なぜ常識が出発点となるのか

空間概念の改変によって常識から形而上学への移行が可能となるとしても、なぜMMは常識の観点から議論を始めるのか。DIが強度や持続、そして自由といった諸論点についてしたように、空間的思考に囚われた常識を逐一批判し、それに対して自説を提示するという形で議論を行うことは可能だったはずなのに、どうしてベルクソンは、わざわざ常識の観点に「閉じこもった」のか。

まず指摘できるのは、常識と形而上学という二つの観点を排他的なものに見做していたDIの場合と異なって、MMにおける二つの観点はそうではない、という点である。先に確認したように、DIは感性の形式としての空間、およびそれと関連する延長の理解という点において曖昧さを残していた。このために、DIにおいては表象の原因としての外的対象は「それ自体では不可知」(DI, 92)なものに留まっていたのである。しかしMMは、上の引用部にあるとおり、我々の知覚が有する具体的延長が空間に由来するものではないことを主張する。詳細は次章以降で見ていくことになるが、このことから、MMにおいては「外的世界への私の信念」

(MM, 45) ——外界は我々による認識から独立に存在し、かつ我々はそれを直接知覚している——を常識に内在的な真理と見做すことが可能となっている。というのも——先取的に述べるなら——、我々の日常的な知覚が呈する具体的延長は、我々でなく物質そのものの性質であるために、この点についての常識の「直観」はそもそも「疑う」必要がないからである (cf. MM, 209)。

しかし、より重要なのは、常識の観点は、物質ないし外界という問題に取り組むにあたって、我々が採用せざるを得ないものだという点である。MMがいくつかの箇所、常識の観点の採用が任意のものでなく、必然的なものであることを強調していることに疑いの余地はない (cf. MM, 31-32, 36)。だが、同書第一章は、「物質や精神についての様々な理論、外界の実在性や観念性についての様々な議論についてしばらく何も知らない振りをしよう」(MM, 11) という唐突な一文で議論を始めており、出版当時(1896年)の短い序文にも、英訳の際に付された第二の序文(1911年)にも、常識の観点を採ることの必然性についての明確な説明を見出すことはできない。とはいえ、第二の序文が書かれる以前、1904年に書かれた論文「脳と思考」³⁶は、この点についてのベルクソンの見解を——常識というタームこそ用いていないもの——まとまった形で提示しているように思われる。そこで、以下、同論文の議論の骨子を確認し

³⁶ 発表当時の原題は「生理心理学的誤謬推理」であるが、本稿では『精神のエネルギー』(ES)に再録された際のタイトルで指示する。

た上で、第一章の議論が身を置く、常識の観点——とりわけその観点を採ることの必然性——を可能な限り明確化しておきたい。

2-3：『物質と記憶』の出発点

2-3-1：实在論と観念論——「脳と思考」

「脳と思考」において、ベルクソンは、表題にある「脳」と「思考」——より一般には「事物 (chose)」と「表象」(ES, 196)——の二項の関係をめぐり、实在論と観念論の矛盾を指摘すると同時に、MMで示されたのとほぼ同様の議論をより明確に展開している。議論の中心となるのは、「ある脳の状態を仮定すれば、ある一定の心理状態が生じる」(ES, 191)という、一般に生理学のテーゼと見做されている主張である。本稿の目下の文脈において問題なのは、(MM第一章で扱われる)外界の問題であるから、以下では、この言明における「心理状態」を外界の表象に限定して議論することにしよう。

ベルクソンは、この主張が実際には、生理学的な事実ではなく、生理学に内在的な形而上学の仮説であると指摘した上で、この仮説³⁷は (a) 観念論を採用しても、(b) 实在論を採用しても矛盾を含むこと、にもかかわらずこの仮説が理解可能なのは、(c) 無意識のうちに一方の体系から他方の体系へと移行しているからであることを示すという形で議論を展開している。それぞれについて順次見て行きたい。

(a) まず、ここで言う観念論とは次のような観点を指している。「観念論者にとって、实在の中には、私の意識あるいは意識というもの一般に現れるもの以上のものはない。とすれば、表象の対象になりえなかった物質の特性について語るのは、不合理なことだろう[...]。要するに観念論とは、物質のすべての本質が物質の表象の中に拡げられているか (étalé)、拡げられうるかであって、实在の分節 (articulation) が表象の分節そのものであることを意味する記号の体系 (système de notation) なのである」(ES, 195)。このように特徴付けられる観念論にとって、「外的諸対象は諸々のイメージ (image) であり、脳もそうしたイメージのひとつである。様々な事物そのものには、それらが示すイメージの中に現に拡げられている (étalé) ものか、拡げられうるもの以上のものは何もない」。ではこうした観点からすると、先の仮説はどのように理解されるだろうか。まず、目下問題となっている心理状態＝外界の表象は、観念論の言葉遣いに直せば、それ自体が(脳の状態と同様に)ひとつのイメージである。すると先の仮説は、「その〔脳という〕イメージがあれば世界のイメージ〔＝外界の表象〕が生じる」と

³⁷ この仮説は論文中では「並行論」と呼ばれている。並行論という語彙は、MMにおいてはもっぱら心理状態と脳の状態の間で後者による前者の産出という主張を含まない立場を指すのに用いられているのに対して、「脳と思考」では、産出を認めるか認めないかを問わず、二つの項の間に相等性を認めるあらゆる立場(随伴現象説等)に対して広く用いられているという相違がある。本稿では、用語上の混乱を避けるため、この語彙は用いないことにする。

言い換えられるが、これは「自己矛盾」そのものだろう。「というのも、外界と脳内の運動という二つのイメージは同性質のものと想定されているのであり、二つ目のイメージ、つまり脳内の運動は仮説により表象の領域の取るに足らない微細な一部分であるのに対して、ひとつ目のイメージ、つまり外界は表象の領域全体を満たすものなのだから」。要するに、観念論の観点を徹底しつつ、先の仮説を理解しようとすれば、「部分は全体である」という矛盾が帰結してしまうのである（以上、ES, 198）。

(b) 実在論についても見ていこう。観念論と対照的に実在論は、「物質は表象から独立に存在する」と主張する。ベルクソンによれば、この主張は、「物質についての我々の表象の下には、その表象にはアクセスできない原因が存在する」ということを意味する。なぜアクセス不能かという、「我々の表象」は「我々の知覚の仕方に相対的」な「様々な分割や分節」（ES, 194-195）を伴っているのに対し、表象の原因である物質の方は、その全体が不可分な「相互作用のシステム」（ES, 202）を成しているからである。さて、この観点からすると、先の仮説における脳状態と心理状態は、（それぞれ順に）事物と表象という二つの異なる水準に置かれることになる。したがって、ここでは、観念論の場合のように、表象（ないしイメージ）という水準において部分（脳）が全体（世界）であるといった不合理は生じない。しかし実在論を徹底した場合も同じく「部分は全体である」という矛盾が、今度は「事物」の水準において帰結してしまう、とベルクソンは指摘する。先の仮説は、脳の状態さえあれば「それだけで」、外界の表象が生じると主張するものである。だが、実在論は、物質世界全体を不可分な相互作用状態にあるものと見做している以上、脳の状態を単独で切り出すことなど、そもそも不可能なはずである。それでもなお、自説を貫こうとするのであれば、実在論者は、「ひとつの部分^は、自らの^全てを〔自ら以外の〕^残りの^全てに^負っているにもかかわらず、^残りの^全て＝^全体が消え去っても^残存するものと^考えることができる、あるいはより端的には、^二つの^項の^関係は^{それ}らの^項の^一つと^同等である」と主張せざるをえなくなってしまう、というわけである（以上、ES, 203）。

(c) したがって、観念論と実在論、いずれの場合も、それぞれの観点を徹底するなら、先の仮説は、「部分は全体である」（ES, 204）という矛盾を孕んでいることになる。にもかかわらず、「ある脳の状態を仮定すれば、ある一定の心理状態が生じる」という主張が一見して理解可能であるように思われるのは、一方の観点から出発しておきながら、無意識のうちに他方の観点に移行しているからである、とベルクソンは指摘する。観念論の場合、世界の表象を生み出す（ないしそれに対応する）器官として脳が注目されるや否や、実はその脳は、表象という水準にある観念ないしイメージではなく、（実在論にとっての）事物と化している。すると、脳の状態と心理状態の二項は、二つの異なる水準にある以上、そもそも部分と全体の関係を持ちようがなく、結果として、上述の矛盾は見かけ上は回避されたことになるのである。他方、

实在論は、脳が表象を産出する（あるいはその一部の運動が表象に対応する）器官として認められるや否や、先とは逆向きに、観念論の観点に身を移してしまっていることになる。というのも、实在論が、物質世界全体の相互作用という事実を忘却して、脳が単独で存在し得ると想定することができるのは、脳という表象ないしイメージの分節をそのまま实在と見做す観念論の観点を密かに導入しているためだからである。

2-3-2：常識の必然性

では以上の議論は、MM 第一章の理解に対してどのように有効なのだろうか。繰り返しになるが、第一章の冒頭は、次のように非常に唐突な仕方でも議論を開始している。「物質や精神についての様々な理論、外界の实在性や観念性についての様々な議論についてしばらくの間、何も知らない振りをしてしよう。すると、私は様々なイメージ、私が感官を開けば知覚され、閉じれば知覚されなくなるような、そうした言葉の最も漠然とした意味でのイメージを前にしていることになる」（MM, 11）。「何も知らない振りをしてしよう（feindre）」というフレーズから、この冒頭の一節は現象学的還元の発想と比較されることがあるが、ここで読者が要求されているのは、自然的態度が含意するような判断を保留することではなく、単に哲学的理論に無知な常識の観点に身くというそれだけのことにすぎない。とはいえ、それだけでは哲学的議論の開始点としてはあまりに脆弱に思われるだろう。しかし、この素朴さは装われたものであって、常識の観点が採用されているのは、それが、实在論と観念論という競合的な観点に対して、説明上の優位性を有しているからだ、というのが本稿の解釈である。

形式的に言って、MM 第一章においてベルクソンは自らが採用する常識の観点を、实在論と観念論との対比の下で擁護するという形で議論を進めているため、一見すると先に見た「脳と思考」の論文で行われているのは、競合的な観点に対する再批判であるようにも思われる。しかし、同論文で、ベルクソンは「我々自身、以前の研究の中で『实在論』と『観念論』という言葉はかなり違った意味で取り上げたことがある」（ES, 195）と述べている以上、上の議論で問題となっているのは MM における实在論・観念論批判とは異なる事柄だと考えるべきだろう。そこで同章の議論に目を向けてみると、上で観念論と实在論、それぞれの立場の利点と見做されているものは、実はそのままベルクソン自身が自らの採用する観点——常識——を擁護する際に持ち出す考えと同様のものであることが見て取れるのである。

どういうことか、「脳と思考」と MM 第一章を対比させつつ確認しよう。

第一に、同論文は、物質についての考察を一定の空間的な「分割」を前提とした「表象」を用いることによって開始しているという点に、観念論の観点の決定的な優位性を認めている

38。实在論者がそうするように、「表象の背後に実在一般の存在を措定すること」は少なくとも可能ではある。しかし、「個別の実在について語り始めるや否や」、实在論者として「事物を表象と一致」させざるを得なくなる（以上、ES, 204）。というのも、「そうでなければ、実在から諸部分を切り離して考察し、それらを相互に条件づけること」、つまり「科学」という営み一般が不可能となってしまうからである（ES, 205）。したがって、「实在論者は、その説明において、観念論者を超えることができない」（ES, 205）、というわけである。そしてこの点で、「脳と思考」が、観念論者のいう「表象」を「イメージ (image)」と言い換えていることは極めて重要である。というのも、MMが常識にとっての対象を指示するのに「事物 (chose)」でなく、「イマージュ (image)³⁹」という語彙を選択した理由はまさにここにあるように思われるからである。実際、以下のとおり、MM第一章は、「脳と思考」において観念論に優位性を認める際と同じ論理を次のように述べている。

いずれにせよ、我々は、様々なものをイマージュという形でしか捉えないのだから、イマージュとの関連において、それもイマージュとの関連においてのみ、問題を提起しなければならないのである（MM, 21）。

とはいえ、第二に、観念論の主張のうち、「意識一般に現れるもの以上のものはない」という部分まで受け入れる必要はない。というのも、实在論が適切に主張しているとおり、「物体」は、いずれも「その各々の性質、したがって、その存在そのものを、それに影響を及ぼす残りの物質とそれが取り持っている様々な関係に負っている」（ES, 202）以上、（例えば）私の目の前にあるコップは、たとえ誰からも見られていないとしても、変わらずそこに存在し続けるのだから。これと同じ論理もまた、MMにはほとんどそのままの形で見出すことができるのである。

より一般的に言えば、ひとつの物質的对象が孤立して存在するなどという空想は、ある種の背理を含んではいないだろうか。というのも、そうした対象もその他の対象との間でとり結ぶ諸関係にその物理的性質を借り受けているのだし、そうした諸規定の各々、したがってその存在そのものをも、その対象が宇宙の総体において占める場所に負っているのだから（MM, 20）。

³⁸ 意識という観点においても、ベルクソンは实在論に対する観念論の優位性を認めている（cf. MM, 264）。この点については本稿第5章を参照。

³⁹ もちろん、原語では区別できないのだが、すぐ後で見るとおり、観念論者とベルクソンとでこの語彙は異なる意味で用いられているため、前者の場合はイメージ、後者の場合にはイマージュと訳し分ける。

以上を踏まえた上で、1911年に付されたMMの第二の序文に目を移せば、そこでベルクソンは、常識の観点およびそれと結び付けられたイマージュ概念を、観念論と実在論という外界の存在をめぐる二つの観点のそれぞれの正当な部分を組み合わせたものとして規定していることがわかるだろう（実際、この「第七版への序文」には、別の文脈であるものの、「脳と思考」への参照指示が出されている（cf. MM, 5））。

本書の第一章が示そうとするのは、観念論も実在論も同じく行き過ぎた主張であるということ、すなわち、物質というものを、それについて我々がもっている表象に還元してしまうのは誤りだが、しかし物質とは我々の中に表象を生み出しつつも当の表象とは全く本性の異なるものとするのも同様に誤っている、ということである。我々の立場からすれば、物質とは「イマージュ」の総体のことだ。そして、この「イマージュ」の語で我々が言わんとしているのは、観念論者が表象と呼ぶものよりは多く、しかし実在論者がものと呼ぶものよりは少ない存在、つまりは「事物」と「表象」の中間に位置する存在なのである。物質のこのような捉え方は、ごく単純に言って、常識のそれである。[...] 常識にとっては、事物はそれ自体で存在しているものであり、しかも他方、我々が見て取るがままにそれ自体、色彩豊かなものでもある。これはイマージュだが、それ自体で存在しているイマージュなのだ。

[...] 本書の第一章を読まれる中で、我々が主張するあれこれのテーゼに対して反論が心に浮かんでくることもある。だが、そんな場合には、当の反論が生じてくるのも、先の二つの観点のいずれかに身を置いているからではないか、と振り返ってほしい。我々としては、これら両者の対立を超えたところに読者を導きたいのである（以上、MM, 1-2）。

したがって、先に予告したように、MMが冒頭で常識の観点から議論を始めているのは、それが（「脳と思考」で規定された意味での）実在論と観念論という競合的な観点に対して、説明上の優位性を有しているということを著者自身は十分に知っているからであって、「知らないふりをしよう」という冒頭の一見素朴な誘いは、実のところ、周到に計算されたものなのである。

なお本稿の責任で一点、先立って補足しておきたい論点がある。先に指摘したとおり、MM第一章においてベルクソンはこの常識の観点、あるいはそれと共に導入されるイマージュの概念から議論を始めることの必然性を強調している。その理由のひとつは、「脳と思考」で明示されていたように、「個別の実在」について語る場合に、我々がものと表象を一致させざるを得ないというものであった。科学理論にせよ、日常的な知覚経験にせよ、物質世界の全体だけでなく、そのうちに存在する様々な個々のものについて語ろうとするなら、我々は自らの表象

の記法体系に依拠した分節を用いることしかできない。観念論的な側面から考えた場合、常識の観点は、それを採用するかどうかは読者次第といった任意のものとしてではなく、我々が物質世界を思考する際に強いられるものとして提示されていたのである。だが、常識の实在論的な側面——認識主体からのものの独立性、そしてそれを支えるあらゆる物体の相互作用——について、ベルクソンは、一見したところ観念論的側面のような必然性を示していないように思われる。そしてもし実際にそうだとすれば、第一章の冒頭でイマージュ概念が導入された直後、そのイマージュが「自然法則」(MM, 11)に従っているとされるのは、そのことが一定の蓋然性を有する科学的事実として認められているからだということになるだろう。その場合、そうした知識がない人にとって、物質世界における因果法則の支配は、必ずしも最初から認める必要のない事実となるはずである。実際そうした解釈をすることも可能ではあるだろうが、本稿は別の理解を提示したい。というのも、ベルクソンはMM第三章において、ごく日常的な水準での因果性について、次のように述べているからである。

最初の場合〔＝「空間に並べられた同時的諸対象の系列」〕、諸項は完全に決定された仕方
で互いに条件付けあっており、その結果、各々の新しい項の出現は予見され得るのである。
だからこそ、自分の部屋を出るとき、私はこれから通過するいくつかの部屋がどのようなもの
であるかを知っているのである。[...] 表象の秩序は、ある場合〔＝この場合〕は必然的
であり [...] あらゆる意識の外にある諸対象の存在について語る時、私はその必然性をい
わば実体化しているのである (MM, 161)

物理学を学んだことのない子供であっても、このような日常的な行為の水準における因果性は、当然ながら知っている。とすれば、イマージュ概念に対して与えられる实在論的な規定——認識主体からの独立性とその他のイマージュとの相互作用——も、観念論的な規定と同様に、我々が物質世界を思考する際に免れることのできない、その意味で必然的なものとして理解することができるだろう。

2-3-3：事実の線と懐疑

MMの議論の出発点となる常識の観点およびその最初の所与としてのイマージュについては以上のとおりである。第一章の具体的な議論を検討する前に、そこで用いられている方法について、ベルクソン自身は明確にしていないものの重要な論点を二点ほど補足しておきたい。

(a) 事実の線

先に引いた第四章前半部以外、MMには、ベルクソンがどのような方法にしたがって議論を構成しているのかを示唆するような記述は見られないが、MM第一章で行われているのは、

講演「意識と生命」（1911）で提示される「事実の線（lignes de faits）」という考えに（暗黙裡にであれ）依拠した議論であると言って良いだろう⁴⁰。

私としては、重大な問題の解決を数学的に演繹しうるような原理は存在しないと思っています。[...] 私はただ、経験のさまざまな領域にさまざまな事実のグループがあり、そうしたグループはそれだけでは求めている認識を与えることはないが、しかしそれを見つける方法を示してくれると思っています。方向がひとつ示されるだけでもすでに何ほどのことであり、方向がいくつも示されるとすれば、それはもう大したことです。というのは、それらの方向は同じ一点に集中して、そこにこそ我々の求めている点が見つかるからです。つまり、我々がいま持っているいくつかの事実の線はまだ必要なところまで届いていませんが、しかし我々はそれらを仮說的に延ばすことができるのです。[...] それらの線は別々に取り上げられれば、単に確からしい結論をもたらすだけでしょう。しかし、それらが全体として取り上げられて、一点に集まれば蓋然性が集積し、確実性への道を歩んでいると我々は感じるようになります。[...] 哲学は追加や訂正や手直しを受け入れて、また自分でも絶えずそれを求めることとなります。実証科学と同じように、哲学は進歩するでしょう。こうして哲学もまた協力によって出来上がっていくのです（ES, 4）。

すでに指摘されているとおり、こうした発想が、演繹や帰納から区別される推論の形態としてのアブダクションと親和性が高いことは明らかだろう。そこで本稿では、以下で見ていく MM の第一章冒頭からの一連の議論を、様々な事実に対して総合的に「最良の説明」を与える仮説を形成するためのものであると理解したい⁴¹。

さて、そのような理解をとったとき、問題となる諸事実は、意識の直接与件と科学的言説の二つに大別できる。本稿が最も重要視する自由行為や、常識の観点の実在論的な側面である「外界への我々の信念」はこのうち前者に相当する。これらはいずれもたしかに哲学以前の日

⁴⁰ cf. Riquier[2002], p. 275.

⁴¹ 周知のとおり、最初にこのタームを用いたのはパースであり、『精神のエネルギー』の訳注 11 (p. 50) で訳者は、パース的なアブダクションと「事実の線」という発想の類似を指摘している。今日では、理論の発見ないし仮説の形成に関わるパース自身におけるアブダクション概念を、理論の正当化や評価という側面に関わる、より現代的な意味でのアブダクション概念から区別するのが通常である。後者の文脈において、「事実の線」という発想に最も近いのは、近似的真理の概念を用いた Theo Kuipers による次のようなアブダクションの定義だと思われる (cf. Douven[2017]) : 「証拠 E と E についての説明の候補 H_1 、...、 H_n があるとき、 H_i が E をその他のあらゆる仮説よりも良く説明する場合に、 H_i は他のあらゆる仮説よりも真理に近いと推論せよ」 (Given evidence E and candidate explanations H_1, \dots, H_n of E , if H_i explains E better than any of the other hypotheses, infer that H_i is closer to the truth than any of the other hypotheses)」。とはいえ、(とりわけ MM 第一章に顕著なように) ベルクソンの議論は、仮説の形成というオリジナルのアブダクション概念とも親和性が高いものである。双方の観点からの「事実の線」の概念の特徴づけは、別稿に譲りたい。

常的な経験の所与ではあるだろうが、哲学的な議論という水準から考えれば、いくらでも疑うことが可能なものであって、それ自体正当化を必要とするものなのではないか、という疑念が残るかもしれない。とりわけ、外界への信念という論点は、以下の議論にとってとりわけ重要である。というのも、自由行為が最も明白な事実であるという点については、DI という著作全体がその論拠であるということができるとしても、外界への信念——別の言葉では「常識の素朴な確信」(MM, 41)——について、MM はその正当化を行うことなく議論を開始しているからである。

だがこのことは、ベルクソンが、そうした素朴な信念をめぐる様々な議論を知らなかったということを意味しない。というのも、MM の公刊(1896)の遙か以前、1887-8年に行われた(と推定される)形而上学講義は、そうした「常識」(CI, 297, 314-320)の「確信」(CI, 304)について、「錯覚」(CI, 302-303)や「幻覚」(CI, 323)などの存在に言及しつつ、「懐疑(doute)」(CI, 305)には一定の正当性があることを確認しているからである。最初の講義から、MM とは正反対のことが言われている箇所を引いておこう。

実際、何ものも我々に対して、物質的事物の外的実在、哲学的な表現を用いるならば、いわゆる客観的実在を保証してはくれない。一般大衆、常識は、客観的な物質世界を信じ、そしてその認識の客観性を信じ、木の葉がまとう様々な色、木の幹に蓄えられたかのような硬さや、考察する対象の諸部分のなかを微細な液体のように流れていく熱といったものが自分の外に存在していると、素朴に信じている。しかし、心理学的分析はすでに我々を以下のような結論へと導いたのであった。それは、物質的事物を知覚するとき我々は、自分自身の外には出ていないという結論であり、また極端なことを言えば、これらの対象は実在しないと想定しても見かけは何も変わらないという結論である[...]。

要するに、観念論者と共に外的世界など存在しないと主張する人々は、外的世界の存在を肯定する人々ほど恣意的な想定は行っていないのである。このことは彼らが正しいという意味ではない。ここから引き出すことができるのは、ア priori に、そしてまた全く純粋な心理学的な分析からは、自然の事物の客観的実在性を議論の余地のないものとして肯定することはできないということである。懐疑は許されているのであり、必要ですらあるのだ(CI, 297)。

こう述べたあと、ベルクソンは、ピュロンやモンテーニュの懐疑論、デカルトの方法論的懐疑、因果性についてのヒュームによる批判からカントの超越論的観念論、そしてリードを代表とする常識学派等々、我々の日常的な認識の正当性をめぐる様々な問題について、時折自説を挟みつつ、一通りの概説を提示している。もちろん、リセのカリキュラムに沿ってごく一般的

な哲学の概念・議論の概説を行うという側面が強いこの講義での発言をそのまま、当時のベルクソン自身の見解として認めることは難しい。しかし少なくとも、この講義の内容を通覧すれば、ベルクソンがすでに DI 執筆の段階で、物質世界について論じる際に扱わねばならない認識論上の問題について熟知しており、したがってまた、常識の観点から議論を始めようとするれば、直ちに様々な反論が提示されることも当然知っていたであろうことは容易に想像できるだろう。にもかかわらず、MM 第一章は、(わずかばかり「錯覚」(MM, 31)や「幻覚」(MM, 41)へ言及してはいるものの)、そうした反論への対応を明示的には行っていないのである。この点の理解の鍵になるのは、先にみた(MM 第四章で提示される)方法論に関する記述の続きに当たる箇所である。

この方法は、直接的認識に、恣意的に特権的地位を与えていると非難されるだろうか。しかし、反省が告げる様々な困難や矛盾、哲学者が立てる問題がない場合に、ある認識を疑う(douter)のにどんな理由があるというのだろうか、またそうした場合、そもそも認識を疑うという考えは生じるだろうか。だとすれば、そうしたさまざまな困難や矛盾、問題が生まれるのは、何よりもまず、直接的認識を覆い隠してしまう記号的表象のせいだということを示せるなら、直接的認識はもうそれ自身のうちに自らの正当化と証明を見出すことになるのではないか(MM, 208)。

要するに、必要なのは、常識の確信を最初から疑うことではなく、疑いを生じさせてしまうような前提を突き止め、その誤りを指摘することであって、そうすれば、外界への我々の信念は、正当化の必要のないもの、言い換えれば、それ自身によって予め正当化されたものと見做すことができるようになるのである。

では、目下の文脈において、困難や問題を生じさせている前提とは何か。上の引用部と先の講義がともに取り上げているのは、カントの超越論的感性論である。「カントによれば、物質的対象について言われる外在性は、もっぱら我々がそれらを空間と時間のなかに位置付けることに由来するものであり、しかも空間と時間はまったく主観的な表象にすぎないから、我々は外的対象を認識していると思いついでいるときも、自分自身の外に出ているのではない」(CI, 310)。しかし、すでに確認したように、MM は空間を実践的な観点から再考することによって、延長を、感性の形式でなく、我々の知覚それ自体に認めることになる。すると、その延長は、我々でなく外的対象そのものに由来するものだと思えることが可能となり、その場合には、我々は実際直接的に、外界そのもの、拡がりを持つ対象を見ているのだという信念が自己正当化されることになるだろう、というわけである。

本章では、まず、自由行為を初期ベルクソンの二つの著作に一貫した主題であると捉える際に想定される反論への応答を行なった。MMが冒頭で問題で示している他行為可能性は、遂行されつつある未完了の行為における可能性であって、DIで自由意志と共に批判された完了層の下で捉えられた行為の間での選択ではない。前者はむしろ、DIで示された自由行為の最も低次の段階として理解されるべきものであり、MMが冒頭から始まる議論で問題としているのは、まずもってそうした自由の基盤がいかんして与えられるのか、その可能性の条件の探求なのである。他方、常識の身分については、二つの著作間でたしかに齟齬はある。しかしそれは、ベルクソンの思想の発展と見做される事柄である。というのも、それはMMにおいて空間概念に対し、DIとは異なる考えが示されていることに由来するものだからである。そしてこのことは同時に、物質の問題について、常識の観点が出発点に据えられるひとつの理由となっている。というのもDIと異なってMMにおいては、空間と延長の分離可能性が明確に主張されることによって、外的対象を直接知覚しているという常識的直観には一定の正当性が認められることになるからである。しかしこの点についてMMがDIのように順序だった議論を構成していないことのひとつの理由は、常識という観点が、我々が物質の問題に取り組むに当たってそれを採用せざるを得ない観点だったからである。

以上を前提として、次章では、区別された二つの観点のうち常識の観点を検討するMM第一章、第二章の議論を実際にフォローしていくことにしたい。

第3章 自由行為の可能性の諸条件——常識の認識論

3-1：諸概念の導出

MM 第一章の実際の議論を検討して行こう。まずは、第一章冒頭のパラグラフ末尾を引用する。

〔...〕 情感的状態がやがて到達する行為は、ある運動が別の運動から演繹されるように先行の諸事象から厳密に演繹できるようなものに属してはいないのであり、そうであるからには、この行為は真に宇宙とその歴史に何か新しいことを付け加えるのである。見えているままの事柄に即することにする。自分が感じ、自分が見ていることを、私は端的にこう定式化しよう。私が「宇宙」と呼ぶところのイメージの総体においては、ある特殊なイメージ、その典型が私には自分の身体によって与えられるイメージを介してでなければ、本当に新しいことは何も生じえない、という具合にすべては進んでいる (MM, 12)

常識の観点から考えるなら、物質世界は、因果的法則に従った様々なイメージの総体であるが、その中で我々の身体は、物体とは異なって自由に振舞っている。MM は、出発点としての常識の観点から、まずは前著で最も明白なものとして確認された自由行為について端的な事実確認をすることから議論を開始しているのである。とはいえ、ここで問題となっている自由行為とは、すでに予告したように、自我の全体を表現するような程度の高い自由行為ではなく、最も低次の、DI が「我々の自由な活動の基盤」と呼んだ水準に相当する行為である。では、そのような行為が可能であるためには何が必要だろうか。本稿では、次のように考えたい。すなわち、自由行為が可能であるためには、まずもって (a) 複数の選択肢が身体に対して示されること、そして (b) それらのうちからひとつを身体が選択することが必要である、と。結論から述べれば、MM においてこれら二つの論点は、それぞれが「知覚」と「記憶」に関する議論の端緒となっていると考えることができる。順次確認していこう。

3-1-1：知覚

身体の行為の自由についての事実確認をした直後、ベルクソンは、その身体を「形作る」「システム」、すなわち「神経系」の「役割」について、「生理学者と心理学者」に問いかけるという仕方で議論を開始している。彼らの応答はこうである。

神経系の遠心運動が身体の移動を引き起こすことができるのに対し、求心運動、あるいは少なくともそのいくつかは、外界の表象を生み出すことができる。

これはまさに、先に確認した生理学に内在的な形而上学のテーゼに他ならない。それゆえ、常識の観点に立つベルクソンは、このテーゼそのものは、簡単に棄却できる。すなわち、「私が脳の震動と呼ぶこのイメージが諸々の外的イメージを生み出すためには、このイメージは何らかの仕方で諸々の外的イメージを含んでいなければならない、物質世界全体の表象が、この分子運動の表象のうちに含まれているのでなければならない」が、それは「不合理である」。というのも「脳の方が物質世界の部分を成しているのであって、物質世界が脳の部分を成しているわけではない」のだから。「したがって、神経も、神経中枢も宇宙のイメージを条件付けることはできない」のである（以上、MM, 13）。

その上で、ベルクソンは常識の観点から、身体について理解可能なことを取り出していく。すると「私の身体は [...] 他のイメージと同様に行為=作用し、運動を受けとり返している」こと、しかし、「私の身体は、受け取ったものの返し方を選んでるように思われる」ことが確認される。このことを前の論点と合わせれば、「私の身体は、諸対象を動かすよう定められた対象であり、したがって、行為の中核であって、表象を生み出すことはできない」と要約することができるだろう（以上、MM, 14）。

だがそうだとすれば、「身体は、それを取り囲む諸対象に対して特権的な位置を占めていなければならない」、言い換えれば「これらのイメージは、何らかの仕方で、それらが私の身体に向けている側面に、私の身体がそれらから引き出すことのできる利益を素描しているのではない」（MM, 15）だろう。この点について、「意識」の証言を引き合いに出すことで、行為の選択肢は与えられることになる。

事実（De fait）、私の観察によれば、外的対象の大きさや形、そしてや色さえも、私がそれに近づくか遠ざかるかによって変化する。匂いの強烈さや音の強さも、距離に応じて増減する。また最後に、距離そのものが、とりわけ、周囲のさまざまな物体が、言ってみれば、私の身体の直接的な行為から護られているその程度を表しているのである [...] つまり、それら〔私の周囲の対象〕は増減する私の身体の支配力に応じて配置されている。私の身体が周囲の対象はそれらに対する私の身体の可能な行為（*action possible*）を反射しているのである（MM, 15-16）。

身体が取りうる選択肢を把握するためには、ただ周囲を見渡せば十分である。というのも、周囲にある様々な対象は、その各々が身体の方に向けている側面に、それらに対して我々の身体がどのように働きかけることができるのか——行為可能性——を示してくれているからだ、というわけである。

生理学と意識から得られた以上二つの事実——行為の中枢としての身体と知覚における行為可能性——を念頭におきつつ、ベルクソンは、自らの「脳脊髄系の全ての求心神経」を「切断」するという思考実験を行う。すると、当然、一方の知覚は消失する。しかし、他方の身体について言えるのは、「中枢を経て、また抹消へと至る流れを途中で切った」ということ、そしてその結果「私の身体は、事物の取り囲むただなかにならなくなり、それらに作用するために必要な運動の質も量も諸事物から汲み出すことができなくなった」ということにすぎない。このことからベルクソンは、次のように物質と知覚を定義するに至る⁴²。

私は、諸々のイメージの総体を物質と呼び、それら同じイメージがある特定のイメージ、すなわち私の身体の可能的行為と関係付けられたとき、それらを物質についての知覚と呼ぶ (MM, 17)。

このような定義をとることで、ベルクソンは、通常は——先にみた実在論のように——、二つの異なる水準に分離されてしまう物質と知覚を、イメージという単一の水準における関係づけの差異によって区別していることになる。自由行為の可能性の条件の探求という観点からすれば、知覚についてのこうした定義は、（それが行為の選択肢を与えてくれる以上）一見十分なものであるように思われるだろう。しかしベルクソンはこの定義を与えるにあたって「暫定的に」という留保を付けている。それは、この定義が、科学が示す事実と矛盾しているように思われるためである。どういうことか、順次見ていこう。

まず、上述の知覚の定義は、我々の知覚とその対象の同一性を含意している。これは、（例えば）「光点 P」（MM, 39）を知覚する際、私の知覚は（他の何ものでもなく）まさに点 P にある光そのものだ、ということである。もしこの言い方に違和感を覚え、私の知覚と光そのものは別ものだと言うとすれば、それは、無意識のうちに、（先に見た意味での）実在論の観点へと移行していることになる。というのも、目下の議論が身を置いている常識の観点においては、観念論の場合と同様に、イメージという単一の水準しか認められておらず、知覚対象の背後にそれとは別の何かの存在を仮定すること——対象を「二重化」⁴³すること——は禁じられているのだから⁴⁴。それゆえ常識ないし意識という観点からすれば、この定義には何ら問題

⁴² この定義の後、ベルクソンは物質と宇宙とを二つのシステムとして定義し、（「脳と思考」とは異なる仕方）で実在論と観念論の観点と対比的な議論を展開しているが、それらの議論についての検討は割愛する。システムという観点からの考察は平井[2016]を参照されたい。

⁴³ Worms[1997], p. 35.

⁴⁴ このことによって、MM は意識的ではないものから意識的なものが発生するという意味での強い創発説は明確に退けていることになる。ただし、より低次の意識的なものが総合されることでより高次の意識的なものを発生させるという意味での弱い創発説は、本稿第 5 章で扱う収縮理論がむしろ支持するものである。

はないのだが、科学における基礎的な事実を考慮するなら、先の知覚の定義はそのままの形で維持するのが困難となるだろう。一方で、実験心理学の知見によれば、人間の知覚には時間における閾値が存在する。ベルクソンが参照しているエクスネルの実験によれば、我々は「2ミリ秒」(MM, 231)以下の継起的な出来事を個々別々に知覚することはできない。他方で、可視光域にある光は、言うまでもなく、この閾値以下の周期で振動している。したがって、科学の観点からすると、我々は光の振動それ自体を個別に知覚しているとは言えないのだが、このことは一見したところ知覚をその対象と同一視する常識の見解と矛盾しているように思われるのである。この困難に対応するためにベルクソンが提起するのが、(a) 純粹知覚理論と (b) 収縮理論という二つの相補的な仮説である。

(a) 第一に、「純粹知覚」とは、「大人の完成された意識でありながら、現在に閉じ込められ、他のあらゆる働き〔＝記憶力〕を排することによって、外的対象に嵌り込むという仕事に没頭している意識が持つであろう知覚」(MM, 30)のことを指す。ベルクソンは、「そうした知覚が、事物についての我々の認識の土台そのものにある」(MM, 30)と想定することで、まずは、知覚は対象そのものであるという常識の観点からの帰結を確保する。

(b) しかし純粹知覚は、「事実上よりもむしろ権利上存在する知覚」とも言われる。というのも、我々の実際の知覚は「たとえどんなに短いものを想定しようとも、常にいくらかの持続を占める、その結果、多数の瞬間を相互に延長する記憶力の働きを要請する」(MM, 31)からである。知覚には最小の時間閾値があるという科学の観点は、「収縮 (contraction)」と呼ばれるこのタイプの記憶力の働きによって説明される。MM 第四章によれば、色を典型とするような「感覚質」は、「複数の純粹知覚」(MM, 203)を、単一の「我々の瞬間」(MM, 227)へと収縮することによって成立するものであり、この瞬間の有する時間的な延長が、先に述べた閾値に対応するのである。ただし、この働きによって物質的对象そのもの(例えば、光の振動)であるところの個々の純粹知覚それ自体が、何らかの仕方で改変されてしまうわけではない。というのも、ベルクソンは、収縮の働きによって形成された感覚質のうちに物質的な振動そのものが含まれていると考えているからである (cf. MM, 229)。したがって、これらの仮説に一定の正当性が認められるのであれば、科学の事実と意識の事実の間に矛盾は存在しないことになるだろう。

とはいえ、ベルクソン自身強調しているとおり (cf. MM, 30-31)、これらいずれも、その内実を把握するためには、MM 全体のテキストを考慮した上での詳細な考察が不可欠である。そのため本稿もこれらの仮説それ自体の検討は先送りして、ここでは行為の選択肢としての知覚

の定義から、純粹知覚と収縮という二つの概念ないし働きがが要請される、という議論の流れが押さえられれば良いとしよう⁴⁵。

3-1-2：情感 (affection)

身体の可能的行為と関係付けられた対象という知覚の定義からは、さらにもうひとつ、情感 (affection) という概念が導かれることになる。この点について確認する前に、前著との関連で少し用語を整理しておこう。先に確認したように DI において、ベルクソンは「感覚」の語をその対象が、身体の外部か内部かによって、(順に) 表象的感覚と情感的感覚の二つに区別していた。MM において常識の観点からえられた上述の定義における知覚は、このうち表象的感覚に相当するものだが、その内実を全く異にしていることは明らかだろう⁴⁶。というのも前著において表象的感覚とその対象は、カントにおける感覚と物自体と同様、結果と原因という形で二つの異なる存在者として明確に区別されていたのに対し、MM における知覚は両者の同一性を主張しているからである。表象的感覚と対比的に、情感的感覚は、身体の内部に位置付けられる感覚、典型的には筋肉の収縮に伴う運動感覚や痛みなどのことを指すものであった。したがって、情感⁴⁷という概念自体は、DI においてすでに用いられていたのであるが、以下で改めて示されるのは、その「本性」(MM, 52) である。外的知覚の場合、その本性が可能的行為の提示であるということは、上で見たように、日常的な経験を注意深く「観察」しさえすれば、理解されることである。しかし、内的感覚の場合はそうはいかない。運動感覚、努力感、痛み等々、一般に感覚と呼ばれるものを列挙したところで、それらの間には内的ということ以外、何ら共通性が見出せそうにないからである。言い換えれば、情感的感覚については、「なぜそれが現にあるようであって別様ではないのか、ということについてのいかなる理由も存在

⁴⁵ 第四章の概念が顔を出してきていることから明らかなように、これら二つの仮説が提示される場面に至ると、議論はすでに常識の観点から形而上学の観点へと「はみ出ている」(MM, 78)。したがって、MM は第一章に限っても、純粹知覚理論が提示される文脈に至ると、イマージュないし常識という単一の水準での議論を行っていない、というのが本稿の解釈であり、これは Riquier[2009] (p. 338) のように、同章を一貫して常識の観点から読もうとする方針とも、反対に、純粹知覚理論以外の部分をも(第四章と短絡して) 形而上学の観点から読もうとする Deleuze [1983] の理解とも異なるものである。なお、純粹知覚理論と同章の中核を成す議論がここでまとめて扱われていないのは奇妙に思われるかもしれないが、ベルクソン自身、純粹知覚理論について「自分で選んだ道を適切な限度のはるか先にまで進んでいく」ものであるから「以下は単に図式的な叙述と見て欲しい」(MM, 31) と注記していることをここで強調しておきたい。

⁴⁶ 実際、すでに DI でも表象的感覚は時折、知覚と言い換えられていた (cf. DI, 6)。また、MM においても「表象的感覚」というタームこそ用いられなくなるものの「表象」の語は「知覚」の同義語として用いられ続けている。MM 第四章では、感覚というタームが知覚の同義語として使用される場面があるが、これについては後述する。

⁴⁷ 「情感 (affection)」という単独の用法は MM が初出であるが、これはおそらく、表象的感覚が知覚と呼ばれるのに合わせたためだろう。ただし、情感的感覚という語の方は(表象的感覚というタームと異なると)、MM でも引き続き用いられている。

しない」(MM, 65) ののである⁴⁸。しかし上で導出した知覚の定義からであれば、情感の本性を導くことができる、とベルクソンは考える。先の定義は、基本的には、外的知覚、つまり身体から離れた場所にある対象の知覚に関するものであった。今私の目の前にあるコップが、様々な可能的行為を示すことができることは、まずもって、私の身体とコップとの間に一定の距離が存在することを前提としている。「しかし、その対象と我々の身体との距離が減少するにつれて、言い換えれば、危険が切迫したものになったり、見込みが差し迫ったものになるにつれて、潜在的〔＝可能的〕な行為は、次第に現実的行為へと変化することになる」(MM, 57)。とすれば、「距離がゼロ」になり、「我々自身の身体が知覚すべき対象となった」場合、知覚が提示するのは、「もはや潜在的〔＝可能的〕行為ではなく、現実的行為」であるだろう(MM, 57-58)。この「極限」における知覚、身体そのものを対象とする「特殊な知覚」を、ベルクソンは「情感」と名付けるのである。すると、知覚一般の本性が、身体の可能的な行為の反射であったのと対照的に、情動の本性はその現実的行為の表現だということになる。だが、現実的行為を表現する、とはより正確によってどのような事態を指しているのだろうか。

この点についてベルクソン自身は明確なことを述べていないが、情感が知覚の定義から導かれることを念頭におけば、次のように考えることができるだろう。ある単一の外的対象、例えば今私の目の前にあるコップについて考えた場合、その知覚と呼べるのは、コップという対象ないしイメージのいくつかの部分にすぎない。ベルクソンによる知覚の定義に従うなら、これは、それらコップの諸部分——より具体的にはコップ表面のうち、私の身体の方を向いている側面——こそが、私の身体の可能的行為と関係づけられた対象だ、ということである。このとき注目したいのは、それらの部分はそれぞれが単独で可能的行為を表現しているわけではない、という点である。そうではなく、コップの表面のうち私に見える部分が総体として、様々な可能的行為——つかむ、投げる、飲む等々——を示唆しているのである。特殊な知覚として定義される情感についても全く同様に考えることができる。痛みや運動感覚など、様々な異なった質を伴って与えられる諸感覚は、いずれも単独では身体の現実的行為を示すことはない。それらの感覚に対応する身体の諸部分は、総体として身体全体が現に行っている行為を表現しているのである。知覚と対比的な定義を与えるとすれば、情感とは、身体全体のうち、その身体の現実的行為と関係付けられた諸部分であると言えるだろう。そしてこのように考えるなら、MM は、DI のように情感的感覚とその対象である身体内部の運動とを——結果と原因、あるいは翻訳するものとされるものという仕方で——区別せず、むしろ知覚が対象そのものだったのと全く同様に、情感と身体の諸部分それ自体とを同一視していると理解できるだろう。

⁴⁸ しかし、先に本稿は、情感的感覚の役割についてすでに一定の規定を与えていたではないか、という反論があるかもしれない。この点については、本稿第3章で詳細に取り上げたい。

3-1-3：記憶 (souvenir)

行為の選択肢に関して、MM 第一章から取り出せることは以上である。そこで、非決定ないし自由な行為の可能性の第二の条件——複数の行為からの有用な選択——の検討に移りたいのだが、この点について同章から言えることはほとんど以下で尽きている。

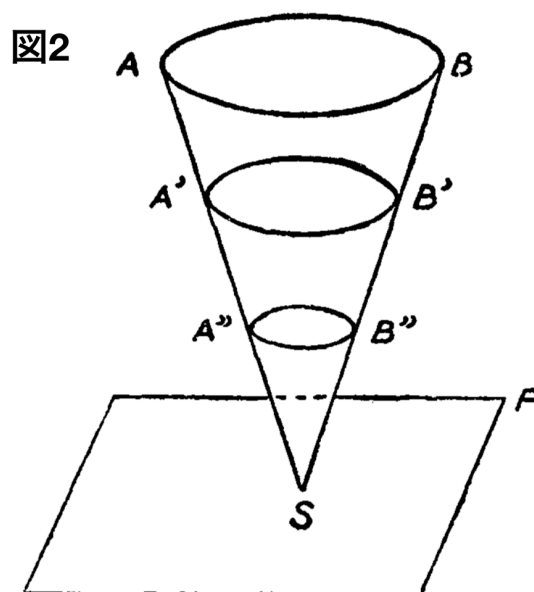
身体の目的が、様々な刺激を受容し、それらから思いがけない様々な反応を作り上げる

(élaborer en réactions imprévues) ことであるとしてもなお、反応の選択 (choix) は偶然に行われるのであってはならない [...]。その選択は、疑いなく、過去の様々な経験から示唆を得るのであり、類似した様々な状況がかつて後に残すことができた記憶への呼びかけなしにはなされ得ない (MM, 67)。

決断が「気まぐれ」や「偶然」でなく、「有用な」(MM, 12) ものであるなら、それは「過去の経験」、言い換えれば「記憶 (souvenir)」を利用していなければならない。ここで問題となっているのは、先に見た収縮という記憶力とは異なるものであることには注意が必要である。というのも、収縮が現在の瞬間そのものを構成する働きであったのに対し、行為の選択にとって必要なのは、過去に関わるものだからである。しかしこの意味での記憶ないし過去の身分の詳細な検討は、MM 第一章では行われず、第二、三章へと引き継がれることになるのである。

3-1-4：逆円錐の哲学

MM 第一章が常識の観点から出発して、自由行為が可能であるための最初の条件——身体への選択肢の提示——の探求として知覚論を考察し、そこから純粹知覚や収縮、情感といった MM の主要概念が導出されることを確認した。以下では MM の第二、第三章を中心として、自由行為の可能性のもうひとつの条件——行為の選択——の検討と、前章ではただ示唆されるに留まっていた記憶力の概念を中心とした考察を行うが、その前に同書



第三章で示される有名な逆円錐図(図2⁴⁹)に対して一定の注釈を与えておきたい。というのも、この図は、正しく理解されるのであれば、これまで見てきたMM第一章の議論と、後続の二つの章の議論に対する優れた要約となっているものであり、ベルクソン自身、図こそ提示してはいないものの、この図の概説に相当する内容を、MM第二章の冒頭で述べているからである。まず、図の下部にある「平面P」をベルクソンは「宇宙についての私の現実的な表象」と呼んでおり、これはそのままMM第一章にみた知覚の定義のことを指している。すると、「宇宙」すなわち「イマージュの総体」の方は、Pと同水準にはあるが、Pを部分として含みつつそれを超えて広がった平面の全体と理解することができるだろう(あまり指摘されないが、Pは宇宙についての表象と言われる以上、身体の行為可能性に応じて限定されているのである)。また、Sは「身体のイマージュ」と定義される——だから、情感もSに位置付けられる——ことから、図の下部は、全体として、イマージュの総体の中で、身体に対して行為の選択肢が提示されるというMM第一章の結論をそのまま表現していることになる(以上、cf. MM, 168-169)。他方、自由行為のもうひとつの可能性の条件——行為の選択——を端的に示すが、円錐だと理解することができる。これから見ていくとおり、ベルクソンはMM第二章で(先ほどとは異なる仕方)で記憶力に身体的習慣に関わるものと過去の出来事のイメージに関わるものという二つの形式を区別するのだが、このうち前者は頂点Sに、後者は底面ABに、それぞれ位置付けられるものである。これら二つの記憶力はそれぞれが、そのまま二つの再認——自動的再認と注意的再認——に対応づけられ、先にも予告したとおり、これらの再認はそのまま行為の二つの選択の仕方となっているのである。その上で強調しておきたいのは、円錐によって示される「意識の諸平面」の理論についてベルクソンがMMの考察の出発点となったと述べているという事実である(cf. MM, 7)。このことは、自由行為を初期ベルクソン哲学における一貫した主題と見做す本稿にとって極めて重要である。確認したように、DIにおける自由行為には、受容した印象ないし感覚をそのまま決まった運動へと引き継ぐだけの「意識ある自動機械」と呼ばれるような水準における行為から、人格の全体が表現されるような行為に至るまで、連続的な程度が認められていた。MMの議論が自由行為の可能性の条件の探求として理解されるのだとすれば、身体に複数の選択肢が提示され、それらのうちひとつが選択されるというだけでなく、この連続的な程度を許す自由という発想が、同書の枠組みにおいても具体化されているのでなければならないだろう。それこそがまさしく意識の諸平面の理論であると理解することができる。というのも、DIにおいて自我ないし人格といったタームによって語られていた問題は、MMでは記憶(souvenir)という語彙を用いて論じ直されるのだが、その

⁴⁹ cf. MM, 181.

記憶の全体の収縮と弛緩の様々な程度を表したものが図中の A'B'や A"B"といった無数に想定される諸平面だからである。

3-2：記憶と記憶力の二つの形式

では MM 第二章の内容の検討に移ろう。同章でもベルクソンは、様々な事実をよりよく説明する仮説を提示するという形の議論を行なっているが、第一章の場合の場合と異なって、いくつかのほとんど自明な事実を扱うというよりも、（心理学・生理学上の）膨大な事実から自説の論拠となるものをピックアップしているという趣向が強いように思われる。だが、冒頭でも述べたように、そうした事実は今日的な観点から言うと、当時ほどベルクソンの仮説を補強してくれるものではないように思われるため、それらの諸事実については、最低限の参照に留め、本稿にとって重要な議論・概念の導入の方を優先させたい。以下、まず (1) MM 第二章で提示される記憶の二つの形式を概観した上で、その形式の区別におおよそ対応する (2) 行為の選択の二つの方式として、自動的再認と注意的再認の区別を確認したい。

3-2-1：習慣と出来事

MM 第二章は、「学課 (leçon) 」の「暗記する」プロセスという事例を検討することで、「本性」の異なる二つの記憶の形態の存在を導いている (cf. MM, 83-84)。学課——例えば、例文——を暗記しようとするとき、我々はある時は教室で声に出して、またある時は自分の部屋で頭の中でそれを繰り返し「朗読」する。何度も反復することで我々は徐々にそれを諳んじることができるようになるわけだが、そのように暗記された「学課の記憶は習慣のもつ性質すべてを有している」。すなわち、この記憶は「習慣と同じく、同じ努力の反復によって獲得され」、「全体の動作についての分解」と「再構成」を必要し、また「最初の衝撃さえあればそれで全体が揺さぶられるようになっている一定の機構の中、いつも同じ順序で続いていき同じ時間がかかるようになっている様々な自動的運動の閉じたシステムの中に蓄えられる」のである。その一方で我々は「それぞれの朗読」に伴った光景や、その時の気分などを思い出すことができる。そうした「朗読の記憶」は「習慣のもつ精神をいっさい有していない」。というのも、個々の朗読は、「すぐさま記憶に刻み込まれる」ものであり、かつ「別の朗読が構成するのは、別の記憶である」である以上、その獲得に際して反復の努力も再構成も必要なく、さらにはその再生には「任意の長さの持続を割り当てる」ことができる——決まった時間がかからない——からである。

したがって、「学課の記憶」と「朗読の記憶」の区別を一般化するなら、次のように言うことができるだろう。

I: 過去は二つの異なる形態で残存する。(1) 運動機構として。(2) 独立した記憶として(以上、MM, 82)。

後続の議論との関係から、本稿では前者を「習慣としての記憶 (souvenir-habitude)」(MM, 91)、後者を「出来事」⁵⁰としての記憶と呼ぶことにしたい。

3-2-2: 習慣的記憶力と純粋記憶力

そして、こうした記憶についての区別から、「理論上は独立した二つの記憶力 (mémoire)」の存在が指摘される (MM, 86)。明示的でないものの、MM は souvenir と mémoire という二つの概念を使い分けている、という点を強調しておこう。これまで見てきた記憶 (souvenir) は、事柄としては、習慣にせよ出来事にせよ、保存された記憶内容のことを意味すると言って良い⁵¹。これと区別される記憶力 (mémoire) の方は、保存された記憶が総体として有する働きのことを指す語彙として用いられている。そこで本稿では議論を明確にするために習慣記憶が総体として有する働きを習慣的記憶力、出来事の記憶が同じく総体として有する働きを——後出の議論との関連から——純粋記憶力と呼ぶことにしよう。さてまず、このうち純粋記憶力について MM 第二章は二つの働きを区分している。

第一の記憶力は、〔a〕記憶イメージの形で、我々の日常生活の全ての出来事を、それらが展開していくのに応じて記録していく。それは、いかなる細部も見落とさない。そして、事実のひとつひとつ、行為のひとつひとつにその場所と日付を残していく。それは有用性や実践的応答の下心なしに、どうにもならない生まれつきの必要から、過去を蓄えていく。この記憶力によって、〔b〕かつて経験された知覚の知的な再認、あるいはむしろ知性ならでの再認が可能となる。また、あるイメージを見つけにこれまでの生の坂を登り直していく際に、いつも我々が頼りにするのも、この記憶力である (MM, 86、区別の付加は引用者)。

(a) は出来事の記憶の「保存」、(b) は保存された記憶を基礎として為される知的再認ないし「注意的再認」と要約できるだろう。他方、習慣的記憶力の働きは、このうち (b) と対比

⁵⁰ ここで問題となる出来事は、想起された限りにおいて、後出のイメージ記憶と呼んでも良く、実際ベルクソンもそういう言い方をしている (MM, 86 等) のだが、注意的再認の場面で見ると、イメージ記憶というタームは MM において必ずしも個体的な出来事だけに関連するものではないため、ここでは出来事というタームの方を用いておく。

⁵¹ ではなぜそのまま内容という訳語を用いないかと言えば、この語彙はそれを容れる容器 (contenant) の存在をどうしても示唆してしまうからである。MM は習慣記憶には脳を容器に相当するものとして認めていると言うことができるが、出来事としての記憶には、それ自体では——つまり、後出の純粋記憶という意味では——、それを収める容器の存在を明確に否定しているのである (cf. MM, 165)。

的に (c) 「自動的再認」と呼ばれる⁵²。先にみたとおり、MM において、習慣とは「様々な自動的運動の閉じたシステム」のことであった。このシステムは、「外的な様々な刺激」に対して「多種多様な」「生まれかけの」「反作用」を惹起させることができ、その「意識」によって我々は様々な対象を何らかの表象の媒介なしに再認することが可能なのである (cf. MM, 86)。以上をまとめれば、次のように言うことができる。

II：現在の対象の再認は、それが再認対象の側から生じる場合には運動を通じてなされ、再認主体のほうからなされる場合には表象を通じてなされる (MM, 82)。

これら二つの再認は、そのまま行為の選択の二つの方式であると考えることができる。第一に、自動的再認は、身体だけで可能な再認であるが、この水準の経験においては、あとで見るとおり、受容された刺激が、自動的に開かれた複数の反応のうちの一つを選択を行うことができる (MM, 89)。第二に、これも後で詳述するとおり、注意的再認においては、自動的再認を基礎としつつ、そこで生じる運動傾向を媒介として、現在の状況にとって有用な記憶の選択が行われるのだが、この選択はそのまま、提示された複数の行為の選択肢のうちの一つの選択となるのである。

3-3：習慣的記憶力の諸相

さて、残るは、それぞれの再認——行為の選択——がより正確に言ってどのように為されるのか、その検討となるが、上記のうち純粹記憶力に関わる論点についての「立ち入った考察は、続く第三章で [...] ようやく可能となる」 (MM, 98) と言われているため、本稿でも次章へ先送りして、以下では、習慣的記憶力に関わる諸論点だけを考察しよう。明確にしておきたいのは、このタイプの再認についての MM 第二章の議論と、第一章で提示された諸概念との関連である。

3-3-1：自動的再認

先に見た習慣に関する一連の記述でベルクソンは、自動的再認が、対象由来の刺激に対する反作用ないし自動運動を意識することによって可能となるとしている。だが、この意識、あるいは自動運動や反作用とはより正確に言って何であるのか、その身分を MM 第二章は明確にし

⁵² ここで純粹記憶力と対比的に、習慣の獲得のプロセス、あるいはその意味での記憶の脳への保存それ自体を習慣的記憶力の働きと見做しても良いかもしれないが、習慣の形成自体は MM では主題的に取り上げられないのでここでは自動的再認という論点だけに絞っている。

ていない。この点について理解するにあたって参考となるのは、病理学の文献を参照しつつ自動的再認を語り直している以下の箇所である。

日常的な対象を再認することは、とりわけ、それを用いることができるということである。これはまさにそのとおりで、我々が精神盲と呼ぶあの再認の疾患に対して、初期の観察者たちは失行症 (*apraxie*) という名を与えていたほどである。しかし用いることができるとは、すでにそれに順応する諸運動を素描することであり、あるひとつの態度をとること、あるいは少なくともドイツ人たちの言ういわゆる「運動衝動」の結果として、その傾向をもつことである。対象を用いる習慣は、ついには運動と知覚の全体を組織するにいたり、反射的に知覚に伴おうとするこの生まれつつある運動の意識がここでもまた、再認の基礎にあるだろう (MM, 101)。

注目したいのは、ここで知覚というタームが運動の意識と区別される形で用いられているという点である。先に見たように、MM は第一章において知覚を身体の可能的行為と関係付けられた対象ないしイマージュと定義していた。これは常識の観点からの自然な知覚の定義ではあるのだが、ここでの再認についての理解を踏まえるのであれば、第一章で知覚と呼ばれていたものは、厳密に言えば、再認された対象、つまり「日常的な対象」ではないことになるだろう。というのも、精神盲——視覚は正常なのに対象が再認されない——の症例が示しているように、日常的対象の再認には、知覚だけでなく、身体内部で惹起される運動が不可欠だからである。ではその運動は、どのような形で意識に昇るのだろうか。MM 第一章の議論から導出された三つの基礎概念——知覚、記憶、情感——のうち、(知覚はもちろん) 記憶はここで用いることはできない以上 (自動的再認は定義上、出来事ないしイマージュ記憶の介入を排除している)、情感によって、と答える他ないだろう。そこでその情感がどのような機能を担わされていたかを改めて確認すれば、それは身体の現実的行為の表現、つまり現に身体が遂行⁵³している行為を、関連するいくつかの身体の諸部分が総体として示すというものであった。問題は、これだけでは目下の再認において必要な自動運動ないし反作用の意識が与えられることの説明にはなっていない、という点である。というのも、MM 第二章で自動的再認との関連で語られる運動とは「生まれつつある」運動、まだ実際には実現されていないが、今後実現される

⁵³ ここで行為の「遂行」と行為の「実現」の区別を注記しておきたい。これらの訳語の原語として念頭にあるのは同じ *accomplir* だが、この語は、問題となる文脈によって異なる含意を有しているように思われる。本稿において行為の「遂行」という表現が指示するのは、「A から B へ」と手を動かす (MM, 212) という場合のような、身体が全体として現に行なっている行為であるのに対し、行為の「実現」という表現によって示されるのは、そうした行為の遂行に先立って、ある特定の行為が選択・開始されるという事態である。

かもしれない、そのような運動ないし反応の「素描」に相当するものであるのに対し、第一章の情感の定義において問題となっているのは現に遂行されている行為だからである。

この点について考えるヒントは、実はMM冒頭のパラグラフにある。そこでベルクソンは、すでに情感概念を自由行為との関連で導入しつつ、それが「感覚 (sensation) ないし感情 (sentiment) という形で」(MM, 12) 与えられるものだ、と述べていた。このことは、情感概念には、感覚と感情という下位区分が設けられていることを示唆するように思われる。しかし、そうだとすると、両者は何によって区別されるのだろうか。

第一に、明示的ではないものの、各々の感覚が単純なものであるのに対し、感情はつねにそうした感覚を複合したものであるという点。これは、DIの意識の諸状態の区分において、「筋肉努力」と「情感的感覚」が、それぞれ順に複合状態と単純状態と呼ばれていたことにほぼ対応すると言って良いだろう。それゆえ、(すぐ後で見る運動図式論においてそうなっているように) 複数形で感覚が語られる場合は、問題となっているのは感情に相当するものと捉えることもできるのである。

第二に、自動的再認の基礎を成す運動の意識が「感情」(MM, 101-103) という語彙で語られていることを考えれば、その区別は、問題となっている情感が、脳に蓄えられた運動機構が発生させる「生まれつつある」運動であるか、外界からの刺激にせよ、自発的な行為の結果にせよ、「現に、完全に」生じている感覚神経の運動であるかであると言えるだろう (cf. MM, 123-124)。実際、MM第一章はすでにこう述べていた。「脳の役割とは」、「受容された運動にかんしては」、「この運動に運動経路全体を開き、運動が含みもっている可能的反作用のすべてをそこに素描するようにして、この散逸において運動自体が分析されるようにすることである」(MM, 26)。ここで受容された運動とは抹消神経の振動のことであり、これが情感の第一区分である感覚に相当するとすれば、そうした運動が脳に伝達されることで関連する「筋肉の収縮と緊張」(MM, 122) という形で惹起された散逸していく可能的反作用の方が第二の区分としての感情であると言えることができる。とすれば、自動的再認とは、厳密には、対象の知覚がこうした感情によって補われることによって成立するものとして理解できるだろう。

3-3-2：運動図式

さて、以上の議論は基本的には視覚ベースで行われてきたが——これはMMが全体として視覚経験を主に取り上げているということによる——同じことを聴覚ベースで述べたのが、運動図式論であると言って良い⁵⁴。

⁵⁴ 目立たないが「図式」というタームが初めて登場するのは視覚的知覚の議論である (MM, 106)。

ベルクソンは、自分の知らない言語で話す二人の会話を聴くという場面を例に説明している。今私の前にエスペラント語で会話している二人組がいるとしよう。私はエスペラント語を学んだことがないので、彼らが何を話しているかはもちろん、そもそも彼らが何語で話しているのかすら解らない。とはいえ、彼らの発話によって「私に届く震動は、彼らの耳を打っているのと同じである」(MM, 120)。つまり今、私と彼らは「同一の物理的条件」の下にいることになる。にもかかわらず、私が「どの音も互いに似ている雑音しか知覚しない」のに対し、彼らはいえ「その同じ音の集塊において、互いに似ていない子音や母音、シラブル、そして諸々の判明な語を聴き分けている」。このとき、私になくて彼らにあるものが運動図式である。

本当に我々が一方で聴覚的印象だけに関わっており、また他方で聴覚的記憶にだけ関わっているのなら、困難は乗り越えられないものだろう。だがもし聴覚的印象が、聴き取られたフレーズを区切り、その主要な分節を示すことができる生まれつつある運動 (mouvements naissants) を組織するのであれば、事情は同じではないだろう。そのとき内的に随伴するこの自動運動は、はじめは漠然とし秩序立っていないとも、反復されるにつれてしだいはつきりと分離して来るだろう。そうした自動運動は、最終的に、単純化された形 (figure) を表すようになり、聴く人はそこに話す人の運動そのものの大筋や主要な方向を見出すだろう。こうして我々の意識の内には、生まれつつある筋肉感覚と言う形式において、理解される発話の運動図式 (*schème moteur de la parole entendue*) というべきものが展開されることになる (以上、MM, 121)。

以下、二つの観点から図式概念を特徴付けてみたい。第一に、図式の外延は感情であるという点。具体的には、「理解される発話」の図式は、「発声筋」(MM, 121)の生まれつつある運動についての感情という仕方で意識される。第二に、図式は運動に一定の「傾向」を与えるという点。言い換えれば、図式は、無秩序な運動ではなく「正しく秩序付けられた運動の随伴」(MM, 101)を展開する。これは、カントにおいて(図式を展開する)構想力が現象の多様において「ある種の規則にかなった随伴ないし系列」(A100)を形成する役割を担っていたことに対応すると言って良いだろう。

図式を与えるそうした傾向について、ベルクソンは、体操の練習を例に説明している。体操を練習し始めたばかりのとき、手本となる運動を見る際の知覚や、その模倣を試みる身体運動は、どちらも「漠然」としている。練習を繰り返すことで、身体運動は、「その各々の要素」が「自律」していることでその運動に「正確さ」を与えながらも、同時に、他の諸要素との間に「連帯」を維持するようになる。そうした各要素の連帯によって、図式を展開する運動

の「部分」は「潜在的に全体を含んで」おり、また「後続する運動」は「先行する運動のうちで先行形成される」（MM, 102）。この先行形成がこそ、図式が展開する運動の傾向である。

本章では、常識の観点から、MM の実際の議論を自由行為の可能性の条件の探求として辿るという作業を行なった。自由行為が可能であるためには、まずもって、複数の行為の選択肢が身体に対して提示されること、そしてそうして提示された選択肢の中からひとつが選択されることが必要であるが、これらは大枠で言えば、知覚論、記憶論に相当する。そこでまず、前者を扱う MM 第一章の議論のうち主要な論点をフォローし、行為の選択肢は、自由意志説が主張するような想像空間上ではなく、実際の知覚空間にすでに行為可能性という形で与えられていること、そしてそこから導かれる知覚の定義——身体の可能的行為と関係付けられた外的諸対象——の検討を通じて、MM における主要な概念・理論——純粹知覚・収縮・記憶——が要請されることを示した。続いて、記憶論を扱う MM 第二章に目を移し、一般に記憶と呼ばれているものには習慣と出来事の二種があり、そのそれぞれが主導する二つの再認の形態が認められること、そしてそれらはそのまま行為の二つの選択方式に対応することを確認し、そのうちのひとつである自動的再認およびそれによって可能となる運動図式の展開という論点について一定の理解を与えておいた。しかしこれと区別される注意的ないし知的と形容されるもうひとつの形態の再認は、純粹記憶と呼ばれる即自的な過去の存在を前提としているため、常識の観点からの考察を許さなかった。このもうひとつの再認ないし行為の選択方式については、次章において、常識の観点から形而上学の観点への移行に不可欠な時間および空間について MM が DI とは異なる見解を提示しており、またそれによって純粹記憶の存在が確保されることを示したあとで、意識の諸平面というより包括的な理論的枠組みの下で考察することとしよう。

第4章 時空概念の改変と記憶の形而上学

4-1：行動の時空間

前章において、情感には、MM 第一章において明示的に認められている身体の現実的行為の表現という機能以外にもいくつかの機能があることを示したが、テキストを詳細に読み解くなら、実はもうひとつ、本稿にとって最も重要な機能が認められるべきことがわかってくる。一言で言えばそれは、行動の時空間の産出である。MM は空間概念を実践的な観点から再考することで、常識の観点から形而上学の観点へと移行するのであるが、先にも述べたとおり、空間についての理解がDIの時点から改変されていることをバルクソン自身は述べていない。だが、本稿の以上の考察を踏まえつつ、MM 第一章および第三章の記述を読み返すなら、そこではDIにおいては示唆されるに留まっていた質的な空間についての理解がより明示的に示されていることがわかるだろう⁵⁵。さらに言えば、その質的な空間理解は、そのまま行為との関連における持続概念そのものの再考ともなっているのである。以下このことを、(1) 知覚における反射と時間的距離、(2) 行動空間、(3) 行動時間ないし「私の現在」の三つの論点から確認していきたい。

4-1-1：知覚における反射と時間的距離

まず検討したいのが、MM 第一章の冒頭で、知覚概念を定義する際に最初に引用したテキストである。先には省略した部分も含めて再度引用しておこう。

事実、私の観察によれば、外的対象の大きさや形、そして色さえも、私がそれに近づくか遠ざかるかによって変化する。匂いの強烈さや音の強さも、距離に応じて増減する。また最後に、距離そのものが、とりわけ、周囲のさまざまな物体が、言ってみれば、私の身体の直接的な行為から護られているその程度を表しているのである。私の視界 (horizon) が拡がれば拡がるほど、私を取り巻くさまざまなイマージュは、より一様な背景 (fond) の上に現れ、私の関心を惹かないものになっていくように思われる。私がこの視界を狭めるほど、それが囲っているさまざまな対象は、私の身体がそれらに触れたり動かしたりするその容易さの多寡 (plus ou moins grande facilité) にしたがって、明確な区別を持って配置されるようにな

⁵⁵ Heidsieck [1957] (p. 52) は、先に確認したDIにおける動物の方向感覚や我々の左右の感覚に垣間見られた「空間の質的な側面」を、バルクソンはその後振り返ることがなかったという判定を下している。本稿の以下の議論は、それとは逆に、むしろDIが不明瞭な説明しか与えられなかった空間の質的な側面について、MMの中には一定の説明が見出せることを示すものである。なお以下で時空間について「行為」でなく、「行動」という語彙を用いるのは、ここで問題となるような時空間を我々は——複雑さの程度の違いはあれど——動物と共有しているように思われるからである。

る。それゆえ、それらは、私の身体に対して、鏡のように、生じるかもしれない私の身体の影響を送り返している。つまり、それらは私の身体の支配力の増減 (les puissances croissantes ou décroissantes) に応じて配置されている。私の身体をとりまく諸対象はそれらに対する私の身体の可能な行為を反射 (réfléchir) しているのである (MM, 15-16)。

以前の引用では強調しなかったが、ここに見られる「反射」という考え方のうちに、ベルクソンにおける第一の、そして素朴な距離についての理解を看取することができる⁵⁶。いま私の目の前にあるマグカップを例にとろう。カップが手元にあるとき、私はすぐにそれをつかみ、中にあるコーヒーを飲むことができる。こうした場合、対象への「私の身体の支配力」は非常に大きく、また対象と身体間の距離は短かく感じられるだろう。だが、私が席を立ちカップを視野に入れつつ後方へと退いて行けば、その支配力は徐々に小さくなっていく。それゆえ、対象と身体間の感じられる距離の長さは、対象への身体の支配力の大きさに反比例する、というわけである。

だがそもそも、MMの枠組みにおいて、こうした事態はいかにして可能になっているのだろうか。この問いに対する一定の応答を見出すことができるのは、上のテキストが置かれたMM第一章ではなく、その第二章の自動的再認の議論である。確認したように、そこでベルクソンは、「反射という仕方 (à la manière d'un réflex) 知覚に引き続く」「生まれつつある運動についての意識」が「再認の基礎を成している」と述べており、本稿が強調した区分によれば、ここでいう意識とは、正確に言えば、感情としての情感のことを指していた。

その上で、「反射」という概念そのものについても注釈を与えておこう。「私の身体をとりまく諸対象はそれらに対する私の身体の可能な行為を反射している」という表現において、「反射」とはもちろん比喩であって、実際に知覚者としての「私の身体」から何らかの物理的な作用が対象へと及ぼされているわけではなく、あくまでそのように見えるという現象——「見かけ上の反射」(MM, 43)——が問題となっているにすぎない。とはいえ、この比喩の意味は、正確に理解する必要がある。

暗闇の中で光源付きの鏡の前に立ってみるといった場面を例に説明してみたい。その鏡面に自分の姿が見えるという現象を物理的に考えると、(a) 光源＝鏡から身体への光の伝播、(b) 身体表面における光の反射、(c) 鏡における光の再反射の三つのプロセスがあることがわかるだろう。このケースで鏡に喩えられているのが外的対象であり、(b) と (c) で光に喩えられているのが、身体の行為可能性であると考えられることができるだろう。精神盲の症例が示

⁵⁶ 第一のというのは、本稿第5章では、形而上学的な観点からはもうひとつ、全く別種の距離の概念の理解を提示するからである。

すとおりに、外的対象から単に刺激が受容されただけ（(a)の段階）では、対象の再認は生じない。そのためには、それに対して可能な様々な行為を感情によって意識する（(b)の段階）ことが必要であって、そうした行為可能性を対象の方へ送り返してやることで初めて、我々は対象を「用いることができる」ものとして再認することができる（(c)の段階）のである。

4-1-2：行動空間

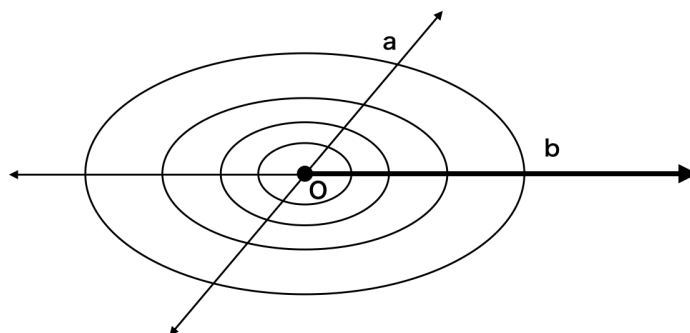
さて、こうした反射の機能によって可能となる、空間知覚の時間的な側面をベルクソンは以下のように定式化している。

行為が時間を支配するのに正確に比例して知覚は空間を支配する (*la*

perception dispose de l'espace dans

l'exacte proportion où l'action dispose du temps) (MM, 29)。

図3 行動の時空間



私の足下から一定方向に想像上の直線をひいてみるとしよう。すると、この線上の各点に位置する諸対象（ないし床面）は、私がそれらに対して行為するのに（あるいはその場所に移動するのに）必要な時間的な距離の大小の印象を与えていることがわかるだろう。同じことは知覚される空間のあらゆる方向についても言えるため、行為に要する時間の長さをパラメータとした、身体を中心に同心円上に広がる時間構造が得られることになるだろう（図3⁵⁷）。以下では、このように行動の時間との関係によって規定される距離を時間的距離と、またこうした時間構造を持つ空間を行動空間と、それぞれ呼ぶことにしたい⁵⁸。この行動空間について注意すべきは、次の三点である。

第一に、この空間の中心に置かれる身体は、「数学的な点ではない」（MM, 57）。通常「ここ」と指示される、自分の身体のある場所は、一定の広がりを持っている。このことが意味するのは、そうして指示される場所が、一様に時間的距離を欠いているという事態である。

第二に、行動空間における時間的距離の大小の規定について。確認したとおり、日常的な対象への身体の支配力の大きさは、身体から対象までの距離の長さに反比例する。言い換えれ

⁵⁷ Oを知覚者の身体として（例えば）Oabが実際に知覚されている範囲である場合に、それに重ねられる行動空間を簡易に示したもの（鉛直方向は省略している）。

⁵⁸ これと同型の距離および空間概念は、Merleau-Ponty[1945] (p. 281 et seq.) にも見出すことができるように思われる。

ば、行動空間における時間的距離は「行動の強度」(MM, 27)と反比例の関係にある。では、その強度や時間的距離の大小は、正確には何によって規定されているのだろうか。この点についてMMはほとんど何も述べていないため、DIの議論を振り返ってみよう。すると、すでにそこでベルクソンは、「情感的感覚」の質の変化には、それに随伴する筋肉の運動の「面積の増大」が伴っていると指摘していたことに思い至るだろう。ところで、すでに述べたとおり、反射を可能にする感情としての情感とは、より正確に言えば、組織された一連の生まれつつある筋肉運動のことである。とすれば、ここで問題となっている行動の強度もまた、それに関与する筋肉の面積の大小によって規定されるということができるだろう。身体から遠くの対象と比べて、近くにある対象の方が行動の強度が大きく、そしてまた時間的距離が短く感じられるのは、後者の方が前者よりも影響を与える身体の面積が大きいからなのである。

第三に、行動空間の無際限性について。時間構造の中心としての身体とこの構造の「背景」(MM, 15)との間には行動の強度の勾配が存在することに注意しよう。いま私の部屋から、遠くにあるビル郡——さしあたりこれを背景としよう——に視線を移すとすれば、私の身体からそこに至るまでの間に置かれるさまざまな対象(マグカップ、窓、通り、街等々)は、行動の強度を徐々に減少させ、したがってそれと反比例の関係にある時間的距離もまた徐々に増大することがわかるだろう。もちろん日常の生活においては、部屋の壁や近くの建物に遮られて、直接背景を見渡すことができないのが通常である。だがそうした場合でもその都度の「地平」——視界を遮る様々な障害物——の背後に何もないのではなく何かがあるように思われるのは、地平に至るまでの時間的距離の勾配によって、行動空間がその地平を超えて無際限に広がっているからなのである。

そしてこのように考えることで、MM第一章が冒頭から「イマージュの総体」が与えられる⁵⁹こと(MM, 12, 15, 20等)を繰り返し強調していることの意味が理解できるようになる。もし「与えられる」という言葉を、意識されるという意味に理解するなら、常識の観点から出発したはずのMMは、冒頭から、物質とはそれ自体何らかの意識を伴った存在者であるといった形而上学的な主張を前提にしていることになってしまうだろう。しかし少なくとも第一章冒頭が問題としているのは、そうしたことなく、単に見える範囲を超えて世界が広がっているよ

⁵⁹ この点について、メルロ＝ポンティやBarbaras[1998, 2006]の批判を取り上げ直して、コルニベルは次のように述べている。「実際、知覚を説明するためにイマージュの総体を与えることで[...]、ベルクソンが、アドホックな——とは言わないまでも恣意的な——仮説を提起しているように見えるのは明らかである。ベルクソンにとっては、あたかも、実在を本質的に知覚可能なものとして措定し、その後で知覚を、実在から主体ないし生物と利害関係のある部分を引き出したものとして主題化すれば十分であるかのようである。だが、人は問うだろう。そうした知覚可能性それ自体はどこから出てくるものなのか、と」(Cornibert[2012], p. 22)。本稿の観点からすると、こうした批判が生じた要因は、MMの空間概念について、正確な理解がされていなかったためだということになる。

うに思われる、というそれ自体はごく素朴な感情であって、それを可能としているのが行動空間の存在なのである。

4-1-3：行動時間——「私の現在」その①

以上の解釈を支持しつつ、このように規定される行動空間が、そのまま行動時間を象徴するものであること示唆するテキストを引用しよう。

[...] 空間における距離は、時間における脅威ないし見込みの近さを見積もっている (mesurer)。それゆえ、空間は我々に、我々の近未来についての図式 (schème) を一挙に与えるのである。そして、その未来は無際限に流れることになる以上、その未来を象徴する (symboliser) 空間は、その不動性において、無際限に開かれてたままであるという特性を持つ。ここから、我々の知覚に直接与えられている地平 (horizon) は、必然的に、より広く、知覚されてはいないが存在する領域に囲まれているように我々には思われ、その領域はそれ自体で、自身を取り囲む別の領域を伴っており、同様のことは無際限に言える、ということが帰結する [...]。したがって、我々の実際の知覚がつねに、延長を有する限りにおいて、より広大で無際限でさえあり、また我々の知覚を含むような経験に対する内容でしかない、ということはいわゆる我々の知覚にとって本質的なことである。そしてその経験は、知覚される地平を超出するために、我々の意識 [= 視覚的知覚] には欠けているのだが、それでもなお実際に与えられているように思われるのである (MM, 160)。

行動空間における距離が行動時間の見積もりとなっている——このことは、三次元の行動空間のうちの一次元だけについて、先の三つの特徴を考えれば直ちに理解できるだろう (図3太線部)。

まず、空間において身体が置かれた場所 (O) は、そこにあるものに対して働きかけるのに時間がかからないという意味で、行動時間にとっても原点である。さらに、(これはすでに述べたことの言い換えにすぎないが) 行動空間における距離の大小は、そのまま行動時間の原点からの長さに対応する。最後に、行動空間はどの方向にも無際限である以上、行動時間の直線は未来方向に無限であることになる。

しかし注意すべきは、このようにして得られる原点や長さ、そして直線は、あくまで行動時間の「象徴」ないし「図式」であって、行動時間そのものではない、という点である。このことは行動空間についても当てはまる。たった今そうしたように、我々は自らの経験に基づいて、行動空間を図示することはできるが、しかしそのように経験を反省ないし抽象することに得られた空間は、経験ないし意識されている空間そのものと同一ではない。というのも、前者には

後者にあるような質——左右や距離についての感情——が欠けているからである。だがそうだとすれば、図示したような直線をその象徴とする、行動時間それ自体はどのようなものだろうか。ベルクソンはそれに「私の現在」という名前を与えている。

〔...〕私の現在とは、本質的には（par essence）、感覚＝運動的である。

これはつまり、私の現在は、私の身体についての意識のうちにあるということである。私の身体は空間に拡がっているため、感覚を被り、それと共に運動を実行する。〔...〕私の身体は〔...〕受容された印象が巧みに経路を選択し、実現される運動（mouvements accomplis）へと変化する（se transformer）ための場所である。だからそれは、まさに私の生成の現在の状態、私の持続の中で形成途上にあるものを表している。〔...〕我々の身体は、この物質世界の中で、我々がその流れを直接感じるもの（ce que nous sentons directement s'écouler）なのである〔...〕（MM, 153-154）。

感覚＝運動的と言われるときの感覚とは、対象から受容した刺激に相当する情感的感覚のことであり、運動とは、そうした刺激が惹起した生まれつつある運動、すなわち感情によって意識される運動のことである（それゆえ、ここで問題となっているのは自動的再認の水準である）。後者は行動空間の広大な拡がりに対応した未来の行為可能性を与えるものであり、前者すなわち感覚は、原点にあたる現在ないし現実の行為を表現するということができるだろう。強調すべきは、これら二つの行為の様相の差異——未来の可能的行為と現在の現実的行為——が同じひとつの「私の現在」のうちに含まれており、その内部で時間の流れが感じられると主張されている点である。DI 第二章は空間的な象徴ではない時間として持続の概念を提起していたが、確認したように、その持続は、過去の記憶の保持によって可能となる相互浸透と相互異質性によって定義されていたのであった。しかし MM は、生まれつつある運動（感情）が提示する未来の複数の可能的行為が、受容した刺激（感覚）によって「選択」されること、つまりは行為の実現こそが、持続の流れだと述べているのである。これは要するに、ベルクソンは DI から MM にかけて空間概念を実践的な観点から再考することで、同時に、持続概念にも行為という観点から新たな規定を与えることになったということである。もちろん、MM は DI 的な持続の理解を破棄してしまっただけではない。というのも、ここで未来や行為といった観点から定義されているのは、私の現在の「本質」であって、より広い意味での私の現在については、後で見るとおり、過去の記憶の介入を積極的に認めているからである。しかし、行為という観点から持続を再定義したことで、時間の流れが説明可能となったという点は極めて重要である。というのも、これから示す通り、行為の実現として時間の流れを説明するという方針に

は、以上にみた「私の現在」の概念の着想元と思われるウィリアム・ジェイムズの「意識の流れ」の概念が抱えていた困難を解消できるという大きな利点があるからである。

4-2：純粹記憶の存在論

さて、以上のような「私の現在」の概念を提示するのと同時に——というよりもむしろ論証の流れ上はこちらの方に主眼あるのだが——、MM 第三章は、「純粹記憶」——我々の認識から独立に存在する出来事の記憶——の存在をめぐるの議論を展開している。ただし予め注意しておけば、本稿の見るところ、そこでMMは純粹記憶についての直接的な存在証明を行なっているわけではない。ベルクソンはむしろ、(1) 過去の想起の経験をめぐる対立仮説の困難を指摘した上で、(2) 過去それ自体の存在——純粹記憶——を想定する自説の方が、その側面をうまく説明できていると主張し、さらに(3) そのようにして一旦その存在が確保された記憶が消滅する理由がないことを示す、といういわば間接的な証明を行なっているように思われる。順次確認していきたい。

4-2-1：連合主義批判 ①

まずは対立仮説の方から見ていこう。ベルクソンが論敵として想定するのは、過去の表象とは現在の感覚の弱まった状態にすぎない——両者の間には程度の差異しか存在しない——という連合主義の主張である。連合主義者は、「過去の痛みを思い出そうとすればするほど私はそれを現実に感じそうになっていく」というごくありふれた事実を引き合いに出してそうした主張を擁護しようとする。歯痛を思い出す努力をすれば、実際の痛みほどではないにしても、徐々に痛みが感じられそうな特有の感覚は与えられる。後者を「強い状態」だとすれば、このプロセスの起点にあるはずの「過去の表象」とは、結局のところ、「弱い状態」の感覚にすぎないだろう、というわけである。だが、「記憶の側の強度を増大させる〔過去の痛みを徐々に思い出す〕のではなく、感覚のほうの強度を減少させる」なら、「不条理さは明白となる」、とベルクソンは言う。というのも、「もし記憶と感覚は単に程度において異なるというのなら、ある瞬間に感覚は記憶に変貌することになるはず」だが、「例えば〔...〕私が現に感じている強い痛み〔の感覚〕が弱まっていくことで、最後には思い出された大きな痛みになる」などといったことはないからである（以上 MM, 151-152）。

4-2-2：過去と現在の本性の差異

こうした困難を念頭におきつつ、ベルクソンは、過去の想起と現在の知覚には本性の差異があると指摘している。

〔…〕記憶はその深い根によって過去に結びついたままである。もし仮に、ひとたび現実化されても元の潜在性のなごりをとどめるといことがなく、また現在の状態ではありつつも何か現在とははっきり区別されるようなものでもないとしたら、我々はそれを記憶だと認めることもできないだろう（MM, 148）。

たしかに、過去の想起には、何かを知覚したり想像したりする場合とは異なる、「独特な」と言いたくなるような側面がある。しかし「潜在性」とは正確に言ってなんのことだろうか。この点について考えるにあたって提示されたのが、先にみた「私の現在」の概念である。では、その現在はどのような特徴を持っていたか。先の議論からは現在について、過去と対照的な二つの特徴が取り出せるだろう。第一に、現在は、本質的には、「私の身体についての意識」であるがゆえに、空間内で一定の「場所を占める」という点。具体的には、本稿が行動空間と呼んだものの原点に現在を位置付けることができる。対照的に、過去ないし記憶は「私の身体のいかなる部分にも関わらない」（MM, 154）。というのも、我々は想起された記憶を、（例えば）痛みの感覚のように身体のどこそこに限局することはできないからである。第二に、現在とは、私の持続の中で形成途上にあるもの、言い換えれば、遂行されつつある行為であって、その意味で、未完了なものであるという点。複数の行為可能性からひとつが選択される現場が現在である以上、そのどれが最終的に遂行されるかはまだ決まっておらず、その限りで現在は完了した過去の出来事のような個体を成していないのである。

以上の二点によって、過去を想起する際、たしかに我々は、感覚や運動とは異なる何かに触れていると言うことはできるだろう。だが、この二点だけでは、想起の対象は過去の記憶そのもの、ベルクソンの言う「純粹記憶」であるとまでは言えないように思われる。というのも、場所を持たず、完了相にあるという特徴は、想起の対象だけでなく想像の対象も共有しているように思われるからである。想像の対象を、通常我々は身体の特定の場所に位置付けたりはせず、また先に確認したように、ベルクソンにとって想像力が開く空間というのは完了性をその最大の特徴とするものだったのである。したがって、過去の記憶を想像の対象から区別するためには上記とは別の過去の特徴を引き合いに出す必要があるのだが、実は本稿はすでにそれに言及している。MM 第三章以前に、第二章の前半部、二つの記憶力の形式を区別する場面でベルクソンは、純粹記憶力について次のように述べていた。

第一の記憶力は、記憶イメージの形で、我々の日常生活の全ての出来事を、それらが展開していくのに応じて記録していく。それは、いかなる細部も見落とさない。そして、事実のひとつひとつ、行為のひとつひとつにその場所と日付を残していく（MM, 86）。

この箇所やその他の箇所で度々言及される記憶の「日付 (date)」（cf. MM, 84, 88, 89, 168, 172, 270）は、想像の対象——例えば架空の出来事——と想起の対象——実際に経験した出来事——を区別する基準となるだろう。ここで date というのは、何も 1859 年 10 月 14 日などというような具体的な日付に限定して理解する必要はない。というのも、1 日や 1 時間あるいは 1 分といったより短いスケールの時間の中でも我々はそこで生じた出来事の前後関係を想起によって把握することができるからである。だから date というタームを用いることで問題になっているのは、日付そのものというよりも、それによって把握される出来事同士の「順序」（MM, 90）の関係だと考えるべきだろう。そしてその意味での順序ないし前後関係を、想像の対象は明らかに有していない。

それゆえ、この第三の特徴を含めるのであれば、過去の出来事それ自体の存在を端的に認めるという立場に一定の妥当性が認められるだろう。というのも、そのような想定に立てば、以上に見た三つの特徴に対して端的な説明を与えることができるからである。

4-2-3：純粹記憶の残存

とはいえ、以上の議論から言えるのは、過去ないし記憶は、少なくとも想起された時点までは存在していたということではかないだろう。というのも、ある特定の時点における記憶の存在は、想起の経験以後もその記憶が存在し続けること、すなわち記憶の「残存 (survivance) 」——これは MM 第三章の表題でもある——までは保証してくれないように思われるからである。だが、すでに予告したとおり、ベルクソンは、純粹記憶の残存について、積極的な理由を与えるというよりもむしろ、一見したところ記憶が失われてしまうように見えてしまうという事態が、実は常識の観点からの素朴な帰結であると主張することを通じて、「過去が消滅する」「理由」（MM, 157）がないことを示すという間接的な論証を行なっているように思われる。したがって、この純粹記憶の残存というトピックにおいて、明示的ではないものの常識の観点から形而上学の観点へと移行していることになる。行動の時空間についての議論で先に引用した箇所のすぐあとで、ベルクソンはこう述べている。

しかし我々は、物質的对象に対してなら、自分がそれにつながっていると感じて、それらを現在の実在に仕立て上げるのだが、それと反対に、我々の記憶というのは、もうそれは過ぎ去ったというかぎりでは、まさに厄介な重荷を引きずっているようなものであり、我々としては、そんなものはもう捨てたことにしたい。我々は本能的に自分の眼前に空間を果てしなく開くが、それと同じ本能が、流れるにつれて時間を背後で閉ざしていくようにさせるのだ。そしてまた延長を有するものとしての実在のほうは、我々の知覚を限りなく超え出ているように見えるのに対して、内的生においては、現在の瞬間とともに始まるものだけが実在

的だと我々には思われ、それ以外のものは実践上破棄されてしまう。こうなれば、記憶が意識に再び現れると、まるで亡霊が蘇ったかのように思われ、この亡霊の謎めいた出現は何か特別な原因で説明しなければならない、ということになる (MM, 160-161)。

確認したとおり、我々は行動空間によって、実際に自分が知覚している対象を超えて、物質世界の全体——イマージュの総体が——拡がっていることを感じるができる。こうした事態を可能とする行動空間とは、そのまま行動時間でもあり、その象徴である時間直線は、図3に示したとおり、未来方向には無限なのだが、過去をもたないものであった。そして、そうした時間の理解が、我々にとっては最も原初的なものであるがゆえに、我々は一旦生じた出来事は消え去るように思ってしまう（「我々は [...] 流れるにつれて時間を背後で閉ざしていく」）——これが常識の観点において、過去ないし純粹記憶が残存しないように我々が思ってしまうメカニズムである。しかし、そうした時間の観念を取り払い、形而上学の観点に身を移すのであれば、「過去が一旦知覚されたあとに消失するという理由はなくなる」（MM, 157）、というわけである。

4-3：意識の諸平面の理論

さてこのようにして、さしあたり純粹記憶の存在を確保した上で、ベルクソンは、それまでその考察を先送りにしてきた現在と過去の関係、言い換えれば習慣的記憶力と純粹記憶力の関係を、逆円錐図を用いてつつ規定することになる。

習慣が組織した感覚＝運動系の総体からなる身体の記憶力は、ほとんど瞬間的な記憶力なのだけれども、過去の本当の記憶力がその基盤をつとめている。両者はばらばらな二つのものではなく、第一のものは、すでに述べたように、第二のものによって経験の動く平面にさしまれる動的先端に他ならないから、この二つの機能が互いに支持を与え合うことは当然である。実際一方では、過去の記憶力は感覚＝運動的諸機能に対し、それらを導いて任務につかせ運動的反応を経験の教示する方向に赴かせうる全ての記憶を呈示する。近接と類似による連合は、まさしくそこにおいて成立するのだ。しかし他方では、感覚＝運動機構は無力な、すなわち無意識な記憶に対し身体を獲得して物質化する手段、つまりは現在となる手段を提供する。実際、ある記憶が、意識に再現するためには、それは純粹記憶の高みから、行為の実現を見るまさにその地点 (*point précis où s'accomplit l'action*) にまで、下りてくることを必要とする。換言すれば、現在こそ、記憶の応答する呼びかけの出発点であり、現在の行為の感覚＝運動的諸要素こそ、記憶が熱気を借りて活力を与えられる場所なのである (MM, 169-170)

先に見た知的ないし注意的再認は、より正確に言えば、この二つの記憶力——身体と精神——の間で交わされる呼びかけと応答なのである。本稿の観点から言えば、ここにこそ、（自動的再認の場合とは異なる）行為の選択の第二の方式があると言っていることができるだろう。この点についてベルクソンは、観念連合説と自説を対比する形で議論を展開している。（1）観念連合説の批判、（2）意識の諸平面の理論、そして（3）その特殊な場合として理解することができる注意的再認の順に見ていこう。

4-3-1：連合主義批判 ②

観念連合説は、一般に、精神のうちでのある観念の出現をそれに先行する観念との「類似」ないし「近接」の関係によって説明する。ベルクソンももちろん連合の事実は認めるが、類似や近接の関係は、その説明にならないと言う。まず、類似について言えば、二つの観念の間に「どれほど大きな相違があったとしても」——つまり両者がどれほど類似してなかろうが——、「十分に遡れば必ずそれらの属する共通の類、したがってまたそれらを結ぶぎずなの役割を果たす類似を見つけることができる」。近接の関係についても同様のことを言うことができる。まず、「知覚 A が古いイメージ [=観念] B を「近接」によって喚起するのは、まずもってそれに類似するイメージ A' を想起させる場合のみである。というのは、記憶の中で本当に B に接するのは、記憶 A' であって知覚 A ではないからである」。ところで、（たった今上で述べた理由から）A' と A の間にはつねに何らかの類似を見出すことができる。したがって、「二つの項 A と B が互いにかに隔たっていると仮定しても」——つまり、どんなに近接してなくとも——、「A と B の間にはいつも」「近接の関係」を見出すことができることになる。これらを合わせれば、「でたらめに選ばれたなんらかの二つの観念」には、つねに類似と近接の関係を見出すことが可能ということになるだろう。要するに、「継起する二つの表象の間に近接あるいは類似の関係を見いだしても、なぜ一方が他方をよび起こすかということはまったく説明がつかないのである」（以上、MM, 181-182）。

4-3-2：意識の諸平面

では、MM の観点からは知覚と記憶の連合はどのように説明されるのだろうか。結論から述べれば、ベルクソンにとって「連合は、原初的な事実ではない」。その手前に、本来説明されるべき事柄があるのであって、それを表現したのが、あの逆円錐図なのである。

順を追って説明していこう。まずベルクソンは「連合説の根本的な欠陥」は知覚や記憶を「自己同一的な」「心理的な原子」（以上、MM, 184）と仮定したことだと指摘する。このことの一部は、すでに DI が示していたことである。確認したように、深層の自我ないし純粹持

続において、様々な心理的状态は相互浸透している——したがって、それは原子のように互いに独立した仕方では存在しえない——ために、自由の程度の高い行為において、我々はその原因となった感情ないし動機を、連合説がするような仕方ですべて取り出すことは不可能なのである。しかしそうした主張は、心理学的決定論への批判という文脈で為されたものであったため、DIは自由行為が感情からいかにして帰結するかという点には説明を与えていなかった。心理的原子という発想の拒否は、連合の事実、あるいは行為の選択という観点からすれば、消極的なステップにすぎなかったのである。

MMの構想上の出発点となった意識の諸平面の理論は、それを踏まえた上で、より積極的に行為の実現のための第二の条件——選択——について説明するものと考えることができ、すでに取り上げた逆円錐の図は、この理論の文脈で導入されるものである。この図について、本稿第3章は、(平面部分については一定の注釈を与えたもの)肝心の円錐の部分については、底面ABに純粹記憶が位置付けられること、またA'B'、A''B''といった無数の断面の存在によって、DIで提示された程度を容れる自由という発想が表現されうること、という暫定的な指摘をするに留まっていた。そこでまずは、(a)この図の各水準が我々の実際の経験のどのような相と対応しているのかを確認した上で、(b)その各々において知覚と記憶の連合がどのように考えられるかを確認していこう。

(a)すでに述べたとおり、円錐の頂点Sには、習慣的記憶力、すなわち我々の身体が位置付けられるのであるが、ベルクソンはこの頂点だけで成立する、出来事の記憶がほとんど介入しない経験の水準を「行動の平面」と呼び、これと区別される、行為への関心が低く過去の記憶が絶えず喚起され続けてしまう経験の水準を「夢の平面」と呼ぶ。一方の行動の平面に常に身を置いているような人は、「下等動物」と同様に「刺激に対してその延長である直接的反応によって応答する」ことしかできないため、「衝動の人」だと言われる。他方で、夢の平面にその生活が釘付けになった人には、そのまま「夢想家」という名が与えられる。というのも、後者には、「現在の状況に対して有益でない仕方、様々な記憶が意識の光の下へと浮かび上がってくる」からである。とはいえ、これらの二つの平面はあくまで「極限状態」であって、「完全にその姿を現すのは例外的な場合」、典型的には病理学の対象となるような異常な場合だけである。「正常な生活において」、二つの記憶力は、「相互浸透し、そのことによって、いずれも、本来の純粹性をいくぶんか捨て去って」（以上、MM, 172）おり、我々は「これら両極の間にある間隔を絶えず駆け巡っている」（MM, 192）のである。

(b)ではこれらを踏まえた上で、MMにおいて連合の事実がどう理解されるかを見ていこう。ベルクソンは、円錐図の水準ごとに異なる仕方ですべて類似と近接の連合が与えられると考えている。

まず、習慣的記憶力だけからなる、行動の平面において、「我々は、類似による連合と近接による連合を、その源泉そのものにおいて、またほとんど混然一体をなした仕方で[...] 捉えている」。確認したように、自動的再認とは、外的対象から齎された刺激が身体に可能な複数の生まれつつある反作用を惹起することで成立するものであった。ところで、その際問題となる反作用の集合とは、刺激が「たとえどんなに互いに異なるものであったとしても」、「同一の」ものである。この事実を、過去という観点から考えれば、自動的再認においては、「類似による連合」が認められることになる。というのも、「現在の知覚」の一部を成している運動反応は、「過去の知覚」の一部を成していた運動反応と同一のものである以上、「現在の知覚は過去の知覚との類似 (similitude) ⁶⁰のおかげで作動する」と言うことができるからである。さらに、同じ事実を今度は未来方向に考えれば、そこには「近接による連合」も見出すことができるだろう。というのも、Sにおいては「過去の知覚の後に続いた〔つまり、時間的に近接した〕運動が再生される」以上、「現在の知覚」の後の行為の実現は、近接によって為されたと見做すこともできるからである (以上、MM, 186)。

次に、夢の平面においては、行為の有用性という記憶の選択のための基準が存在しないため、「この過去の特に一部分だけを他の部分よりも注視する何の理由もない」。とすれば逆に、「どんな記憶であれ現在の状況に近づくことができるだろう」。すると、そうして接続された記憶と知覚の間には、つねに何らかの類似が認められることになるだろう。というのも、先にも述べたように、「細部を十分無視すれば」二つの任意の項の間に何らかの類似を見出すことが常に可能だからである。「さらにいえば、いったん記憶が知覚に結びつくと、その記憶に近接する多数の出来事が、同時に知覚に結びついてくる」。というのも、繰り返しになるが、ここでは記憶の選択のための基準がないからである。それゆえ、「連合は、Sではちょうど宿命的な歩みを引きおこしたのに対し、ABでは気まぐれな選択を引きおこす」ことになるのである (以上、MM, 187)。

では以上の二極の間、つまり通常経験においては、どのように連合が生じるのだろうか。ベルクソンはこの点についての大枠を理解を以下のように述べている。

一方で、感覚=運動的状態 S は記憶力に方向を与えるわけで、つまりは記憶力の現実的で活動的な極限にすぎない。また他方、この記憶力自身は我々の過去の全体 (totalité de notre passé) と共に突進することによって、それ自身の可能な最大部分を現在の行為に組み入れる。この二重の努力から、記憶力の無数の可能的状態が時事刻々生じてくる。これが私が図形の断面部 A'B'、A"B"等々によって表した状態である。これらは、すでに述べたように、そ

⁶⁰ MM は similitude と ressemblance という語彙を同じ意味で用いている (cf. MM, 169)。

れぞれみな、我々の過去の生活全体の反復である。しかしこれらの切断面の各々は、底面か頂点かに近づくとつれて、広くなるか狭くなるかする。のみならず我々の過去のこれら完全な表象はいずれもまたただ感覚＝運動状態にあてはまるものだけ、したがって、行為を実行する見地からみて現在の知覚に類似しているものだけを、意識の光の下にもたらずのだ。換言すれば、完全な記憶力は現在の状態の呼びかけに、同時的な二つの運動によって答えるのである。ひとつは並進（translation）であり、これによって記憶力は全面的に経験に向かって進み、こうして行為のために（en vue de l'action）、分かつたことなく多少とも収縮する。今ひとつは自転（rotation sur elle-même）であり、これによって記憶力は現在の状況へと方向をとりながら、いちばん役に立つ側面をそこへさし向ける。収縮のこの様々な段階に応じて、類似による連合の多様な形態があるのである（MM, 187-188）。

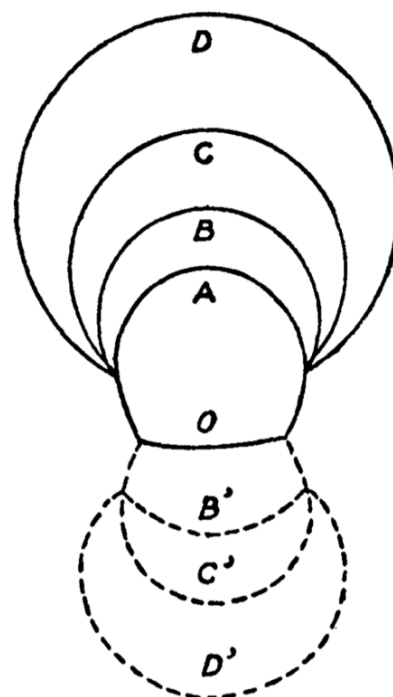
知覚と記憶の連合を説明するという目下の論点にとって重要なのは、「並進」と「自転」という「二つの運動」である。述べられているとおり、各平面は全ての純粹記憶を含んでいるのだが、それらがどの程度収縮ないし弛緩しているのかを決めるのが並進である（したがってこれは、平面の選択に相当する）。しかしそれだけでは、記憶の総体はまだ不可分な相互浸透の状態にある全体に留まっている。そうした全体から実際に現実化される部分を選択する働きが自転である。予め注意しておけば、バルクソンはMMがこの点について自説が完成された理論を与えるものだとまでは主張していない。むしろ、「そうした心理学はすべてまだこれから構築されるべきものであり、我々はさしあたって、それを試みようという意図さえない」（MM, 189）と述べて、以上のような大枠の提示し、それを心理学・病理学のいくつかの文献が支持していることを確認してMM第三章の議論を終えているのである。

とはいえ、以上に示された枠組よりも、もう少し踏み込んだ形で知覚と記憶の連合について論じている箇所がMMにはある。それが先送りにしていた、MM第二章の注意的再認についての議論である。

4-3-3：注意的再認

MM 第三章は、以上にみた意識の諸平面の理論を、注意的再認のプロセスを表現した図4 (MM, 115) と関連付けて論じているため、二つの論点に関連するものであることは明らかだが、注意的再認の議論は、意識の諸平面という一般的な理論に対して特殊理論を役割を果たすものであるように思われる。というのも、意識の諸平面の理論は、逆円錐図が外界全体に挿入されていることからわかるとおり、知覚の対象を特に限定せず、我々の日常的認識一般に対して包括的な説明を与えるものとなっているのに対し、図4はある特定の対象Oに限定された認識、その意味で、Oに対して注意が向けられた再認を説明するためのものだからである。

図4



第二の考え方〔図4〕では、反対に、注意の働きは精神とその対象との深い連帯を含み、これは全く閉じた回路であるため、より高い集中状態に移ろうとすれば、必ずその都度、古い回路を包む新しい回路を、徹底的に創造せねばならず、これは知覚される対象以外に、古い回路と共通なものをもたないわけである。これらの異なった円環のことは、後で詳細に研究することになるが、最も狭い円環であるAは、直接的知覚に最も近い。それは対象Oそのものを、これと重なってくる残像と共に含むだけだ。その背後に、次第に大きくなる円環B・C・Dがあつて、知的拡張の増大する努力に対応している。記憶力は常に現存しているから、これらの回路の各々に入ってくるものは、後で見るとおり、記憶力の全てなのである。しかし伸縮自在であるため際限なく広がることのできるこの記憶力は、提示されたものをますます多く対象に反射させる。それらは対象そのものの細部であることもあり対象を照らすのに役立つ随伴的な個々の事態であることもある。こうして我々は認められた対象を、一個の独立的全体として再構成してから、相よって体系をなす次第に遠く及ぶ諸条件をも、これと一緒に再構成する。対象の背後に位置し、対象自体とともに潜在的に与えられているこれら深みをます諸原因を、B'、C'、D'と呼ぶにしよう。見られるとおり、注意の発展は、結果として、たんに知覚される対象ばかりでなく、それが接合するますます広汎な諸体系を

新たに創造するので、円環 B、C、D が記憶のより高度な拡張をあらわすのにつれ、その反射は B'、C'、D' において、実在のより深い相に達するようになる (MM, 114-115)

まずもって「注意は、現在の知覚の右益な効果の追求をあきらめた精神の後退」と規定される。それゆえ、逆円錐で考えた場合、注意的再認とは、行動の平面の側から夢の平面の側へと継起的に移行していくプロセスに相当するということができるだろう。すると、「対象 O そのもの」とその「残像」から構成される「最も狭い円環 A」、「知的拡張の増大する努力」に対応する「円環 B・C・D」は、円錐で考えるなら、下から上へとそれぞれこの順序で位置付けられることになる。それゆえ、その「知的拡張」とは、並進——その都度の平面の選択——という運動の一形態と見做すことができる。さらに、これらの円環の各々は、円錐の諸平面と同様、「記憶力の全体」を含んでおり、したがって、注意の対象に対して、「その対象そのものの細部や、対象を照らすのに役立つ細部を」「反射」ないし「投射」(MM, 117, 119 等)することができるという。本稿では、先に見た運動反応における意味での反射の働きと区別するため、この意味での記憶力の働きを一括して「投射」と呼ぶことにしよう。この投射の働きは、意識の諸平面では自転——選択された平面のうち役立つ側面の提示——の運動に相当するものとして理解することができるだろう。記憶力のこうした働きをよく示すものとして、MM 第二章は、ゴルトシャイダーとミュラーの有名な実験を挙げている。それによれば、「読書」において「我々は単語を一字一字読んでいく」のではなく、「あちこちでいくつかの特徴的な線を取り集め、それらの間をイメージ記憶 (souvenirs-images) によって埋め合わせているのであって、この記憶は、紙面上に投射されることで、実際に印刷されている特徴に置き換えられている」(MM, 113) という。この際に問題となる知的拡張の努力の水準が B に相当するとすれば、図中 B' の破線の円環は文の意味を与えるイメージ記憶と書かれた文字列という対象そのものから成るものと考えられることができるだろう。

だが、読書の実験の例は、C や D といったより高次の注意の努力についてまで明確に説明するものではないように思われる。この点を理解するに当たって有用だと思われるのが、外国語の会話の聴取の例である。それは先に運動図式について言及した際にすでに触れた例なのだが、本稿第三章の段階ではまだ純粹記憶力についての一連の理解を提示していなかったため、実際のベルクソンの記述のうち半分の検討していなかった。それらについての一通りの考察を終えた今であれば、その議論の全体を理解することが可能だろう。まずは引用しよう。

しかし、我々の意識に問おう。我々が他人の発言を聴きながら、わかると思っている場合、何が起きているかを意識に尋ねよう。我々は、印象がイメージを捜しに行くのを、受動的に待ち受けるだろうか。むしろ我々は、あたかもまずもって自分の知的作業の調子を整え

るかのように、対話者や、彼が語る国語や、彼が表現する観念の種類、またとくにその語句の全般的運動につれて変化するある種の準備態勢に身を置いているとは感じないだろうか。運動図式は、彼の抑揚を強調し、その思考の曲折を克明に辿りながら、我々の思考に道を示す。それは空虚な器であり、その形によって、流れ込む液体の向かっていく形を決定するのである（MM, 134-135）。

ここでは単に発話の文字通りの意味を理解することだけでなく、対話者がどんな言語を話しているか、また会話が全体としてどのような考えを提示しているかといった、様々な水準が問題となっており、これらに対応する注意の水準はC'やD'といったより高次のものに相当すると考えることができるだろう。その際強調しておきたいのが、ここで運動図式によって、記憶の投射と注意の水準の選択——つまり、並進と自転——が促されている、という点である。もちろん、図式が提示する運動が習慣的記憶力、すなわち身体に由来するものであるに対し、並進と自転という二種類の運動は純粹記憶力ないし精神によるものであるから、両者は本性の差異によって区別されるものではある。しかし少なくとも両者はいずれも運動であるという点を共有しているために、連動することができるのである。

この点をカントの図式論と比較することは有益だろう。というのも『第一批判』において、図式が感性と悟性を媒介するものであったのと同じように、MMにおける運動図式は、知覚と記憶を媒介する役割を果たしているからである。さらに言えば、カントにおける図式が、感性によって与えられる対象への概念の適用の規則を与えるものであったのと同様に、ベルクソンの図式は、知覚の対象への純粹記憶の現実化のための規則を与えるものとして理解することができる。後者にとっての規則の役割を果たしているのが（生まれつつある）運動であって、これが感情という形で与えられることで、我々は知覚対象をまずは自動的に再認するのだが、その際の自動運動が、同時に、当該の対象に対する純粹記憶の投射のための手引きとなっているのである。

4-4：『物質と記憶』の時間意識論

さて意識の諸平面、ならびに注意的再認についての以上の考察を踏まえれば、先にその最も本質的な部分のみ提示していた「私の現在」の概念をより詳細に考察することが可能となる。ところで、予告したとおり、その私の現在についてのMM第三章の一連の議論は、明示的ではないものの、ウィリアム・ジェイムズが『心理学原理』⁶¹（1890）において提示した「見かけ

⁶¹ 以下『心理学原理』への参照指示はPPの略号の後、頁数を本文中に記載するという形で行う。

の現在 (specious present) 」の概念を念頭に起きつつ提起されたものであるように思われる⁶²。そこで以下まずは (1) ジェイムズの「見かけの現在」とそれについての一定の解釈を確認した上で、(2) 先に示した行為の実現という観点から意識の流れを捉えるという MM の方針にどのような利点があるのかを示したい。

4-4-1: ジェイムズ『心理学原理』における「見かけの現在」

「意識の流れ (stream of consciousness) 」を考察するに当たって、『心理学原理』がまず強調するのは、意識の流れと流れの意識の区別⁶³である。ジェイムズは、単にいくつかの意識状態の流れが与えられただけでは、それらの間での流れが意識されることを説明したことにはならず、その意味で流れの意識は意識の流れに対して「それ自体で特別な解明が必要な」「付加的な事実」(PP, 629) であると主張する。この事実に説明を与えるために、提起されるのが「見かけの現在」の概念である。『心理学原理』は「見かけの現在」を——それ自体は経験不可能な「客観的現在」ないし「厳密な現在 (strict present) 」と対比的に——「主観的現在」として特徴づけた上で、「見かけの現在」が幅をもつことについて、以下のように述べている。

我々の時間知覚の構成単位は、船首と船尾、すなわち前方を見る端と後方を見る端をもつひとつの「持続 (duration) 」である。その一方の端から他方の端への「継起」の関係が知覚されるのは、この持続ブロックの諸部分としてのみである。我々はまず一方の端を感じ、次いで、その後で他方の端を感じ、その継起の知覚から間にある時間の間隔を推論するのではなく、時間の間隔を全体として、その全体に埋め込まれた二つの端と共に、感じているように思われる (PP, 610) 。

「流れの意識」が与えられるのは、「見かけの現在」の幅の中だ、というわけである。この幅の存在、そしてそこでの流れの意識について、ジェイムズのテキストには、実際にはいくつか

⁶² MM が『心理学原理』の「見かけの現在」の議論を参照していることは、議論内容の類似はもちろんのこと、ボアロー=デプレオーからの同一の引用、エクスネルの同一の実験の参照などからも明らかである。にもかかわらず、この点においてジェイムズとの比較を行っている研究は、管見の限り存在しない。例えば Čapek [1950] は、「意識の流れ」という観点から、ベルクソンとジェイムズを比較する議論を行なっているが、扱われているのは DI のみであり MM は考察対象となっていない。例外的に Dainton [2016] は MM も含めた考察を行っているが、本稿のように「私の現在」に対する詳細な検討は行っていない。

⁶³ 『心理学原理』の当該箇所元々の用語上の区分は、「感じの継起 (succession of feelings) 」と「継起の感じ (feeling of succession) 」であるが、これから引用する部分にも示されるとおり、ジェイムズは、この区別と同じ事柄をいくつかの別のタームで言い換えている (すぐあとでも見るとおり、ここで問題となっているのは A や B といった項が相次いで与えられることと、A から B へという継起そのものが意識されることの区別である)。本稿の引用部以外では、用語上の混乱を避けるため、一貫して「意識の流れ」と「流れの意識」という表記で統一する (少なくとも本稿の扱う範囲では「意識」は「感じ」の、また「流れ」は「継起」の同義語である)。

の異なる説明を見出すことができるのだが、そのうち最も明瞭かつ影響力の大きいものは以下のものである。

もしここで我々の思考の実際の時間の流れ (the actual time-stream of our thinking) を水平線で表せば、流れの思考 (thought of the stream) ⁶⁴、あるいはその過去、現在、来るべき断片の思考は、この水平線上のある一点に立てられた垂直線として描かれる。この垂直線の長さはある対象、あるいは内容を表すので、この場合にはこの流れの垂直線の立っている実際の瞬間における時間の、それもその全てが一緒に思考される時間の思考である (PP, 629)。

図5は、四つの感覚の素早い流れ C-D-E-F を例に、このテキストに示されるような発想をモデル化したものである⁶⁵。まず (a) D が客観的に現在であるすれば、『心理学原理』は、たったいま過ぎ去った感覚 C の記憶、現在の感覚 D、そしてこれからやってくる感覚 E の予期という (cf. PP, 606)、時間軸に対して垂直方向に配置された三つの内容が同時に経験されることで、C-D-E という「流れの意識」が見かけの現在 P1 において与えられると主張する。さらに (b) E が客観的に現在である場合も同様に考えれば、P1 から P2 への移行が、「意識の流れ」である。

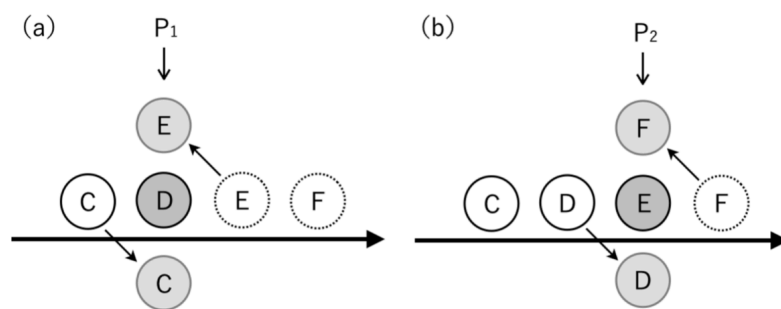


図5 「見かけの現在」

4-4-2: 「私の現在」②

さて、MM 第三章はこうした諸論点について直接的な言及はしていないものの、そこで提示される「私の現在」には、おおよそこうしたモデルに相当するような構造を見出すことができるように思われる。両者の対応を考えるために、まずは用語を導入しておこう。ジェイムズは、図5の未来方向の予期に相当する部分と過去方向の記憶に相当する見かけの現在の部分を

⁶⁴ ここで思考 (thought) は意識の同義語と理解する。

⁶⁵ Dainton[2000]および Dainton[2017]の解釈を元にしたもの。

「辺縁 (fringe)」、現在の感覚を「核 (nuclues)」と呼んでいる (PP, 613)。すると、先に「私の現在」の本質と呼ばれていたものは、厳密に言えば、「見かけの現在」の核に相当するものだと言うことができる。このことは一見奇妙に思われるかもしれない。というのも、私の現在を構成する感覚と運動という二つの要素のうち、感情によって与えられる後者は、行動空間の拡がりそのままに対応する私の未来の行為を一挙に提示するものである以上、その際問題となっている運動は、未来方向の辺縁を与えるものであるように思われるからである。しかし、感情ないし運動によって与えられる未来の全てが直ちに実現されるわけではない、ということに注意すべきである。我々は、目の前に提示された様々な行為の選択肢を前にして、その都度選択を行う。その結果選ばれ、「決定されつつある」状態にある運動だけが、「私の現在」の核となる部分を構成しているのである。ベルクソンは、そうした運動が表現する未来を「直接的未来」(MM, 153)と呼び、これと対応する形で、感情的感覚を「直接的過去」と規定している(感覚が過去と呼ばれるのは奇妙に思われるかもしれないが、これは、あとで見るとおり、感覚が収縮という記憶力によって構成されるためであり、この段階で問題となっているのは、さしあたりはイメージ記憶ではない、という点が押さええられれば良い)。

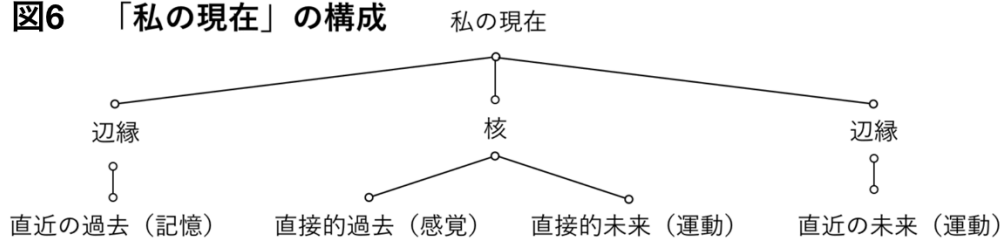
では、ジェイムズ的な見かけの現在の辺縁に相当する部分についてベルクソンはどう考えていたのだろうか。以下のテキストでは、「私の現在」の幅がその核よりも広く捉えられていることがわかるだろう⁶⁶。

[...] 私が「私の現在」と呼ぶものが、私の過去と私の未来の双方にはみ出している (empiète) ことは全く明らかである。まず私の過去について言えば、それは「私が語っている瞬間は、すでに私から遠のいている」からであり、また私の未来について言えば、その瞬間が傾いているのは未来に対して [...] だからである (MM, 153)。

まずここで言われる「私の未来」が、先に「直接的な未来」と呼んだもの以外に、感情ないし運動が提示する身体の行為の未来である。他方、「私の過去」については、意識の諸平面理論や注意的再認によって与えられるイメージ記憶によって構成されるものだと言うことができる。そして、この私の過去について、MMは『心理学原理』と同様に、「辺縁 (frange)」(MM, 90) というタームを用いていることを踏まえれば、「私の現在」に含まれる「私の過去」およびそれと対照的に語られる「私の未来」は、ちょうど「見かけの現在」の二つの辺縁に相当すると言って良いことになるだろう(以上をまとめたのが図6である)。

⁶⁶ MMにおいてはこのテキスト以外に、明示的に「私の現在」の過去方向の辺縁について述べているものは見当たらないが、後の講演ではその存在を積極的に認めている (cf. PM, 168-169 および ES, 55-57)。

図6 「私の現在」の構成



さて、その後ベルクソンはジェームズに宛てた書簡の中で、以上のような『心理学原理』の主張を批判するとは言わないまでも、自らの主張と対立するものとして位置付けている。上の例を用いつつ、その要旨を述べれば次のようになるだろう。

まず、C-D-Eのような感覚の流れについて、『心理学原理』は、CやDといった要素を「休息の場所 (resting-places)」ないし「実体的部分」(substantive parts)と呼び、それらの「間で」生じる流れである「飛翔の場所 (places of flight)」ないし「推移的部分」(transitive parts)から区別する(以上、PP, 243)。一方のベルクソンは、こうしたジェームズの考えについて「私は、休息の場所そのものの内に、飛翔の場所を見出します——その見かけの不動性は、意識の不変的な眺めによって与えられるものなのです」(M, 580)と述べて、実体と推移——休息と飛翔——という区分の妥当性に疑問を呈している⁶⁷。これは要するに、ベルクソンは、ジェームズのように二項の間ではなく、単一の項それ自体のうちに流れを見て取っているということである。だがそうすると、「見かけの現在」とは別の仕方で、流れの意識を説明する必要が生じるだろう。

上のモデルのP1において、流れの意識は、過去の記憶C、現在の感覚D、未来の予期Eといった時間様相の差異を有する複数の項が同時に経験されることで与えられるものであった。そういった発想を拒否し、流れの意識が単一の項によってすでに与えられるのだと主張したいなら、現在の感覚だけによってその意識を説明しなければならなくなるだろう。実はこの点についての説明を与えるのが、先にみた「私の現在」の核であると考えることができる。

どういうことか、先に引用したテキスト(MM, 153-154、本稿4-1-3)を念頭に置きつつ、説明していこう。この核が与えるのは、本稿のこれまでの区分で言えば自動的再認の水準ですでに与えられているような経験である。ボールがこちらに飛んでくるのが見えれば、とっさに避

⁶⁷ ジェームズ解釈としては異論がありうる。というのも、Girel [2011]によれば、「休息の場所」の不動性は相対的なものでしかないからである。

ける、対象がよく見えなければ、目を細めたり近づいたりする⁶⁸——我々の日常的な経験の大半を占める、そうしたほとんど自動的な振る舞いに伴っているのが、ここでいう「身体についての意識」である。そして、その内で与えられる感覚から運動への移行を、ベルクソンは「流れ」と呼んでいる。ここで問題となっている、感覚と運動は、CやDといった内容のように、相互に区別可能なものだろうか。そうではない。上に挙げたような例において、我々はそうした区分を見出すことはないからである。私の現在における感覚から運動へ——直接的過去から直接的未来へ——の変化は、「捉えがたい進展 (*l'insaisissable progrès*)」(MM, 167 強調引用者)なのである。だが二項間の移行ではないような流れとは一体何か。それは、我々の身体の行為の実現である。日常的経験において我々には常に、知覚空間の拡がりに対応する「直近の未来」、すなわち様々な行為の可能性が与えられている。そうした膨大な選択肢のうち、受容された印象(感覚)によって選択されたものが、「実現される運動」へと「変化する」。この過程には、行為の可能性の現実化という明確な「方向」(MM, 153)があり、それゆえに、我々は、複数項間の移行とは異なる仕方で時間の流れを感じることができるのである。

さて、このような発想は実は、流れの意識についての『心理学原理』の理解に対して、一般的に指摘される困難の解消ともなっている。その困難とは、流れの意識の直接性の問題である⁶⁹。一方で、ジェイムズのような理解を取れば、たしかに流れの意識についての一定の説明は与えられたことになる。だが、その説明の大半を担っているのは、現在の感覚ではなく過去の記憶と未来の予期である。すると、流れの意識それ自体は、現在の色や音の知覚についての意識と同等の鮮明さなし直接性を有していないということになる。しかしこのことは、少なくとも我々の日常的な直観とは相容れないように思われる。他方で、MMの議論は、行為の実現という観点から流れの意識に説明を与えることで、その意識の直接性を容易に認めることができる。というのも、「私の現在」の核は、その辺縁と異なって、色や音の知覚と同様、現在という単一の水準に位置付けられる感覚と運動のセットによって構成されるものだからである。

本章では、まず前章までの考察を下に、いくつかのテキストを横断的に検討することで、前の著作から暗黙のうちに改変されていた時間および空間の概念に一定の解釈を与えた。先に知覚の定義の場面ですでに登場していた反射の働き——可能的行為の提示——は、テキストを厳密に解釈するのであれば、実際には知覚というよりも情感によって与えられるものであることを示した上で、この機能によって可能になっている対象に対して何らかの行為を行う際に必要な時間的距離を基礎として、身体を中心として広がる同心円上に行動空間が発生すること、こ

⁶⁸ ベルクソン自身は具体例を与えていないため、ここでは同じく知覚における感覚と運動の役割を強調する Noë [2004] (pp. 1-2) が与えている具体例を用いた。

⁶⁹ この点については Dainton [2017] を参照。

の質的な空間を反省することで得られるのがMMにおける等質的空間であるという解釈を提示した。その上で、そのように改変された空間の一次元を切り出すことによって得られるのが、MMにおける等質的時間の原型であり、これに対応する実在的持続としての「私の現在」の核を成す部分においてこそ意識の流れが行為の実現として与えられることを示した。さらに、形而上学の水準に移行し、MM第三章で提起される純粹記憶の存在論、そしてそれを基礎として示される意識の諸平面の理論に一定の解釈を与えた。まず、純粹記憶の存在は、出来事の想起経験が有するいくつかの特徴——場所をもたない、完了している、日付をもつ——を説明するために要請されるものであることを示し、その上で、記憶が残存しないように思われるのは、行動時間が象徴する時間直線が未来にしか開かれていないためであるという点を明確にした。そうした理解のもと、意識の諸平面の理論、注意的再認を確認し、それらを用いて、先にはその「核」しか問題にしてなかった「私の現在」を再検討した。これはDIでは、明示的ではなかった、持続そのものの構造の分析にあたる。ここまでの考察で、本稿は、自由行為の可能性の条件についての第二区分、すなわち行為の選択という条件について、必要な議論の検討を終えたことになる。次章の課題は、選択肢の提示というもう一つの条件についての議論において先送りにされていた、純粹知覚と収縮という二つの相補的な仮説の検討となる。

第5章 物質の形而上学

物質の形而上学の検討に移ろう。以下で展開する議論は、これまで何度も取り上げてきた逆円錐図の中では、平面Pの水準に最も関連するものである。というのも、本章が主題的に取り上げるMM第一章で提示された二つの相補的な仮説——純粹知覚理論と収縮理論——はいずれも、この平面そのものの構成に関わるものだからである。

5-1：純粹知覚理論

5-1-1：知覚と情感——二つの距離

だが、これらの仮説の検討に入る手前で明確にしておくべきことがある。それは、この平面P、すなわち、MM第一章が知覚と呼んだものの正確な身分である。確認したとおり、このPは、正確に解釈されるなら、限定された領域であって、これを超えて広がっているのが、「イメージの総体」ないし物質世界と呼ばれるものであった。そしてこのうち後者は、正確に言えば、行動空間——したがってまた、それを与える感情としての情感——によって与えられるものであるという解釈を本稿は提示していた。このことを念頭に置いた上で、再度、形而上学への移行の可能性を説いた、MM第四章の方法論（MM, 208）についてのテキストに立ち返ってみよう。そこでベルクソンは、「外的知覚」が呈する「具体的な延長」と、「能動性も形式ももたない空間」の分離可能性を主張し、前者を、我々でなく物質それ自体に帰属させようという方針を提示していた。こうした発想は、行動空間を反省することによって得られる等質的空間と、我々の実際の知覚の関係についてであれば、たしかに当てはまると言っても良いだろう。しかし、本稿がMMのうちに見出した行動空間は、行為の有用性に依拠し、それ自体が感情という形で意識される空間であって、その意味では一定の能動性と形式とが備わった空間であるように思われる。そしてそうした行動空間と知覚は、常に一緒に与えられる以上、通常の経験において、両者の分離可能性を主張することは不可能ではないだろうか。言い換えれば、我々が知覚によって具体的な延長を捉えていると信じているにしても、その延長は、実際には、行動空間に由来するものではないかという疑念が生じるのではないだろうか。問いをこうした形で提起するのであれば、先のように「反省の示す困難や矛盾なしには[...]疑うべきいかなる理由もない」といった仕方で懐疑の可能性を退けることは難しいだろう。というのも、目下問題となっているのは反省ないし思考という水準における空間ではなく、知覚という反省以前の水準における空間だからである。

とはいえ、この点についてベルクソンの見解を全く見出すことができないわけではない。というのも、MMは第四章において、（行動空間を生み出す）情感を知覚から明確に区別し、知覚はそれだけで距離の印象を与えると主張しているからである（MM, 241-242）。この点につ

いての理解を得るのに最も良い手段は、情感を欠いた知覚についてのベルクソンの見解を参照することだろう⁷⁰。そこで先天的な盲人が手術によって視覚⁷¹を回復した直後に得られる光景について、「外的知覚」についての講義録をみていきたい。

白内障の手術を受けた生まれつきの盲人が、それまで通常は触れることで再認してきた対象を初めて見て区別し名指すことができるということが確かめられたなら、たとえそれがただ一度の観察であったとしても、その事例は決定的なものとなるはずである。それ以外のすべての事例では異なっていたとしても、その相違は患者の置かれた例外的な条件に由来しているのかもしれないからだ。さて、フランツ⁷²が今世紀半ばに行った観察のなかにこの種の事実がすでに存在する。患者は初めて見た時に丸みを帯びた対象と角張った対象を区別していた。そしてまた最近の観察も、この点については必ずしも決定的なものではないが、少なくとも三次元空間の直接的知覚をもっともらしいものと見做すことを許している（CII, 326、強調引用者）。

これと反対の立場、つまり視覚に三次元の拡がり⁷³の知覚を一切認めない立場に対して、ベルクソンはいくつもの反証を挙げているが、その中心となっているのは、知覚そのものとその測定を区別するという考えである⁷⁴。

我々が、三次元空間の、視覚による直接的な直観を持っていることには疑いの余地がないように思われる。ところで、スコットランド学派の後天的な視知覚の理論から取り上げるべき確かなこと、それは、視覚には、距離を測定することも体積を構成する三つの次元の間の正確な数学的関係を決定することもできない、ということである。そうした測定は、対象に向かう我々の身体運動や、対象に沿った我々の四肢の運動によってのみなされ得る。したがって、眼が我々に奥行きや距離におけるさまざまに異なる知覚を与えるにとどまるのに対して、それを測定するのは触覚なのである（CII, 326-327）。

⁷⁰ 開眼事例を参照することについては、Jankélévitch[1959] (p. 108) から示唆を得た。

⁷¹ 本稿において基本的に視覚と知覚は同義語であるが、情動の混入がないことを強調する場合、知覚ではなく視覚の語を用いている。

⁷² 講義録では編者によってノートの記録が「フレーヌ」と修正されているが（cf, CII, 473）、誤っているのは編者の方である。というのも、1841年にフランツ（Franz）がそうした観察を行っていることが記録されているからである。この点については、鳥居[2000]を参照。

⁷³ 用語の上では明示的でないものの、引用部で問題となっている「三次元空間の直接的知覚」こそ、MM第四章で語られる「具体的延長」である、というのが本稿の理解である。

⁷⁴ Janet[1879] (p. 9) はちょうど開眼事例を解釈しつつ、「知覚」とその「評価（appréciation）」を区分しているが、ここでのベルクソンはおそらくこの区分を引き継いでいると思われる。

視覚と触覚——知覚と情動——が上手く組み合わせられていない開眼者が正確な距離を報告できなかったとしても、そのことから距離が知覚されていないということは決して帰結しない。いかに漠然としたものであったとしても、情動に還元されない知覚的な距離というものが存在するのである。以下ではこの意味での距離を、時間的距離から区別して、視覚的距離と呼ぶことにしたい。もっとも、日常的な生活においては「より有用な認識が[...]がそうでない認識にとって代わる」ことは「心理学におけるひとつの法則」(CII, 327)である以上、正常な経験、すなわち、知覚と情動が首尾よく協働している経験においては、時間的距離が視覚的距離に対して優位にある。しかし優位にあるからといって、前者は後者を消去してしまうわけではない。正常な経験においても、時間的距離の下に、いわば重ね書きされた状態で、視覚的距離が伏在しているのである。

さて、この種の視覚的距離の存在によって、知覚と情感の分離可能性をさしあたり確保できたこととしよう。実はこのことによって、我々は、純粹知覚に一歩近づいたことになる。先に見たように、MM 第一章は、記憶力の排除によって純粹知覚を特徴づけていた。しかし、その後で情感について一定の議論を提示した後、ベルクソンは、純粹知覚に到達するためには記憶力だけでなく、情感をも排除する必要があるとして、当初の仮説の「修正」(MM, 59)を行っていたのである。ところで今確認した開眼事例において実現されるような経験の状態は、情感が正常に働いていない——自動的再認が機能していない——状態であるから、視覚に関する記憶イメージの介入は当然認められないだろう。だが、開眼事例においても、一般に色の経験は——たえはつきりとした弁別はできなくとも——与えられる⁷⁵。とすれば、上で問題にしたような視覚というのは、情感と記憶イメージの介入はないが、収縮としての記憶力の介入は認められるような経験の状態、いわば準・純粹知覚(quasi-pure perception)とでも呼べるような経験だと言うことができるだろう。ところで、円錐図を厳密に解釈するのであれば(限定された)平面Pのうち、身体に相当するSを排除した残りの部分が、この種の知覚に相当すると言うことができる。純粹知覚理論と収縮理論という二つの相補的な仮説が説明を与えるのは、まさにこの領域である。

5-1-2：意識的全体としての物質

常識の観点から導き出された知覚の定義は、外的対象と我々の知覚の同一性を主張するものであった。純粹知覚理論とは、この同一性を、即自的な物質の水準でまずは確保するための理論だと言うことができる。ここで言う物質は、常識の観点から定義された「イメージの総体」としての物質ではない。というのも、純粹知覚からはあらゆる記憶力と情感が排除されて

⁷⁵ こうした点については鳥居[2000]を参照。

いる以上、それとの（部分的）同一性が語られる物質は、我々が日常的に目にするような対象の総体ではありえないからである。この点を抑えた上で、純粹知覚理論が展開される箇所を読み進めていくと、以下のテキストは、一見したところ奇妙に思われるだろう。

意識を演繹しようとするれば、それは非常に困難な試みとなるだろうが、ここではそれは全く必要ない。なぜなら、物質的世界を指定したことによって、イメージの総体が与えられたのであり、それ以外のものを与えることは不可能だからである。物質についてのどんな理論もこの必然性を免れることはできない。物質を運動中の原子へと還元するとしても、原子は、物理的性質を欠いていようとも、明るさを欠いた可能的な視覚や、具体性を欠いた可能的触覚との関係においてしか規定できない。原子を力の中心へと凝縮し、連続的な流体において回転する渦動へと解消するにしても、そうした流体や運動、中心は、それら自体、無力な触覚や、効力のない衝撃、色のない光との関係によってしか規定されないのである。そしてそれらはなお、イメージなのだ（MM, 31-32、強調引用者）。

奇妙に見えるのは、強調部である。この言い回しは、常識の観点からなされる場合にはなんら問題はない。というのも、確認したように、常識というのは、観念論と同様に、我々の表象＝イメージの分節がそのまま実在の分節であると考えた観点だったのだから⁷⁶。だが目下の議論が、純粹知覚理論という形而上学の観点からされている以上、この言い回しを常識の観点と全く同じ仕方で理解することはできないだろう。というのも、MM 第四章においてベルクソンは、形而上学の観点からすると、日常的な有用性に基づいた表象の分節はそのまま実在に対応してはいないということを強調していたからである。しかしここで注意すべきなのは、表象の分節がそのまま実在の分節であるという常識の観念論的側面のうち、分節の方は、形而上学の観点からは実在的ではないもの——身体の利害関心に相対的なもの——と見做されるのに対し、実在が（表象と同様に）意識的なものであるという主張は、形而上学の観点にも引き継がれる、という点である。というのも、目下の議論において説明が必要な平面 P は具体的延長ないし感覚質そのものである以上、イメージの観念論的規定のうち、意識的であるという特性は——認識主体からの独立性という実在論的規定と同様に——常識と形而上学という二つの観点に共通のものと見做すことができるからである。そして、上のテキストで問題となっている

⁷⁶ コルニバルは、まさにそのように解釈し（Cornibert[2012], pp.76-77）、「イメージの総体」は、「身体の極限」としての「私」が「世界」を「調べる（interroger）」「働き」によって「包摂」されているという独自の主張を展開している。ここでこの主張を詳細に取り上げることはできないが、本論のように MM 第一章のうちで形而上学と常識という二つの議論の水準を区別すれば、そうした仮説を立てる必要はないだろう。

のはまさにその意識という観点から考えた際に、イマージュの総体が与えられることの必然性なのである。

MM 出版の直前期に行われた形而上学講義 (CII, 426-427) を参照しつつ注釈していこう。「物質についての理論」ということでここでまず念頭に置かれているのは、「機械論」である。機械論にとって「物質の究極要素」である「原子」や「幾何学的延長」は、「想像される形 (forme imaginée) ではなく、考えられた形」でしかありえない。「しかし、あらゆるイマージュ [= 感覚質] を無視した場合、〔例えば〕円 (circonférence) の形とは何のことだろうか」。それは「一定の位置にある点から常に等距離にあるような仕方で平面上を移動する」という「法則」に従う「運動」だと主張されるかもしれない。「しかし」、とベルクソンは問う。「そうした運動は、依然として視覚的なイマージュ」であって、「日常的な言語においても科学においても運動とはつねに、想像力の目によって見られる、色をもった点が空間を動くときに残すあの跡 (trace) ではないのか」、と⁷⁷。同様のことは、「渦動」や「力の中心」といった他のさまざまな概念にも言えるだろう⁷⁸。「究極的要素」の候補となる概念を分析していくと、そこには必ず感覚質が現れてしまう——このことを表現したのが「可能的視覚」や「色のない光」といった奇妙な表現である——がゆえに、我々はそうした要素の集合体としての物質世界を「イマージュの総体」として、つまりはじめからその全体がある種の感覚質⁷⁹を伴うものとしてしか考えることができない。要するに、形而上学的水準における「イマージュ

⁷⁷ 実際には、ベルクソンがこの引用部の後で続けているとおり、「ラディカルな機械論」、つまり、「宇宙を、〔感覚質が完全に排除された〕数学的法則のシステムへ還元する」(CII, 428) 立場を考慮しなければならない。だが、この立場は、数学的法則に還元されない運動の实在性を主張する MM 第四章前半の議論がまさしく否定するところのものである。

⁷⁸ こう述べるとき、ベルクソンが、特定の物理学的見解にコミットしていないことは重要である。というのも、もしそうしてしまえば、イマージュの分節と实在の分節の対応という常識の観点に逆戻りしてしまうからである。ここには、科学理論が用いる語について、一定の規約性を認めるという後に強調されることになる立場がすでに示されていると言って良いだろう。EC において、ベルクソンは次のように述べている。「ある科学理論が決定的であるためには、精神が事物の全体をひとまとまりとして包括し、事物を相互関係において厳密に位置付けることができなければならないだろう。しかし、実際には、私たちは問題を一つ一つ提起せねばならず、それゆえ、その際用いられる用語 (termes) は暫定的なものであり、その結果、各々の問題の解決は、それに続く諸問題に与えられる解決によって、際限なく訂正されねばならないだろう」(EC, 207)。とはいえ、これは (科学理論についての) 反实在論的な立場の表明ではない。というのも、科学が用いる用語ないし概念でなく、それが規定する「関係」について、ベルクソンはそれが絶対的なものに到達することを明示的に主張しているからである。この点については、杉山[2006] (第二章第五から第七節) を参照されたい。

⁷⁹ ここで問題となっているのは、厳密に言えば、日常的な感覚質ではなく、物質的な感覚質である。だが、そうした感覚質は結局のところ我々人間にとっては思考不可能なものではないのだろうか。そうではない、とベルクソンはルシャラスに宛てて書いている。「こうした〔物質的〕意識は、〔音の〕各振動を一つの振動として知覚するが、それを、触覚でも視覚でもなく、聴覚的な形式の下で知覚すると想像することはできないだろうか。もちろん、我々はそうした形式についていかなる種類の感覚ももってはいない。しかしそれを考えることはできる (nous concevons cependant)。それはちょうど、聴くことができる最も低い音よりもさらに低い音について考えるのと同じことである」(Lechallas[1897], p. 331)。

の総体」の「知覚可能性」は、こうした概念的なレベルでの「必然性」に由来するものなのである。

5-1-3. 脳の役割——選別

以上でひとまず、形而上学の水準における物質世界全体が意識的であるという点が確保されたこととしよう。すると、我々が手にしているのは、それ自体意識的な全体としての物質と、そのうち身体の可能的行為に関係づけられた部分としての知覚ということになるが、この水準で、物質から知覚への移行はどのように考えられるのだろうか。

現前するイメージ、すなわち客観的実在としてのイメージを、表象されたイメージから区別するもの、それは、前者が従わざるを得ない次のような必然性である。すなわち、それは、自己の各点によって、他のイメージのあらゆる点に働きかけ、受け取るものの全部を伝え、各作用に対しては、等しいが反対の反作用を返さざるを得ず、結局、無際限な宇宙に波及する諸変化があらゆる方向に走るための通路に過ぎないのである。もし私にそれを分離させること、とりわけその外皮を分離させることができるのなら、私はそれを表象に変えるだろう (MM, 33)。

本稿第3章で見たように、常識の観点から出発したMM第一章は、まず、神経系ないし脳が（一般にそう見做されているように）表象を生み出す器官ではなく、行為の中枢であるという事実を、生理学・心理学の主張の検討を通じて取り出していた。ここで行為の中枢 (centre d'action) は、作用の中心でもある以上、物質世界の全体の「あらゆる点」から作用を被り、また反作用を返しているという点では、その他の物体と何ら変わりはない。異なるのは、脳に到達した外界からの作用のうちいくつかは、そこに蓄えられた運動の諸機構と接続されるがゆえに、即座に反作用として返されることがない——言い換えれば、実際の行為として遂行されるまでの間に時間がかかる——という点である。このことによって脳は、上の引用にある「分離」を行う器官と見做すことができるようになる。

具体例を与えておこう。物体A、Bがあるとすれば、これらは互いに作用を与え、またそれに対して即座に反作用を返すことになる。このうちBを我々の身体Sに、Aを「光点P」(MM, 39)に置き換えたとしよう。すると、PがSに作用を与えるとき、そのうちのいくつかは即座にはAに返されないことになる。というのも、PからSへともたらされた刺激のうちいくつかは、習慣として蓄えられた自動運動の機構——運動図式——を発動させるからである。だからここには、身体ないし脳による「選別 (sélection)」があることになる。同様のことを、Pのような個別の対象だけでなく物質世界に拡張して考えた場合に、世界全体に対して選

別された部分こそが純粹知覚なのである。ここで問題となる「選別」の働きは、行為の選択肢の構成そのものに関わるものである以上、複数の可能的な行為からの「選択 (choix)」とは明確に区別されるべきものであり⁸⁰、MM 第一章の章題——「イメージの選別について：身体の役割」——が指しているのはこの働きに他ならない。

5-2：収縮理論

では、収縮理論の検討に移ろう。予告したように、MM 第四章における収縮としての記憶力についてのベルクソンの記述は、純粹知覚よりもさらに不明瞭なものに留まっている。そのため以下では、(1) 質と量の対立の問題の解消という形で当該の議論を概観した上で、(2) 解釈上しばしば争点となるこの収縮という記憶力と、既出の二つの記憶力——習慣的記憶力と純粹記憶力——の関係について一定の解釈を提示するという形で考察を進めたい。

5-2-1：MM における多様体の問題——質と量

すでに見たように、DI は、我々の意識状態の呈する質と量の二つの概念を鋭く対立させていた。しかし、MM は質と量という二つの項の「接近 (rapprochement)」をそのひとつの結論としている。同書第四章によれば、色を典型とする「諸々の感覚質の異質性」は、「我々の記憶力」による無数の物質的振動の「収縮」に、「客観的諸変化の相対的な等質性」は、「それらの自然な弛緩に」、それぞれ由来するものとされる (MM, 202-203)。要するに、DI においては、「乗り越えがたい」「隔たり」(MM, 226) によって分かたれていた質と量が、MM では、収縮や弛緩といった「緊張の程度」(MM, 232) の差異しかもたないものと見做されるに至った、というわけである。

しかし質と量をめぐるベルクソンのこうした態度変更は、一見したところ明らかに問題含みだろう。上述の MM の主張は、煎じ詰めれば、我々の感覚の質は一定の程度をもつというものであって、この程度は、「0 から始まって、全ての中間的な程度を含む、連続的な段階に位置付けられる」⁸¹ものである。しかしこれは、後で述べるとおり、DI がそれを否定することから議論を開始した、内包量についての『純粹理性批判』の主張に他ならない。さらに言えば、MM において感覚質の程度が問題となる際に用いられる様々な語彙——収縮、弛緩、緊張等々——についてもまた、DI はその冒頭から空間的なイメージに依拠するものとして、意識の状態を語るのに相応しくないものとして否定的に扱っていたのである (cf. DI, 2)。それゆえ、一見したところ、MM における質と量の接近についての記述は、「自分が切り捨てたものを完全に

⁸⁰ Meillassoux[2007]もこれと同様の区別をしている。ただし、ベルクソン自身は、必ずしも「選択 (choix)」と「選別 (sélection)」を言葉の上で明示的に区別しているわけではない。

⁸¹ Worms[1997], p. 256.

復活させようとしている」⁸²かのように見えてしまうのである。そうでないとすれば、MMはいかにして感覚質の程度を語る事ができたのだろうか。

この問いに応じるために、まずは本稿第1章の考察を振り返っておこう。質および量の概念について、DIにおいては、二つの区別されるべき対立が認められていた。すなわち、(a) 単純な質は、その外的原因が成す量と、(b) 複合的な質は、それを空間化することで得られる量と対立する。これらのいずれにおいても量とは、まずもって質の欠如——構成要素の等質性——によって特徴付けられる数的多様体であるがゆえに、単純なものであれ複合的なものであれ質とは全く相容れないのである。だがそうだとすれば逆に、両者の接近を語るためには、等質性という数的多様体の第一の特徴を再考する必要があるだろう。

質と量の接近が語られるMM第四章のテキストは、まさしくその点から議論を始めている。

ところで、我々の具体的知覚の中で継起する異質的な諸々の質と、科学がこの知覚の背後の空間内に置く等質的諸変化とは、正確にいつどこが違っているのだろうか。第一のものは非連続的で、一方を他方から引き出すことはできない、これに反して第二のものは、計算に委ねられる。しかし計算に委ねるために、それらを純粋な量にしてしまう必要はない。それでは、それらを無に帰してしまうことになるだろう。それらの異質性が十分薄められ、いわば我々の観点から実際には無視できるほどになればそれで十分なのである (MM, 203)。

物質の諸変化ないし諸運動は、互いにほとんど質の差異をもたないが、だからといって、個々の運動が質を欠いているわけではない。MMにおいては物質的運動が「質そのもの」(MM, 227)と捉えられているために、DIと異なって、等質性は質の欠如でなく質の程度の低さを意味するようになっている——冒頭で示した感覚の程度の問題が現れるのは、まさにこの点においてである。では、その程度とは、より正確に言って何によって規定されるものなのか。

結局のところ、我々に選択肢はない。もし諸々の感覚質の多少とも等質的な基体についての我々の信念が根拠をもつならば、それは質そのものの内で、あたかもこの感覚が推測されながら感知されない細部を孕む (*grosse de détails soupçonnés et inaperçus*) かのよう、我々の感覚を超える何かを把握ないし判読させるような働きによる以外ありえない。とすれば、その客観性、すなわちそれが実際に与える以上にもつものは、まさしく、我々が示唆したよう

⁸² Deleuze[1966], p. 74. こう述べた後、ドゥルーズは『創造的進化』と『持続と同時性』の独自の解釈に依拠しつつベルクソンにおける一と多の問題を論じているが、(1) これは本稿が扱っているものとは本質的には別の問題であること、また(2) 本稿の射程はあくまでDIとMMであるという二つの理由から、以下では扱わない。ドゥルーズによるベルクソン解釈が多くの点においてベルクソンのテキストに忠実ではないという点については、岡嶋[2019]を参照されたい。

に、それがいわば藪の中で行う非常に多数の運動 (*immense multiplicité des mouvements*) にあるだろう。それは表面では動かず横たわっているが、深部では生きて振動しているのである (MM, 229)。

感覚質に「細部」が、つまりは部分が認められているという点が決定的に重要である。ここでベルクソンは、かつて表象的感覚に見て取っていた「単純さ」を「見かけ」のものに見做し (cf. MM, 278)、DI が深い感情や持続をひとつの多様体として定義したのと同様に、感覚の質それ自体を、ひとつの「多様体」と規定しているのである (*multiplicité* の語は、上の引用部に限らず、関連するテキストで度々用いられている。cf. MM, 73, 230, 278)。そこでこれを以下では、*感覺的多様体 (multiplicité sensible)* と呼ぶことにしよう。

さて、ベルクソンは、この多様体はその構成要素を連続的に減じていくことで、「徐々に純粹な振動と一致する」ようになると考えている (cf. MM, 227-228)。とすれば、感覚質の程度は、*感覺的多様体*の構成要素の数によって規定されていると考えることができるだろう。そうであれば、この新たな、いわば第三の多様体に関して、DI が複合的な質について提起していたのと同様の問いを立てるべきだろう。ベルクソンは、意識の複合状態が呈する質について、まさにそれが複合的であることによって何らかの量的な観点を導入してしまっているのではないかという懸念に応じる形で、「我々の意識状態の多様体は、数の単位の多様体と、いくらかでも類似性を有しているのだろうか」(DI, 68) という問いを立て、二つの多様体を明確に区別することで、否定的な答えを与えていた。しかし、DI においては単純なものに見做されていた質そのものが、実はひとつの多様体であることが判明した以上、単純な質についても暗黙裡に量的な観点が導入されているのではないかという疑念が生じるはずである。そこで、本稿が冒頭で提起した問いを、次の二つの問いへと書き換えよう。すなわち、(1) *感覺的多様体*は数的多様体と同一視可能なものなのか、(2) そうでないとすればそれはいかなる多様体なのか、と⁸³。

さて、本稿のこれまでの考察を踏まえるなら、*感覺的*と形容した多様体が収縮によって構成されるものであること、そしてその構成要素の各々は(それ自体物質の一部であるところの)純粹知覚であることは明白だろう。そして、この後者の点から、上の問いのうち最初のものに

⁸³ (言葉遣いや論点にズレはあるものの) 第一の問いを最初に提起したのは、エリー・アレヴィである。MM において質と量の対立を緩和する際に用いられる強度や程度といった概念の含意を問われたベルクソンは、強度概念に上述の二つの意味を区別し、問題となっているのは(本稿の言葉でいう)複合的な質としての強度であると応じている (M, 434)。だがこの点に関する両者のやりとりはすれ違っていると言わざるをえない。というのも、MM 第四章で問題となっている強度は、明らかに感覚質という単純な質のそれだからである。これはおそらく、直前のプロに対する応答で MM 第三章の純粹記憶との関連で用いられる緊張や程度を話題にしていたがために、ベルクソンがアレヴィの質問の意図を十分に汲み取れていなかったためだろうと思われる。

は、直ちに否定的に答えることができる。というのも、純粹知覚を構成要素とする以上、感覺的多様体は、数的多様体の二つの特徴のいずれをも共有していないからである。すなわち、多数の純粹知覚は、すでに述べたように、（それ自体一定の感覺質を有する）物質の一部であるがゆえに等質的なものではなく、（例えば）「点 P」（MM, 39）という同一の場所に位置付けられるために、相互外在的なものではないのである。

では数的なものではないとして、目下問題となっている多様体は、どのような多様体なのか。この第二の問いに応じるにあたって、感覺的多様体を質的多様体と比較してみたい。するとまず、両者は構成要素の相互浸透という特徴を共有していることがわかるだろう。というのも、多数の物質的振動を綜合することで、その各々が有する質——物質的な質——には還元不可能な、新たな質——我々の感覺質——を発生させるのが収縮の働きだからである。では、もうひとつの特徴である構成要素の異質性についてはどうか。感覺的多様体の各構成要素はそれ自体一定の（物質的な）質を有する以上、一見したところ、この特徴も、二つの多様体は共有していると思われるかもしれない。だが注意しよう。問題は、感覺的多様体の構成要素が互いに異なる質を有しているかどうかである。

まずもって、多数の物質的振動は、それ自体では互いに異なる質を有してはいない。というのも、ここで想定されているのは、同一波長の赤色光の無数の振動といったような、同一のタイプの物理現象の反復だからである⁸⁴。では件の諸要素は、我々にとって、つまり収縮されることによって、互いに異なる質を呈するようになるのだろうか。予め述べておけば、そうではない、というのが本稿の主張である。この点を考えるにあたって再び重要となるのが、先に見た (a) 収縮と投射という二つの記憶力の区別、そして (b) 幾何学的なものとの具体的なものという二つの延長の区別である。順次みていこう。

(a) まずは、質的多様体ないし持続の形成にかかわる記憶の保持は、MM の枠組みで言えば、現実化された純粹記憶を投射することによって可能となるものであることを指摘しておこう。というのも、DI で問題となっていた「記憶 (souvenir)」（DI, 78）が習慣的記憶でなく、出来事ないしイメージ記憶に相当するものであることは明らかだろうから。

その上で強調したいのは、投射のプロセスの起点となる純粹記憶は、保存に際して付される「日付」をその本質的な特徴のひとつとしていた、と言う点である。DI において度々用いられる「鐘」や「ハンマー」（DI, 91）の打音の継起のように、それ自体では質的な差異をもたない物理的反復が、我々にとって現在・少し前・より以前といった仕方で与えられる際に呈する

⁸⁴ もっとも、（例えば）二つの継起的な赤色光の振動であっても、厳密に言えば、微小な質的差異が見出されうるだろう。それゆえ、本稿は感覺的多様体の構成要素の質の完全な（タイプの）同一性までは主張しないが、そうした差異は、後出のミラヴェットが持続的数の単位のモデルとしているような「同一色の二つの色合い」（Miravète[2012], p. 216）の差異とは異なる水準で語られるべきものであると考えている。

時間的な差異は、MMの観点からすれば、純粹記憶が有する時間的な差異に由来するものなのである。これと対照的に、MMで新たに導入された収縮としての記憶力は、「現在の瞬間」(MM, 154)を構成するものである。それゆえ、この瞬間の内に含まれる諸要素は、その全てが(過去でも未来でもなく)現在に属するものであり、その意味で、時間的な差異を欠いているのである。

(b) さらに、すでに指摘したとおり、収縮された諸要素は、空間内の異なる場所に位置付けられるものでもない。この点で重要となるのが、MMにおける二つの延長概念の区別の導入である。DIにおいてベルクソンは、「物質」の「不可入性 (impénétrabilité)」は「物理的な次元の必然性ではなく、論理的な次元の必然性である」と指摘していた。ここで論理的というのは、「二つの物体が同時に同じ場所を占めることはできない」ことの必然性を指している。この命題の否定は、「二という数」がそもそも「空間における併置を含意している」ために、「矛盾を含意する」ことになる(以上、DI, 66)。したがって、空間が介入する限り、複数の事物が「同じ場所」を占めることは不可能なのであるが、知覚が有する具体的な延長を等質的空間から切り離れたMMの観点に立つなら事情は異なる。後者の場合、複数のものが、「同じ場所を占めることができない」ことには、物理的必然性はもちろん、論理的必然性すら存在しなくなる。それゆえに、収縮によって構成される感覚質の内部では、多数の振動が同一の場所でいわば共存することが可能となっているのである(先の引用部にある「繭」の比喩は、こうした事態を的確に表現するものであると言えるだろう)。

以上から、感覚的多様体の構成要素は、それ自体の質、時間、空間のいずれによっても区別されないため、互いに異ならない、と主張することができる。つまり、多数の物質的振動は、収縮されることによって、その各々が互いに異なる質を呈するようになるわけではないのである。ただし、すでに述べたとおり、このことは各要素の質の欠如を含意しない。そこで、感覚的多様体の構成要素のこうしたあり方を、等質性に代えて相互等質性 (*homogénéité mutuelle*) と呼ぶことにしよう。すると、相互等質的な要素は、ある種の「数」⁸⁵を構成するための基礎的な「単位」の役割を果たしているということができよう。そしてその数は、0から連続的にある一定の程度へと増大させることができるのであって、このことによって、MMにおいては、感覚質についてその程度を語るということが可能となっているのである。

⁸⁵ ある種の数というのは、このとき問題となっているのが、数的多様体が成す数でないことはもちろん、(メロディーの構成音の数のように) 質的多様体の内に漠然と「感じられる」ものですらなく、感覚の質の内にただ「推測」されるに過ぎない数だからである。なお、本稿の議論に最も密接に関連する先行研究として「数としての持続」という独自の解釈を提起している、Miravète[2012]を挙げることができる。本稿は、ミラヴェットと、ベルクソン哲学には、空間概念に依拠しない「特殊な数」が存在するという主張を共有するが、彼は本稿のように、複合的な質に認められる数と、単純な質の内部に認められる数とを明確に区別していない。また——これが最も重要な点であるが——彼が言う持続的数の構成要素は、本稿でいうところの相互等質性によって特徴付けられるものではない。

以上の議論をカント哲学と対比・整理しておこう。周知のとおり、『純粋理性批判』は、「知覚の先取」において、（線を引く場合のように）部分が順次総合されることによって得られる全体が有する「外延＝延長量（extensive Größe）」を、その都度の瞬間において把握される感覚の質に認められる「内包＝強度量（intensive Größe）」から区別し、後者は「無＝0からその量の与えられた度合いへと増大しうる」（B208）ものだと述べていた。DIは冒頭でこの区別の有効性を否定することから議論を始めていたのだが、それは、「延長的なもの」同士においては可能な「含むもの」と「含まれるもの」の関係が、「強度的なもの」の間では、一切見出されないためであった（cf. DI, 2-3）。しかしMMに至ると、空間概念そのものが実践的な観点から再考されることで、感覚そのものが（具体的な）延長であると思われることになった結果、少なくとも感覚（ないし知覚）という水準においては、強度と延長は対立する概念ではなくなる。だがそうだとすると、感覚が（DIの場合と同様に）単純な質でしかないのであれば、それについて程度という量的な表現を用いることは不可能だったであろう。この点において、MMにおける収縮という記憶力の概念の創造は決定的に重要であったとすることができるといえる。というのも、この働きによって感覚質は新たに一つの多様体と思われるに至ったのであり、その結果、（例えば）我々人間の日常的な感覚質は物質的な質を「含む」（MM, 231）というように、二つの異なる質ないし強度の間で含むものと含まれるものとの関係を規定することが可能となったからである。

5-2-2：三つの記憶力——心身の結合

以上に見てきたように、MMには収縮としての記憶力と習慣的記憶力、そして純粋記憶力という三つの記憶力が存在する⁸⁶。これらの各々には、現在の構成、自動的再認、そして純粋記憶の現実化といった機能の相違が確認されたものの、いずれについても同じ記憶力（mémoire）という語彙が用いられている以上、何らかの関連を認めないわけにはいかないだろう。この点について、ベルクソンは次のように述べている。

しかし我々は、記憶力のこの二形態を根本的に区別しながら、その結びつきを示しておかなかった。〔a〕過去の行為の蓄積された努力を象徴する諸機構をもつ身体の上で、〔b〕イマ

⁸⁶ Worms[2004] (p. 153) は、ここに示した区分そのままに「三つの記憶」があるとし、習慣的記憶力と純粋記憶力の二元性を残しつつも、収縮的記憶力が結節点となって、二元の統一が可能となっていると解釈しているが、これらの関係を明確にしていまいかと思われる。また、Deleuze[1966] (p. 73) の解釈は、最終的に純粋記憶力にすべての記憶力を集約するという点においては本稿の解釈に近いが、純粋記憶力の向かう先である「物質そのもの」を「無限に弛緩した過去のようなもの」と捉えることによって、物質までも記憶の側に還元してしまっているように思われる。本稿の立場は、物質と記憶力の二元性はあくまで維持しつつも、記憶力については一元的に捉える点で、これら両者とは明確に区別されるものである。

ージュ化し反復する記憶力は宙に浮いていた。しかし我々は直接的過去以外を決して知覚することがなく、〔c〕現在についての我々の意識はすでに記憶力であるとするれば、はじめに分けておいた二項は密接につながって一緒になろうとする。じっさいこの新しい視点から見ると、我々の身体というのは、我々の表象の変わることなく再生する部分、常に現前する部分、というよりもむしろ、あらゆる瞬間にちょうど過ぎ去ったばかりの部分に他ならない (MM, 168)。

順に注釈していこう。まず、最初に述べられている「二つの形態」が、(a) 習慣的記憶力と (b) 純粹記憶力にそれぞれ対応する、という点は良いだろう。しかし、その後述べられる「直接的過去」というのは、現在の瞬間のうちに含まれる物質的な過去であるから、この箇所の問題となっているのは (c) 収縮としての記憶力である。ベルクソンは、この収縮という記憶力という観点から、先立つ二つの記憶力の結びつきを理解することが可能になると述べているのである。この点を押さえた上で、「我々の表象」とは逆円錐図でいう平面 P に相当することに注目しよう。この平面の構成には、収縮の働きが不可欠であることはすでに指摘したとおりである。しかし MM は、この平面のうち、S に相当する部分について明確な規定を与えていない。言い換えれば、それ自体物質世界の一部として定義される純粹知覚には、収縮の働きが及ぶことが主張されていたのに対し、身体の一部として定義され、したがって習慣的記憶力の別名でもある情感と収縮としての記憶力の関係は不明瞭なものに留まっているのである。だが、MM 第一章において情感概念が知覚の特殊事例として導出されたことを想起するなら、情感もまた、(準・純粹) 知覚と同様、収縮の働きによって構成されるものだと考えることにならざる支障はないだろう。そしてそのような解釈を採るのであれば、習慣的記憶力は、本質的には、収縮的記憶力が生じさせるもの、その意味で収縮の働きに依存したものだと思ふことができる。

したがって、真の問題は、習慣的記憶力と純粹記憶力の関係というよりも、むしろ後者と収縮的記憶力がどのような関係にあるのか、ということだろう。この点についてベルクソンは明示的なことは何も述べていないが、語彙の連関によって示唆は与えている。まず、ベルクソンはときおり、先に本稿が見たような純粹記憶の現実化に関わる働きだけでなく、収縮的記憶力に相当する働きをも、「純粹記憶力」(cf. MM, 278) と呼んでいるという点。このことから考えられるのは、収縮もまた、純粹記憶 (souvenir pur) が有する働きだろうということである。だが、記憶の現実化と現在の構成という二つの機能は一見したところ、何の関連もないように思われる。この点で解釈の手引きとなるのは、記憶の現実化の運動のうちのひとつである並進についても、MM 第三章は「収縮」(MM, 186, 188, 193) というタームを用いているということである。その際問題となっていたのは、もちろん、選択される意識の平面が底面 AB に比し

てどの程度収縮（ないし弛緩）しているかということであって、直接的に現在の構成が論じられていたわけではない。だが、純粹記憶の収縮には程度があるということ、先にみた多様体の議論の観点と合わせて考えるのであれば、以下のような解釈を提示することができる。まず、収縮的記憶力の働きには、生命の階層ごとに応じた一定の程度があり、これは先にみた多様体の構成要素の数に対応するものである。しかし、この程度が各生物個体——ここではさしあたり人間の場合を考える——において、時間経過を通じて全く変わらず同一であり続けると想定すべき理由はない。もちろん、収縮的記憶力は、色を典型とする感覚質の差異を規定するものであり、（例えば）それまで赤色に見えていた郵便ポストが突如紫に見えることはない以上、現実の生活に支障のない範囲で、この程度は一定である必要がある。しかし逆に言えばその範囲において、収縮的記憶力は可変的な程度をもつことができ、これがそのまま意識の諸平面の理論における収縮と弛緩の程度に対応するものだと見做すことができれば、同じひとつの純粹記憶力が、記憶の現実化と現在の構成という二つの機能を有しているのだと考えることができるだろう⁸⁷。要するに、純粹記憶力は、経験の流れの中でその都度一定の意識の平面に身を置くと同時に、平面Pと身体Sとを一緒に構成するのである。

記憶力についての全ての議論を終えたいま、本稿第4章で触れた純粹記憶が「日付」をもつという事態が十分に理解できるようになる。すでに指摘したように、純粹記憶が特定の日付を有するという事は、以下のテキストに見られるように、複数の記憶の間に「順序 (ordre)」が認められるということを含意する。

意識は [...] それが通過した様々な状況のイメージを保持し、それらを継起した順序で並べる (MM, 89-90)。

⁸⁷ 純粹記憶の即自存在を確保するために本稿が訴えた過去の記憶の想起の体験にとっても、この二つの機能は必要なものである。というのも、過去の記憶を想起するためには、まずもってそれが想起される場所の現在が構成されている必要があり、またその現在に対して特定の出来事の記憶が現実化されなければならぬからである。しかしそうすると、結局のところ、想起体験はこれら二つの機能によって十分に説明されてしまい、純粹記憶の存在は不要なものになってしまうのではないか、という懸念が生じるかもしれない。こうした問題を最も明示的に示したのは、ドゥルーズ『差異と反復』に見られる以下の記述であるように思われる。「ムネモシュネ [=純粹記憶] は現在に還元不能であり、表象に優っている。しかしそれは、現在の表象を循環的なもの、無際限なものにしてしまう [...]。自らが基礎付ける (fonder) ものに対して相対的であること、自らが基礎付けるものの様々な特徴を借り受けていること [...]、それが基礎 (fondement) の不十分さなのである」。こう指摘したあと、ドゥルーズ自身は、「[記憶の] 即自という幻想を、なおも表象の相関項であるものとして告発する [時間の] 第三綜合」(以上、Deleuze[1968], p. 119) についての議論へと移行するのであるが、その第三綜合が時間における「順序」を問題とするものであることから明らかなとおり、彼は本稿が取り上げている純粹記憶に内在的な日付ないし順序の問題を考慮していない。以下で示す議論が妥当なものであるとすれば、日付という特徴は、現実化と現在の構成という二つの機能のいずれによっても構成できないものであり、その意味で、純粹記憶の即自性を担保するものとして理解できるだろう。

〔…〕 眞の記憶力は、我々の諸状態を保持すると同時に、それらが生じるにつれて次々と (à la suite les uns des autres) 並べていき、各々の事実にその場所を、したがってまたその日付を刻印する (marquer) (MM, 168)。

こうしたいくつかのテキストに見られる日付や順序について、それらがどうして純粹記憶に認められるのかという点について、ベルクソン自身は何の説明も与えていない。しかしこれまでの考察を踏まえれば、次のような解釈を与えることができる。いま仮に三つの「私の現在」——M1、M2、M3——が与えられ⁸⁸、まず M1 が純粹記憶 S1 として保存されるとしよう。その上で M2 について考えると、M2 (の辺縁部分) の構成には、純粹記憶の現実化の働きが不可欠であり、またこの現実化の働きにはすでに保存されている全純粹記憶が介入する以上、M2 は S1 という純粹記憶についての情報をもつことになる。そしてこの M2 が純粹記憶 S2 として保存されるとすれば、S2 も当然、S1 についての情報をもつことになるだろう。同じことを M3 およびそれに対応する純粹記憶 S3 について考えるなら、S3 は S1 および (それ自体が S1 についての情報をもつ) S2 の情報をもつことになる。

さて、こうした入れ子構造を、あらゆる純粹記憶が有しているとすれば、個々の純粹記憶の間に順序の関係を認めることが可能となるだろう。というのも、より多くの (記憶についての) 情報をもつ記憶 (上の例では S3) は、より少ない情報をもつ記憶 (S2 や S1) よりも後に生じた出来事の記憶だと言うことができるからである。

本稿が冒頭で引いた MM の最後の一文を注釈する形で議論を終えよう。再度引用する。

こうして、自由は、時間においても、空間においても、常に必然性の中に深い根を下ろし、必然性と密接に組織されているように思われる。精神は物質から知覚を借り受けて、それを自分の糧とする。そして知覚を改めて運動の形で物質に与え返すのだが、そこにはもう精神の自由が刻まれているのである (L'esprit emprunte à la matière les perceptions d'où il tire sa nourriture, et les lui rend sous forme de mouvement, où il a imprimé sa liberté) (MM, 280)。

まず、「空間において」ということで問題となっているのは、純粹知覚理論である。それによれば、我々の知覚は、純粹な状態においては、即自的な物質世界全体から、脳によってただ選

⁸⁸ ここで問題としているのは、「核」だけでなく「辺縁」まで含めた意味での「私の現在」である。なお、M1、M2、M3 といった区分は議論を明確にするための便宜的なものであって、実際にはそのように判明な区分の存在を認める必要はない。また、伊佐敷[2016]は、DI が持続に拒否したはずの「順序」の関係を MM が再導入してしまった点を批判しているが、ここで問題となっている「日付」や「順序」は、(DI の場合のように) 空間の介入によって初めて得られるものではない。

別された部分にすぎない。他方、「時間において」という表現は、収縮理論および純粋記憶理論を指している。前者によれば、我々は記憶力によって、多数の純粋知覚を収縮することで、我々の現在を構成する。確認したとおり、こうして構成された（準・純粋）知覚と情感が組み合わせることで、我々には行為の選択肢が与えられるのだが、これは要するに、我々は、物質の部分であるところ純粋知覚を素材としつつ、そうした選択肢を「創造」（MM, 280）しているということである（「精神は物質から知覚を借受け」る、というのはこうした事態を指している）。さらに純粋記憶理論を踏まえるのであれば、そうして得られた複数の選択肢からの選択には、様々な程度において我々の過去の総体である純粋記憶が介入していることが理解できるだろう。それゆえに、その選択の結果実現する行為には、「すでに精神の自由が刻まれている」のである。

本章では、自由行為の可能性の条件の第一区分である選択肢の提示という条件が先送りしていた二つの形而上学的仮説——純粋知覚理論と収縮理論——を検討した。まずは明示的な議論を示していない開眼事例について、心理学講義の議論を参照しつつ、実際の知覚と情感の分離可能性を示し、情感から切り離されているが収縮としての記憶力は前提としている知覚の水準——準・純粋知覚——を確保することで続く議論の前提を明確にした。その上で、純粋知覚理論の文脈においてベルクソンは、常識の観点から為されるとは異なり、物質全体が意識的な質を有することの必然性を主張していることを示し、そうした全体からの選別こそが脳が果たしている役割であることを確認した。収縮としての記憶力については、DIとMMにおける質および量概念についての理解の対立という形で問いを立て、それを解消する過程で見出される第三の多様体の概念によって、我々人間の感覚質から物質的な質までの段階的な移行が可能となっているのだという解釈を提示した。そして最後に、その理解に基づき、MMの解釈上最も理解が困難な三種の記憶力について統合的な理解を提示した。

結語——行為の形而上学に向けて

本稿の各章の要約はそれぞれの章末に示したので、ここでは、自由行為の可能性の条件の探求という観点から、MMに関する全体の議論を手短に整理し直した上で、ベルクソンが最も程度の高い自由行為と呼ぶ水準について、以上の考察から導かれる帰結を述べて結びとしよう。

繰り返し述べてきたように、自由行為が可能であるためには、まずもって (i) 身体に対して複数の選択肢が提示され、さらに (ii) それらの間でひとつが選択される必要がある。(i) については、まず MM 第一章で暫定的に定義された知覚——身体の可能的行為と関係付けられた諸対象——から導かないし要請された諸概念——情感、純粹知覚、収縮——が、総体として行為の選択肢を構成するものであることがわかるだろう。すなわち、まず多数の純粹知覚が収縮されることで、本稿が準・純粹知覚と呼んだ状態が成立し、この意味での知覚が情感と組み合わせることで、複数の可能的行為という形で行為の選択肢が意識されるに至るのである。

(ii) についても同様に、MM はまず第二章で暫定的な二つの選択の方式——自動的再認と注意的再認——を区別した上で、さらにそれら（とりわけ二つ目の再認）の可能性の条件を探求するという形で考察を進め、純粹記憶を基礎とした意識の諸平面の理論を提起したのだが、その理論は、二つの選択の方式に対して包括的な説明を与えると同時に、DI で自由に認められた連続的な程度の存在を確保するものともなっているのである。以上の (i) と (ii) を表現したのがそれぞれ順に、逆円錐図における平面と円錐に相当することを考えれば、ベルクソン哲学を象徴するあの図はまさに、自由行為の可能性の全条件を表現したものであると見做すことができるのである。

さて、本稿が示した解釈に一定の妥当性があるとすれば、MM で論じられた自由行為とは、基本的には、「生にとっての有用性 (utilité vitale)」（MM, 273）ないし「生への注意 (attention à la vie)」（MM, 193）に支配されたものであると言えるだろう。上で述べた選択肢の構成にせよ、そこからの選択にせよ、全てが行為者の生ないし生活にとって当該の行為が有用となることを目指して行われるプロセスなのである。この点がとりわけ明示的に示されているのは、意識の諸平面の理論を用いて、人間の性格の類型とでも言うべきものが提示される議論である。確認したように、通常我々の経験は、行動と夢の二つの極の間を絶えず駆け巡っているのであるが、ベルクソンは両極だけに身を置く衝動人と夢想家の二つに加え、「行為

⁸⁹の人 (homme d'action) 」 (MM, 170) というもうひとつの類型を設け、次のように述べていた。

この調和の堅実性、すなわちこれら相補的な二つの記憶力が相接合する的確さにこそ、我々は「よく平衡のとれた (*bien équilibrés*) 」精神、つまるところ生活に完全に適応した人びとをみとめるのではなからうか。行為の特徴をなすものは、与えられた状況に関係あるすべての記憶を喚起して援用する敏速さである。しかしまた、彼にあつては、無用あるいは無関係な記憶が識閥に姿をあらわすとき、それらはまさに越えがたい障壁 (*barrière insurmontable*) にぶつかるのである (MM, 170、強調引用者)。

まず注意しておけば、行動と夢の二つの平面と対比させられているからといって、述べられているのは、この行為の人が身を置く面が円錐のちょうど真ん中に位置付けられるといった事態ではない。というのも、主張されているとおり、生活に完全に適合するために必要なのは、求められた際には過去の出来事を細部に至るまで思い出し、集中して作業をするときには余計な記憶をシャットアウトするといった、意識の平面の選択——先に述べた意味での並進の働き——の的確さだからである。とすれば、衝動人や夢想家も、単に行為や夢の平面に位置付けられるというよりは、それぞれが特定の平面にしか身を置けないこと、その都度の適切な平面の選択が不可能な人の類型として理解されるべきである。その上で指摘したいのは、生＝生活への注意という観点からすると、行為の人というのはたしかに「よく平衡のとれた」精神、その意味で「良識 (*bon sens*) 」 (MM, 170) をもった人と言えるのではあるが、DIが非常に程度の高い自由行為の具体例として引き合いに出していたような人物はこの類型にはどう考えても当てはまらない、という点である。先にも触れたとおり、ベルクソンは自我の全体が表現されるような非常に程度の高い自由行為の具体例として、モリエール『人間嫌い』の主人公アルセストの憤慨をあげていた。しかし、劇中のアルセストの様々な振る舞いというのは、表題の示すとおり、社会生活への適合性を欠いたものであり、問題となる憤慨はその顕著な例なのである。もっとも、そうした憤慨を典型とするような自由行為が、MMの枠組みと相容れないというわけではない。というのも、各平面は各々が当該の人物の過去の記憶の総体を含んでいる以上、そうした行為に対し、「その人物の歴史の全て」が「反映」 (DI, 125) されるという事態は、逆円錐の図によっても理解可能なものだからである。だが、少なくともDIが最も程度の高い自由の事例として挙げたような行為は、生ないし生活にとっての有用性という評価基準か

⁸⁹ 「行動」の平面は下等動物にも似た衝動人が位置付けられる面なので、原語としては同じ *action* なのだが、ここで問題となっているのが人間の「行為」だけであることを強調するために訳し分けることにする。

らすれば決して良いものではない、という点は強調に値するだろう。というのも、このことは、MMの方法論における常識と形而上学という二つの観点の区分と重要な関連を有しているように思われるからである。

確認したとおり、前者は生＝生活にとっての有用性と強く結び付けられているのに対し、後者はそこから一步退き、自由に行為する自我を反省することができる観点であった。MMの多くの議論が、常識の観点を問題としたものであることを考えれば、行為の人が、良識人として評価されていることも理解できる。有用性という観点からすれば、評価されるべきは、個別の行為ではなく、行為者が一定の期間に渡ってどの程度、生＝生活にとって適切な平面を選択できているかということだからである。だが、その評価はあくまで生＝生活にとっての有用性という観点からのものであって、実在についての真の認識という形而上学の基準を採るとき、自我の全体が表現されているような行為が評価されるのは、単に表現の程度が高いからというよりもむしろ、大抵の場合、そうした行為は生への注意という拘束から解放されたものであるからではないだろうか。そのように考えるとき、MMが常識の観点から問題とする「有用な行為」としての「自由行為」とは、生＝生活への従属という意味においては、不自由であると言うこともできるだろう。では、こうした新たな視点から、MMの議論を振り返った場合、「行為の人」と反対の、つまり有用性という基準を超出するような人物の類型とは何だろうか。MMが、「形而上学」⁹⁰を「有用な行為の諸条件から解放されるために」「努力する人間精神」(MM, 9)と規定していることを考えれば、それはそうした形而上学を遂行する哲学者自身に他ならないだろう。

そしてこのように考えるとき、カントが『実践理性批判』で論じたような意味での自由ないし行為の水準に相当する形而上学を、初期ベルクソン哲学のうちにも見出すことが可能となる。本稿のこれまでの議論は、理論理性という観点から自由の問題を扱うものであったため、以上の議論においては、カントの自由概念が参照される場合でも、道徳や倫理といった事柄は考察の対象となりえなかった。だが、以上の考察を踏まえた上で、DIの第一章における「深い感情」という意識状態の区分に立ち戻ってみると、そこでベルクソンが、「道徳的感情」のひとつである「哀れみ (pitié)」について、一定の見解を提示していたことに目が止まるだろう。

DIは、先に確認した「喜び」や「悲しみ」といった感情と同様に、哀れみの感情についても、「嫌悪から危惧、危惧から共感へ、そして共感そのものから卑下へ」という「質的進展」

⁹⁰ こうした局面で用いられる *métaphysique* という語彙には、身体ないし生理的な次元 (*physique*) を超える (*méta*) といったニュアンスを読み込んでも良いように思われる。そしてそのような観点から考えるなら、本稿の考察と、斎藤[2018] (とりわけ第I部) が論じる「自由」の諸問題は——扱われている論点も含めて——非常に近いものとなるように思われる。両者の比較検討は今後の課題としたい。

が見られると主張する。哀れみの最初の段階は、「思考によって他人の立場に身を置き、その人の苦しみを味わうこと」（嫌悪）であるが、「苦しみは本性的に我々のうちに恐怖を引き起こすものである」以上、そうした嫌悪感にはすぐさま「危惧」という別の感情が続くことになる。さらにこの危惧の感情には、「同類のものたち (semblables) 」の「苦しみを取り除きたいという欲求」、すなわち「共感」が伴うことになる。ベルクソンは、そうした共感は、「来るべき災禍の抜け目ない予見」ないし「打算」にすぎないこと、つまり「哀れみの低次の形態でしかない」ことがありうると指摘した上で、さらに次のように述べている。

真の哀れみは [...] 苦しみを欲することに存している。それは、軽微な欲望であって、その実現を目にしようとはまず思わないほどであるのに、それでも意に反して抱いてしまう欲望なのだが、それはあたかも自然が何か大きな不正を犯していて、我々にはその自然との共犯の嫌疑を一掃する必要があるかのようである。したがって、哀れみの本質は、卑下することへの欲求であり、下降することへの希求である（以上、DI, 14-15）。

哀れみの低次の段階で行われるのは、危惧や打算に基づいた行為、言い換えれば、生への注意に依拠した行為であるが、最も高次の卑下への欲求に基づく行為は、生＝生活にとっての有用性という自然の摂理から免れたもの、カントがいう強い意味での形而上学の水準にある行為だと言うことができるだろう。初期ベルクソン哲学において、この種の行為についての記述は上の箇所で示唆されるに止まっているものではある。しかし、ここには、晩年の著作 DS で示されることになる道德論の核を成すような発想が——萌芽的ではあるものの——示されていると読むことも可能だろう。というのも、引用部にあるような、最も高次の道德的感情が「意に反して」抱かれてしまうものであるという事態を、道德的な「責務 (obligation) 」の背後にある「力」として論じることになるのが DS だからである⁹¹。そしてそのように考えるとき、自由行為という主題は、DI や MM といった初期の著作のみならず、最晩年に至るまで——「持続」概念と同程度に——ベルクソン哲学を貫くものだと理解することが可能となるのである。

⁹¹ 実際、1893 年に行われた『第二批判』についての講義において、ベルクソンはすでに、「カントの〔道德哲学の〕利点は、道德法則の絶対的に責務的な (obligatoire) 性格を引き出したことにあるのだが、彼が責務に対してその全ての力を与えたのは、ただその説明を怠ることによってだった」（CII, 111）という批判を展開している。なお、DS における責務およびその背後で駆動する力という論点、またそれらとここで引いた DI の議論との対応については、杉山[2006]（第三章第三節）を参照されたい。

【文献表】

ベルクソンの著作

- Essai sur les données immédiates de la conscience*, PUF, 2007 : DI
Matière et mémoire, PUF, 2008, PUF : MM
L'évolution créatrice, 2007, PUF : EC
L'énergie spirituelle, 2009, PUF : ES
La pensée et le mouvant, 2009, PUF : PM
Les deux sources de la morale et de la religion, 2009, PUF : DS
Cours I, II, III, éd. par H. Hude et als., PUF, I : 1990, II : 1992, III : 1995 : CI, CII, CIII
Cours de psychologie, éd. par S. Matton, SÉHA, 2008
Mélanges, PUF, 1972 : M
Correspondances, PUF, 2002 : C

参照した邦訳

- 合田正人・平井靖史訳[2002]、『意識に直接与えられたものについての試論』、筑摩書房
田島節夫訳[2001]、『物質と記憶』、白水社
杉山直樹訳[2019]、『物質と記憶』、講談社学術文庫
原章二訳[2012]、『精神のエネルギー』、平凡社
原章二訳[2013]、『思考と動き』、平凡社
合田正人・谷口博史訳[1999]、『ベルクソン講義録 I 心理学講義／形而上学講義』、法政大学出版局
合田正人・谷口博史訳[2000]、『ベルクソン講義録 II 美学講義／道徳学・心理学・形而上学講義』、法政大学出版局
合田正人・谷口博史訳[2000]、『ベルクソン講義録 III 近代哲学史講義／靈魂論講義』、法政大学出版局

ベルクソン以外の著作と論文

- Alva Noë [2004], *Action in perception*, MIT press
Alain Badiou [1997], *Deleuze: la clameur de l'être*, Hachette
Gaston Bachelard [1962], *La Dialectique de la durée*, PUF
Renaud Barbaras [1998], *Le tournant de l'expérience: Recherches sur la philosophie de Merleau-Ponty*, J. Vrin

- Renaud Barbaras [2006], *Le désir et la distance: Introduction à une phénoménologie de la perception*, Deuxième édition, J. Vrin
- Milič Čapek [1950], « Stream of Consciousness and Duree Reelle », in *Philosophy and Phenomenological Research*, vol. 10, pp. 331-353
- Milic Čapek [1971], *Bergson and Modern Physics: A Reinterpretation and Re-evaluation*, Springer
- Jacques Chevalier [1959], *Entretiens avec Bergson*, Plon
- Nicolas Cornibert [2012], *Image et Matière. Étude sur la notion d'image dans Matière et mémoire de Bergson*, Harmattan
- Barry Dainton [2000], *Stream of consciousness: Unity and Continuity in Conscious Experience*, Routledge
- Barry Dainton [2016], 岡嶋隆佑訳、「中立一元論、時間経験、時間——ベルクソンへの分析的視座」、『ベルクソン『物質と記憶』を解剖する』、書肆心水、pp. 206-238
- Barry Dainton [2017], « Temporal Consciousness » in *Stanford Encyclopedia of Philosophy*
- Gilles Deleuze [1966], *Le bergsonisme*, PUF
- Gilles Deleuze [1968], *Différence et répétition*, PUF
- Gilles Deleuze [1983], *Cinéma I L'image-mouvement*, Les édition de minuit
- Joël Dolbeault [2012], « Le dualisme de Bergson à la lumière de la physique », in *Revue philosophique de la France et de l'étranger*, pp. 191-207
- Igor Douven [2017], « Abduction » in in *Stanford Encyclopedia of Philosophy*
- Sylvain Francotte [2004], *Durée et morale*, Academia
- Mathias Girel [2011], « Un braconnage impossible: le courant de conscience de William James et la durée réelle de Bergson », in *Bergson et James, cent ans après*, PUF, pp. 48-56
- Heinz Heimsoeth [1956], « Persönlichkeitsbewusstesein und Ding an sich in der Kantischen Philosophie » in *Studien Zur Philosophie Immanuel Kants I*, Kölner Universitäts-Verlag (邦訳「カント哲学における人格性の意識と物自体」(『カントと形而上学』(以文社、1981年))
- Jean Hyppolite [1971], « Aspects divers de la mémoire chez Bergson » in *Figures de la pensée philosophique*, t. 1, PUF
- Paul Janet [1879], « De la perception visuelle de la distance » in *Revue philosophique de la France et de l'étranger* », pp. 1-17
- William James [1890], *The Principles of Psychology* [PP], vol. 1, Henry Holt
- Vladimir Jankélévitch [1959], *Henri Bergson*, Quadrige, PUF
- Jean Jaurès [1891], *De la réalité du monde sensible*, Alcan
- Immanuel Kant [1988], *Kritik der reinen Vernunft*, Felix Meiner Verlag

- Georges Lechalas [1897], « Matière et mémoire d'après le livre de M. Bergson » in *Annales de philosophie chrétienne*, mai, pp. 147-164, juin, pp. 314-334
- Barthélémy-Madaule [1966], *Bergson adversaire de Kant*, PUF
- Quentin Meillassoux [2007], « Soustraction et contraction. A propos d'une remarque de Deleuze sur Matière et mémoire » in *Philosophie*, pp. 67-93
- Maurice Merleau-Ponty [1945], *Phénoménologie de la perception*, Gallimard
- Maurice Merleau-Ponty [1997], *L'union de l'âme et du corps chez Malebranche, Biran et Bergson*, Vrin
- Camille Riquier [2004], « Y a-t-il une réduction phénoménologique dan Matière et mémoire ? » in *Annales bergsoniennes II*, PUF
- Camille Riquier [2008], « Bergson d'(après) Deleuze », *Critique*, n° 732
- Camille Riquier [2009], *Archéologie de Bergson. Temps et métaphysique*, PUF
- Sébastien Miravète [2011], *La durée bergsonienne comme nombre et comme morale*, thèse de doctrat, Toulouse II
- Sébastien Miravète [2012], « La durée bergsonienne comme nombre spécial » in *Annales bergsoniennes V*, PUF
- Pierre Montebello [2003], *L'autre métaphysique. Essai sur Ravaisson, Tarde, Nietzsche et Bergson*, Desclée de Brouwer
- Pierre Montebello [2007], *Nature et subjectivité*, Millon
- Norman Kemp Smith [1918], *A Commentary to Kant's 'Critique of Pure Reason'*, Macmillan
- Frédéric Worms [1997], *Introduction à Matière et mémoire de Bergson*, PUF
- Frédéric Worms [2004], *Bergson ou les deux sens de la vie*, PUF
- 青山拓央 [2016], 『時間と自由意志：自由は存在するか』、筑摩書房
- 石井敏夫 [2001], 『ベルクソンの記憶力理論：『物質と記憶』における精神と物質の存在証明』、理想社
- 伊佐敷隆弘 [2010], 『時間様相の形而上学：現在・過去・未来とは何か』、勁草書房
- 伊佐敷隆弘 [2016], 「何が記憶を一行に並べるのか」、平井靖史・藤田尚志・安孫子信編、『ベルクソン『物質と記憶』を解剖する』、書肆心水
- 岡嶋隆佑 [2015], 「ベルクソンにおける知覚の諸相」、『哲學』、三田哲学会
- 岡嶋隆佑 [2016a], 「ベルクソンの時間意識論：『意識の直接与件についての試論』から『物質と記憶』まで」、『筑波哲学』、筑波大学哲学研究会、No. 24、pp. 25-38
- 岡嶋隆佑 [2016b], 「ベルクソンにおける収縮概念について」、『ベルクソン『物質と記憶』を解剖する』所収、書肆心水、pp. 239-251

- 岡嶋隆佑 [2017]、「ベルクソン『物質と記憶』におけるイマージュ概念について」、『フランス哲学・思想研究』、第 22 号、pp. 100-111
- 岡嶋隆佑 [2018]「ベルクソン『物質と記憶』における「私の現在」の概念について」、『現象学年報』、第 34 号、pp. 93-100
- 岡嶋隆佑 [2019]、「持続は一か多か：ドゥルーズ『ベルクソニスム』の諸解釈をめぐって」、檜垣立哉・小泉義之・合田正人編、『ドゥルーズの 21 世紀』、河出書房新社、pp. 330-349
- 岡嶋隆佑 [2020]、「初期ベルクソン哲学における質と量の問題」、『哲学』、日本哲学会編、第 71 号（掲載決定済み）
- 小関彩子 [1999]、「ベルクソンにおける自由と行為の問題：自我の二つの解釈を巡って」、『現象学年報』、第 15 号、pp. 187-189
- 斎藤慶典 [2018]、『私は自由なのかもしれない：〈責任という自由〉の形而上学』、慶應義塾大学出版会
- 杉山直樹 [2001]、「再認する生：『物質と記憶』再読」、『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』、第 8 巻
- 杉山直樹 [2006]、『ベルクソン：聴診する経験論』、創文社
- 藤田尚志 [2009]、「ドゥルーズか、ベルクソンか：何を生氣論として認めるか」、『思想』、第 1028 号
- 鳥居修晃・望月登志子 [2000]、『先天盲開眼者の視覚世界』、東京大学出版会
- 平井靖史 [2011]、「自由にとって時間とは何か：ベルクソンにおける可能性なき自由について」、『西日本哲学会年報』、第 19 号、西日本哲学会
- 平井靖史 [2016]、「現在の厚みとは何か？：ベルクソンの二重知覚システムと時間存在論」、平井靖史・藤田尚志・安孫子信編、『ベルクソン『物質と記憶』を解剖する』、書肆心水
- 牧野英二 [2012]、「物自体・対象・実在」、有福孝岳・牧野英二編、『カントを学ぶ人のために』、世界思想社
- 村山達也 [2016]、「潜在性とその虚像：ベルクソン『物質と記憶』における潜在性概念」、平井靖史・藤田尚志・安孫子信編、『ベルクソン『物質と記憶』を診断する』、pp. 20-36